
ドリトル先生と牛女

坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドリトル先生と牛女

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ドリトル先生が虫歯の治療を頼まれた相手は何と牛女、さて先生は牛女の虫歯を治せるのでしょうか。今回は妖怪と病気のお話です。

第一幕その一

ドリトル先生と牛女

第一幕 神戸の妖怪

この日先生のお家にお静さんが来ていました、今も普通に着物を着て猫の姿で先生とちゃぶ台を囲んでお話しています。

そこで、です。お静さんは先生に言いました。

「先生は妖怪にも詳しいわね」

「日本の妖怪にもだね」

「かく言う私も妖怪だしね」

その二本の尻尾を振りながら言います。

「猫又だしね」

「うん、それにイギリスはね」

先生の生まれたお国はといいますと。

「妖精と幽霊の国だね」

「それでよね」

「そうしたお話にはよく触れていて」

「知ってるわね」

「よくね」

そうだというのです。

「そのつもりだよ」

「そうね、日本の妖怪も多いでしょ」

「そうだね、幽霊のお話もかなり多いけれどね」

「妖怪もね」

「お静さんみたいな猫又もいるし」

まずはお静さんを見て言います、一緒にお茶を飲んでお饅頭を食

べながらお話をしている彼女をです。

「河童に一つ目小僧、塗り壁に一反木綿に」

「多いでしょ」

「から傘、砂かけ婆、子泣き爺に呼ぶ子とね」

「何か結構挙げていくわね」

「日本は妖怪のことを勉強しやすくして」

それでというのです。

「すぐに知ることが出来たよ」

「妖怪の本も多いしね」

「幽霊の本もね、日本には」

先生はさらにお話しました。

「漫画家さんで凄い人がいたからね」

「ああ、あの人ね」

「うん、水木しげる先生がね」

この人がというのです。

「本当に妖怪について凄かったから」

「先生が見てもなのね」

「日本だけじゃなくて世界の妖怪にも詳しくて」

「あの人はそうだったわね」

「世界一の妖怪学者と言ってもね」

「いいのね」

「そう思うよ、もう妖怪のことなら」

それこそというのです。

「誰にも負けていないよ」

「そこまでの人よね」

「うん、だから」

それでというのです。

「あの人の本を読んでね」

「妖怪のことを勉強しているのね」

「幽霊のこともね」

「それで先生も詳しくなって」

「それでね」

そのうえでというのです。

「今もね」

「勉強しているのね」

「勉強は一生だしね」

そしてというのです。

「妖怪のことはこれからもね」

「学んでいくのね」

「そうしていくよ」

「そうなのね、じゃあね」

お静さんは先生のそのお話を聞いてこう言いました。

「牛女のこととは知っているわね」

「この神戸、六甲の方にいる妖怪だね」

「やっぱり知っているのね」

「いるとは聞いているけれど」

「実際にいるのよ」

「そうなんだ」

「ええ、そしてね」

お静さんは先生にさらにお話します。

「あそこで元気になっているわ」

「そうなんだね」

「よかったら会ってみる？」

その牛女にもというのです。

第一幕その二

「どうかしら」

「そうだね、機会があればね」

「それじゃあね」

「そうさせてもらうよ」

「姫路城の姫様にもお会いしたし」

お静さんは先生にそのこともお話しました。

「先生は妖怪もどんどんお友達にしていっているわね」
「嬉しいことにね」

「そうそう、嬉しいって言うね」

「それがなんだ」

「その考えがね」

まさにということです。

「私達も嬉しいのよ」

「そうなんだ」

「先生は人間も生きものも妖怪も分け隔てしないでしょ」

先生のその公平さを言うのでした。

「そうでしょ」

「僕は差別はしないよ」

「絶対にね」

「それはよくないと思っているよ」

「そして実際にそうしていっているところがね」

まさにということです。

「皆が先生を好きになる理由なのよ」

「そうなんだね」

「じゃあよかったらね」

「牛女さんともだね」

「お友達としてね」

「付き合ってたね」

「それじゃあね」

二人でこうお話ししました、お静さんはそんなお話をしてから酒屋さんに帰りました。その後で、でした。

動物の皆先生がお静さんと一緒にお話をしている時も一緒にいた彼等は先生に対して尋ねました。その尋ねることはといいますと。

「牛女って誰？」

「神戸の妖怪って聞いたけれど」

「六甲の方にいるっていう」

「どんな妖怪なの？」

「一体」

「名前を聞くとね」

チーチーが言ってきました。

「牛の角が生えている人かな」

「そうした女の人かな」

ジップはチーチーに応えました。

「やっぱり」

「名前を聞くとそうだね」

トートーも言います。

「聞いた限りだと」

「そうね、まあ牛さんと関係あるのは間違いないわね」

ポリネシアもこう考えています。

「やっぱり」

「日本で牛の妖怪っていうと件かしら」

ダブダブはこの妖怪を思い出しました。

「牛の身体で人の頭の」

「予言するんだよね、件って」

「そう聞いているわね」

チープサイドの家族も件のお話をします。

「生まれてすぐにそうするって」

「これから何が起こるか言うっていうね」

「欧州じゃミノタウロスがいるけれど」

「牛の頭に人の身体の」

オシツオサレツはギリシア神話からお話しました。

「日本でも有名だね」

「ゲームでもよく出て来るね」

「そういうのかな」

ホワイティはポリネシアのお話に応えました。

「牛女って」

「まあ牛と関係が深いのは事実だね」

このことは間違いないとです、ガブガブは言いました。

「名前からして」

「僕達が今お話した中でそうした姿があるかな」

老馬はそこが気になりました。

「果たして」

「あるよ、牛女は身体は人間の女の人だけれど」

先生は皆に答えました。

第一幕その三

「頭はね」

「牛なんだ」

「そうなんだ」

「じゃあミノタウロスね」

「あちらなんだね」

「そうなんだ、噂ではね」

先生は皆にさらにお話します。

「戦争中にはもういたらしいよ」

「ああ、第二次世界大戦だね」

「今の日本で戦争っていうとあの戦争だね」

「あの戦争の頃にはもういたんだ」

「そうだったんだ」

「それで有力者の人達の間を行き来していたらしいんだ」

こう皆にお話します。

「予言をされると言われていてね」

「件みたいに？」

「あの妖怪みたいになの」

「予言をしていたんだ」

「これから何が起るのか」

「それで時の有力者の人達の間で匿われていて」

そしてということです。

「予言していたらしいんだ」

「そうだったんだ」

「何かって思っていたけれど」

「予言する妖怪だったんだ」

「多分件と関係があるね」

先生が思うところです。

「牛と人の姿で予言もするしね」

「というか姿件の逆じゃない」

「件は頭が人で身体は牛だから」

「牛女さんは頭が牛で身体は人」

「まさに正反対だね」

「そこはね」

「これまた牛から生まれたらしいし」

その牛女はです。

「これも噂だけれど」

「じゃあ本当に件？」

「件と一緒に？」

「そうなの？」

「そうかもね、それで空襲の時も色々な人に匿われていたらしいけれど」

それでもというのです。

「その中でね」

「空襲でその時匿われていたお家が焼けて」

「それでなんだ」

「外に出て六甲に逃れて」

「そうしてなんだ」

「今もいるらしいね」

その六甲にです。

「そう言われてるよ」

「そうだったんだ」

「何かって思っていたら」

「神戸にそうした妖怪がいるんだ」

「そうなんだね」

「僕が今勤務している八条学園もね」

この学園もというのです。

「妖怪や幽霊のお話が多いね」

「世界一の妖怪スポットって言われてるね」

「心霊スポットともね」

「あちこちに妖怪や幽霊が出るっていうお話があって」

「妖怪の種類も多いね」

「日本の妖怪だけじゃないし」

「世界各国の妖怪がいるね」

「あの学園は世界中から人が集まるから」

それということです。

「妖怪もね」

「多いんだね」

「世界中から集まって」

「そうなっているんだね」

「そうだよ、しかしね」

先生はさらに言いました。

「牛女のお話は学園にはないね」

「確かにそうだね」

「河童さんとかのお話はあっても」

「それでもね」

「僕達実際今はじめて聞いたしね」

「牛女さんのことは」

「若し機会があれば」

先生は皆にお話しました。

第一幕その四

「その彼女ともね」

「お会いしてだね」

「お友達になる」

「先生はそう考えているんだ」

「僕は人間も生きものの妖怪も同じだと考えているからね」

これが先生の特徴です、勿論人間の中の人種や宗教民族や文化の違いもあるにしても人間は同じだと考えています。

「だからね」

「それでだね」

「お静さんとも普通にお話してるし」

「姫路城のお姫様ともお付き合いがあるんだね」

「他の妖怪の人達とも」

「狐君や狸君達ともね」

彼等ともということです。

「そうしているね」

「ああ、そうだね」

「日本って普通に狐や狸が化けるけれどね」

「動物と妖怪の境目って曖昧だけれど」

「先生はお付き合いしているね」

「化けたり妖術を使う生きものは変化というね」

日本ではです。

「そうだね」

「そうそう」

「そう呼ぶね」

「そうだよね」

「日本ではね」

「そして妖怪変化という言葉通りにね」

先生は皆にこの言葉も出してお話します。

「同じものと考えられているよ」

「妖怪と化ける動物は」

「一緒だね」

「動物でも妖怪と同じだね」

「化けると」

「だからね」

それでというのです。

「僕は彼等ともね」

「お友達になれるんだね」

「化ける動物とも」

「そういうことだね」

「お静さんにしても」

猫又である彼女のお話もします。

「猫だね」

「そうそう、猫が長生きした」

「五十年以上生きたんだよね」

「だから猫だね」

「尻尾が二本あって化けても」

「猫だね」

「妖怪ではあるけれど」

それでもというのです。

「猫かっていうとね」

「猫だね」

「このことは変わらないね」

「そうだね」

「日本では生きものが長生きすると」

先生は日本のそのお話をさらにします。

「妖怪になるからね」

「色々な生きものがね」

「そうなるね」

「そういえばものもなるね」

「日本ではね」

「付喪神だね、ものも長く使っていると心を持って
そしてというのです。」

「顔や手足が出て動いたりするよ」

「喋ったりね」

「日本ではよくあるね」

「ものでもそうだね」

「この国では」

「森羅万象に神様がいて」

それぞれのものにです。

「そして生きものものもね」

「何でもだね」

「歳を経ると化けたりする」

「そうしたお国柄なんだね」

「それが日本だね」

「いや、そうしたことでも面白い国だよ」

先生の今の口調はしみじみとしたものでした。

第一幕その五

「本当にね」

「そうだね」

「動物が妖怪になって」

「ものもそうなる」

「妖怪と生きものの区分があまりない」

「そうした国でもあるね」

「人間も妖怪になるしね」

その場合もあるということです。

「日本では」

「何かそうしたお話もあるよね」

「幽霊のお話も多いけれど」

「人間も妖怪になるね」

「そうしたお国柄だね」

「生きものにもなるしものにもなるし」

人間がということです。

「そこはね」

「それぞれだね」

「そうだね」

「誰でも妖怪になって生きものにもものにもなる」

「人間にもね」

「生まれ変われば」

先生はこのお話もしました。

「それこそだね」

「もうそれ入れたらね」

「仏教の考えも」

「それこそ幾らでもあるね」

「日本にはね」

「漫画だけれど」

創作の世界でと前置きして言います。

「戦国大名が犬に生まれ変わるものもあるよ」

「戦国大名が犬って」

「その発想は凄いいけれど」

「考えてみたら日本ならではのね」

「その考えも」

「そうだね、日本は生まれ変わりの考えもあって
そうしてというのです。」

「あらゆるものがね」

「歳を取ったりするとだね」

「色々なものになるんだね」

「人間も生きものものも」

「人形が人間になる場合もあるよ」

その場合もあるよというのです。

「つららが妖怪になる場合もあるよ」

「ああ、つらら女」

「日本の妖怪だよね」

「雪女みたいな妖怪だったね」

「そうした妖怪もいるね、日本は」

「本当にあらゆるものが色々なものになる国で」

そしてというのです。

「妖怪もだよ」

「そうなるんだね」

「生きものがなったりする」

「ものもそうで」

「人間もだね」

「うん、そして牛女は」

この妖怪のお話に戻りました。

「どうもね」

「件と一緒にだね」

「予言する妖怪で」

「牛から生まれた」

「そうした妖怪なんだ」

「そうみたいだよ、そして今は神戸にいて」

そしてということです。

「六甲の方にね」

「いてだね」

「そこに行けば会えるかも知れない」

「そういうことだね」

「見た人もいるよ」

六甲でということです。

「どうやらね」

「そうなんだね」

「戦争ってもう二十世紀の半ばのことで」

「かなり昔のことよね」

「今となっては」

「七十年以上昔だよ」

「妖怪の寿命は僕達と違うからね」

先生はこのことは普通に言いました。

第一幕その六

「それこそね」

「普通に何百年だしね」

「死なないとか言うし」

「病気も何にもないとか」

「歌にもあるね」

「まあ実際は死んだり病気もあるけれど
それでもというのです。

「やっぱりね」

「かなり長生きだね」

「それこそ僕達よりも遥かに」

「何百年と生きていくから」

「七十年位だと」

「まだ若い位だよ」

妖怪にとってみればです。

「お静さんもそうだね」

「そうそう、あの人だってね」

「百年か二百年だった？」

「かなり長生きしてるのよね」

「そうだったわね」

「猫が五十年生きたら猫又になるから
だからだということです。

「もうね」

「少なくとも五十年は生きてるのね」

「猫又になるまでそれだけかかるから」

「じゃあもう牛女さんより長生き？」

「絶対にそうだね」

「それは間違いないね、狐が千年生きたら九本尻尾になるし」
所謂九尾の狐です。

「僕達なんかとてもね」

「及ばないね」

「その長生きさは」

「それこそね」

「比べ様がないね」

「何かもう死んだのかもって言う人がいるけれど」
牛女はです。

「今も目撃例あるしね」

「それでだよね」

「今だってあるなら」

「牛女さん今も六甲にいるね」

「そうだね」

「絶対にそうだよ」

先生は動物の皆に笑顔で答えました。

「あの人もね」

「じゃあ六甲に行くかね」

「その時はよね」

「僕達も牛女さんにお会い出来る」

「そうなんだね」

「その可能性があるよ」

先生は皆に笑顔でお話しました、そうしてこの日も学問に励みま
した。そして夜は王子がお家に来てでした。

先生にすぎ焼きの食材を持って来ました、勿論お肉もです。そう

して先生に対してこんなことを言いました。

「神戸牛だから」

「美味しいんだね」

「うん、凄くね」

こう言うのでした。

「だから皆で食べようね」

「それじゃあね」

「じゃあ今からすき焼き作りますね」

トミーも言ってきました。

「そうしますね」

「それではね」

「いや、和牛はね」

王子は笑顔で言いました。

「滅茶苦茶美味しいよね」

「そうだよね」

「お肉が霜降りになっていて」

「柔らかくてね」

「あの美味しさときたら」

それこそということです。

「牛肉だけだね」

「それでもだね」

「牛肉を超えた」

「そこまでのものがあるね」

「僕ははじめて食べて感激したから」

その和牛のお肉をです。

第一幕その七

「神戸牛のそれをね」

「だから僕にも紹介してくれたね」

「そうだったよ」

「そうだったね」

「そして先生に来日を勧めて」

「今の僕があるしね」

「そうだね」

「そう思うと僕と牛の縁は深いね」

先生の口調はしみじみとしたものでした。

「そうだね」

「もっと言えば動物皆とだね」

「うん、本当に僕はね」

「動物と先生の関係は」

「絶対のものだね」

「そうだよね」

笑顔でお話してでした。

皆で神戸牛のすき焼きを楽しく食べます、そこで先生は王子に尋ねました。

「神戸牛だから高かったね」

「いや、貰ったんだ」

「そうだったんだ」

「八条家の人からね」

「僕達の学園を運営している」

「あちらの人からかなり貰ったから」

それでということです。

「僕は今回は買っていないよ」

「そうなんだね」

「そうだよ、この前日本の皇室に我が国で採れたダイヤモンドをプレゼントしたら」

そうしたらということです。

「あちこちからお礼ってことでね」

「貰っているんだ」

「それでその人からはね」

「神戸牛のお肉をなんだ」

「貰ったんだ」

「そうだったんだね」

「つまらないものですがって言われて」

そしてということです。

「こんな凄いもの貰ったよ」

「その言葉は日本の礼儀だね」

「つまらないものって言うのは」

「それはね」

まさにということです。

「日本のね」

「挨拶だね」

「そうだよ、しかしそんなに貰っているんだ」

「我が国はいいダイヤの鉱山があるから」

「ダイヤを贈ることは」

「何でもないことで皇室の方にもね」

日本のこのお家にもということです。

「僕が日本でお世話になっているから」

「贈らせてもらったんだね」

「僕達にとってはささやかな贈りものだったよ」

「そうだったんだ」

「うん、けれどね」

それでもというのです。

「宮内庁から公にお礼の言葉が来たし」

「それは日本の宮内庁としてもね」

「当然のことなんだ」

「そうだよ」

「そうなんだね」

「そして王子ひいては王子の国が皇室に礼を尽くした」

このことはというのです。

「日本の多くの人が見て」

「そしてだね」

「贈りものをしているんだ」

「成程ね」

「王子もお国も立派なことをしたよ」

「本当に何でもないことだよ」

「いや、凄いことだったんだよ」

先生はとき卵に入れたすき焼きを食べつつお話しました。

「これがね」

「そうなんだね」

「そしてね」

「そして？」

「このお肉は本当に美味しいね」

先生は今度はこちらのお話をしました。

第一幕その八

「とにかくね」

「ああ、そのことだね」

「うん、やっぱり和牛は違うよ」

「そして神戸牛は」

「そう思うよ」

「今では日本でも牛肉は普通に食べられますけれど」

トミーも言ってきました。

「それでもですね」

「多くは輸入肉だからね」

「アメリカやオーストラリアの」

「そうしたお肉もいいけれど」

「やっぱり和牛の方が美味しいですね」

「だから世界的に注目もされているんだ」

「そうですね」

トミーは先生に頷いて応えました、お話をしつつすき焼きの中のお豆腐をはふはふとしながら食べています。

「今では」

「美味しいものは」

本当にと言う先生でした。

「皆注目するよ」

「そうですよね」

「だから和牛もだよ」

「今では世界中で注目されていますね」

「そうなんだ」

まさにということです。

「和食全体がそうだけれどね」

「日本酒もそうですよね」

「このお酒もね」

見れば先生はお酒も飲んでいますが、そのお酒は日本酒です。

「そうだよ」

「そうですよね」

「美味しいから」

飲みながら言うのでした、すき焼きを肴に。

「今ではね」

「世界的に注目されていますね」

「ワイスワインとか呼ばれてね」

「お米から造るからですね」

「そう、ライスワインだよ」

そう呼ばれているということです。

「これがね」

「そうですね」

「というかね」

ホワイティが言ってきました、動物の皆も先生達と一緒にすき焼
きを食べて心から楽しんでいます。

「先生もだね」

「そうだね、もう何かと日本に馴染んで」

トートーも言います。

「食べものもだから」

「髪の毛や目の色はどうでも」

ポリネシアも言います。

「先生は日本人よ」

「国籍もそうだったし」

ダブダブも言いました。

「完全にね」

「最近日本語で考えているんだよね」

「そうよね」

チープサイドはこのことをお話します。

「英語じゃなくて」

「そうなっているっていうし」

「もうそこまでいったら」

「日本人だね」

オシツオサレツも二つの頭で言います。

「着ている服も作務衣が多くなったし」

「座布団にも座るし」

「しかもお風呂大好きになったし」

ガブガブは先生の趣味のお話もします、毎日入浴しているのです。

「それならだよ」

「もう先生はイギリス生まれでも」

チーチーも言うことでした。

「日本人になったよ」

「ここまで日本人になるなんてね」

ジップの口調はしみじみとしたものでした。

第一幕その九

「最初は思わなかったよ」

「日本のことも物凄く知ってるし」

最後に老馬が言いました。

「もう完全に日本人だよ、先生は」

「というかもう頭の中で考える時の言葉ですか」

トミーは先生に尋ねました。

「日本語ですか」

「かなり前からね」

「そうになっておられるんですね」

「そうなんだ、トミーもかな」

「そうですね、僕も今では」

「そうになっているね」

「英語で考える時もありますが」

それでもというのだ。

「最近をよくです」

「日本語でだね」

「考えています」

「そうになっているね」

「どうも」

「僕もだよ、国の言葉も英語も喋れてそれで考えられるけれど」

王子もでした。

「今はね」

「考える時の言葉はだね」

「日本語にね」

「この言葉にというのはです。」

「なっているよ」

「そうなんだね」

「もうね」

「それこそということです。」

「随分変わったよ」

「僕達と同じだね」

「どうか」

「王子はさらに言いました。」

「日本に長くいて」

「それでだね」

「自然となるね」

「そうだね、僕も読む本はね」

「日本語のものが増えたね」

「そうやってきたよ」

「実際にというのはです。」

「やっぱり学術書は世界中のものでね」

「言語もだね」

「英語も中国語もスペイン語もあってね」

「フランス語やドイツ語もだね」

「ロシア語やアラビア語の本も読むけれど」

「それでもということです。」

「漫画やライトノベルはね」

「日本のものだね」

「そうになっているよ」

「成程ね」

「これが面白くて」

日本の漫画やライトノベルはということです。

「凄くね」

「読んでいて」

「そしてね」

「読む量が増えていっているんだ」

「僕は読むのが速いね」

「そうだね」

先生の特徴の一つです、王子も知っていることです。

「実際にね」

「日本のライトノベルでもね」

「あっという間に読むね」

「それで色々な作品を読んでね」

「その量がだね」

「増えていっているんだ」

「そうなんだね」

「一日一冊は普通にね」

それこそということです。

「読んでいるよ」

「そうなんだね」

「漫画もね」

「そちらもなんだ」

「うん、だからね」

それでということです。

第一幕その十

「日本語についてもね」

「頭の中でだね」

「考えている言葉になっているよ」

「成程ね」

「アニメもよく観るし」

「こちらもというのです。」

「確かに日本の文化にね」

「馴染んでいるね」

「そうなっているよ」

「そうなんだね」

「それとね」

「それと？」

「一つ思うことは」

「それはといいますと。」

「日本語はつくづくかなり独特な言語だね」

「そのことだね」

「うん、文字も三つあるしね」

「平仮名と片仮名、漢字だね」

「最近はアルファベットも使うし」

「こちらの文字もということです。」

「そして文法もだね」

「確かに。英語や中国語と全く違います」

「トミーも言ってきました。」

「日本語は」

「そうだよね」

「それにです」

トミーは葱を食べながら言いました。

「単語ごとに分かれていないですし」

「それも日本語の大きな特徴だね」

「本当に」

「バスク語も特徴があるよ」

先生はこの言語のお話もしました。

「スペインのバスク地方のね」

「あの言語も有名ですね」

「うん、けれどね」

「日本語はですね」

「バスク語と同じ位かそれ以上にね」

「独特の言語ですね」

「まるで日本語だけ違う様な」

そこまでというのです。

「独特の言語だよ」

「文字が複数あることも」

「かなりのものだよ」

「そうですね」

「その日本語を学ぶこともね」

「先生にとってはですね」

「学問になっているよ」

こう言いつつです、先生は。

お肉を茸と一緒に食べて言いました。

「最近はかなり重要なね」

「今日日本語の歴史の論文も書かれていますね」

「そうしているよ」

「そうですか」

「そしてね」

「そして？」

「日本語は常に変わっていつているから」

ただ独特なだけでなくです。

「そこも学んでいるよ」

「古典の言葉とか現代文ですか」

「うん、例えば明治時代に文語から口語になっていくけれど」

「確か二葉亭四迷からですね」

「その二葉亭四迷の文章はね」

口語のはじまりというそれはといいますと。

「今から見ると文語にね」

「近いですか」

「口語といっても」

それでもというのです。

「かなりね」

「文語に近いんですね」

「そうなんだ」

これがというのです。

「そしてそこからね」

「変わっていくんですね」

「森鷗外の記事も」

この人のもというのです。

「変わっていつているよ」

「あの人のものも」

「舞姫やうたかたの記と癌や高瀬舟でね」

同じ人が書いた文章でもというのです。

「かなりね」

「違うんですか」

「そうなんだ」

これがというのです。

「本当にね」

「時代によってですか」

「同じ人の文章でもね」

「変わるんですね」

「うん、そうしたことを読んでいくと」

先生は笑顔でお話しました。

第一幕その十一

「面白いんだ」

「そうなんです」

「あと平仮名の日記もね」

「土佐日記ですね」

「このお話も面白いんだ」

土佐日記もというのです。

「女の人ということにして書いているけれど」

「読んですぐにわかるんだよね」

王子が笑って言ってきました。

「あの作品は」

「うん、もうそれこそね」

「丸わかりだね」

「これがね」

実にというのです。

「面白い位にね」

「わかるんだね」

「だからね」

それでというのです。

「日本語の歴史を学ぶことも」

「面白いんだね」

「そうなんだ」

「最初文字が幾つもあったね」

「困ったね」

「一つじゃないし漢字の読み方も」

これもということです。

「音読みと訓読みがあるから」

「日本のものと中国のものがね」

「だからね」

それでということです。

「何かと苦戦したよ」 106

「王子もだね」

「そうだったよ」

「僕もね」

「先生もなんだ」

「最初はね」

先生にしてもということです。

「戸惑ったよ」

「そうだよね」

「あれはね」

「他の国の人にしたらね」

「宇宙にある様な」

そのレベルでということです。

「物凄くね」

「変わった言葉だよね」

「だからね」

それでということです。

「僕もね」

「戸惑ったよ」

「先生は語学が一番凄いけれど」

それでもということです。

「それでもだね」

「僕は語学は一番覚えやすいよ」

「その先生でも」

「どうも」

日本語はというのです。

「苦戦したよ」

「そうだったんだね」

「覚えるのに一番苦労したものだよ」

「言語以外のこともなんだ」

「うん」

こう王子にお話します。

「そうだよ」

「そこまでなんだね」

「悪魔の言語とか言われるけれど」

「あまりもの難しさにね」

「その理由もわかったよ」

すき焼きの中の麩を食べつつ言います。

「本当に」

「確かにね」

「難しいよね」

「うん、けれど日本にいるうちに」

「頭の中で考える言語にもなったね」

「そうなんだよね」

「そこにいるとね」

そうすると、というのです。

「慣れて覚えていくものだよ」

「日本語でもだね」

「そして親しんでいくものだよ」

「そういうことだね」

「そうだよ」

「成程ね、じゃあね」

王子は一杯飲んでから先生に言いました。

「今日もね」

「こうしてだね」

「飲んで食べて」

そうしてというのです。

「楽しもうね」

「そうしようね」

先生も笑顔で応えます、そうしてでした。

皆ですき焼きに日本酒を楽しみました、神戸牛のすき焼き肉は絶品で先生も他の皆も堪能することが出来ました。

第二幕その一

第二幕 六甲へ行こうか

先生はこの時大学の研究室でティータイムを楽しんでいました、飲んでいるのはミルクティーでセットはといいますと。

今日は苺やパイナップル、マンゴー等をふんだんに使ったカラフルなケーキにゼリーそしてレーズンクッキーでした。

そのセットを食べつつ先生は一緒にいる動物の皆に言いました。

「この憩いの一時がね」

「最高だよね」

「ティータイムがね」

「何とも言えないよね」

「うん、この時間こそがね」

まさにということです。

「僕にとってはね」

「一日で絶対に必要なね」

「そうした時間だね」

「本当にね」

「そうだよね」

「この時間がないと」

先生にとってはです。

「僕は困るよ」

「そうだよね」

「こうしてお茶を飲んでお菓子も食べる」

「三段のティーセットを」

「さもないとね」

「先生は元気が出ないね」

「三時かその頃にね」

その時にというのです。

「これがないとね」

「先生は駄目だね」

「その辺りまさにイギリス人だね」

「ティータイムが欠かせないことは」

「イギリスは食べものの評判はよくないけれど」

そうした国ですがというのです。

「けれどね」

「それでもだよね」

「ティーセットはいいよね」

「ミルクティーとティーセットは」

「それはね」

「今食べているのは純粋なイギリスのものとは言えないけれど」

それでもというのです。

「そして来日してから和風、中華風、アメリカ風ってね」

「色々なセット楽しんでるね」

「そうだよね」

「飲むものも色々になったし」

「日本のお茶や中国茶、レモンティーってね」

「コーヒーも飲む様になったし」

「けれどティータイム自体は」

これ自体はというのです。

「欠かせないね」

「そうだよね」

「こうして楽しんでるね」

「今だってね」

「そうしているわね」

「うん、それとね」

先生はさらにお話します、お話しつつ紅茶を飲みます。

「この紅茶、葉もいいし」

「お水もいいしね」

「六甲のお水でね」

「そしてミルクもいいね」

「これも」

「そうだね、どれも日本のもので」

それでというのです。

「美味しいね」

「そうだよね」

「日本はどれも質がいいからね」

「素敵に楽しめるわよ」

「紅茶にしても」

「全くだね、もうこうして飲んでいるだけで」

香りも楽しみつつです、先生は言います。

「最高に幸せだよ」

「些細な幸せでもね」

「それがまたいいんだよね」

「少しのことでも幸せを感じられる」

「それって素敵な人生だよね」

「幸せやよかったことを沢山見付けられたら」

そうした人生を送れたらというのです。

第二幕その二

「もうね」

「それだけでね」

「最高に幸せよね」

「誰でもね」

「そうよね」

「些細な幸せも沢山になると」

それこそということです。

「物凄いものになるからね」

「そうそう」

「だから先生も僕達も幸せだね」

「ちょっとしたことに最高の幸せを見付けられて」

「それで満喫出来るからね」

「凄くね、僕はいつも満足しているよ」

今度はケーキを食べながら言います、その美味しさにも皺背を感じています。

「こうしてね」

「学問も出来るし」

「そしてお仕事もいいお家もある」

「それでだね」

「しかも皆がいるからね」

尚更ということです。

「これ以上はないまでにだよ」

「幸せなんだね」

「僕達もいて」

「それに王子にトミーもいる」

「だからだね」

「イギリスのサラもご主人も子供達も元気だしね」
妹さんとそのご家族のお話もします。

「だからね」

「うん、皆元気だよね」

「今も」

「そうだよね」

「そのこともね」

本当にということです。

「いいことだよ」

「そうだね」

「またサラさん来日するっていうし」

「そのことも嬉しいね」

「そうだね」

「うん、今度会った時は」

先生は笑顔で言いました。

「サラの好きな西瓜を出そうか」

「いいねえ」

「日本の西瓜も滅茶苦茶美味しいしね」

「それじゃあね」

「それを出して」

そしてということです。

「楽しんでもらおう」

「そうしようね」

「僕達も日本の西瓜を食べて」

「それで楽しもうね」

「是非ね」

こうしたお話をしてお茶を楽しんでからです、先生はティータイムの後はこれといってやる事がなかったので動物園に行きました。そこで動物の皆を見て学問に励んでいましたが。

先生はバイソンを見て言いました。

「大きいよね」

「バイソンって大きいね」

「それもかなりね」

「牛の中でもね」

「うん、ウシ科の生きものの中でも」

皆にもお話します。

「バイソンは大きな方だよ」

「それでアメリカバイソンとヨーロッパバイソンがいて」

「それぞれ違うんだよね」

「同じバイソンでも」

「そうだよね」

「今僕達が見ているのはアメリカバイソンでね」
それです。

「隣のコーナーのバイソンがね」

「ヨーロッパバイソンだね」

「そうだったね」

「それぞれ違うね」

「同じバイソンでも」

「少し見ただけではわからないけれど」
それでもということです。

第二幕その三

「やっぱりね」

「何かと違うんだね」

「住んでいる地域が違っていると」

「そうなるのね」

「他の生きものと同じでね」

「そうなっているというのです。」

「そしてこの辺りはね」

「ウシ科の生きものが集まってるね」

「スイギュウとかジャコウウシとかね」

「ヌーもいるし」

「ヤクもね」

「牛といってもね」

「その仲間といってもというのです。」

「本当にね」

「多いね」

「こうしてみたら」

「そうだね」

「そうだよ、家畜にされている牛を入れたら」

「それこそというのです。」

「世界中にいるよ」

「そういえば」

「ここでガブガブが言いました。」

「牛さんがいない国ってないね」

「そうそう、世界中にいて」

ジップも言います。

「何かと役に立っているね」

「野生の牛さんの仲間もこれだけいるし」

トートーはヤクのその長い毛も見えています。

「多いよね」

「僕達より数は多いだろうね」

老馬は自分のことから言いました。

「牛さんは」

「日本でも凄く多いし」

ダブダブも言います。

「他の国だってそうだしね」

「特に多いのはインドだね」

ホワイティはこの国を思い出しました。

「国のあちこちに普通にいるしね」

「あの国は街で歩いてるしね」

「人と一緒にね」

チープサイドの家族はインドに行った時のことを思い出してそのうえでお話をしています。

「あの国独特の光景で」

「人も多いけれど牛さん達も」

「あの国はまた特別にしても」

それでもとです、ポリネシアは言いました。

「確かに牛さんは世界中にいるわ」

「本当にいない国は殆どないかな」

「そうだよね」

オシツオサレツも言います。

「日本だってそうだし」

「他の国だって」

「うん、家畜の中でもね」

特にというのです。

「多いだろうね」

「そうだよね」

「本当に世界中にいるね」

「ウシさんと仲間は」

「そして牛の妖怪も」

これもというのです。

「多いね」

「頭がそうだったりね」

「角があったり」

「それも多いね」

「そうだね」

「うん、ミノタウロスもそうで」

そうしてというのです。

「件もでね、中国にもいるね」

「確か蚩尤だったかな」

「神様だよね」

「軍神で黄帝って人と戦った」

「物凄く強い神様だね」

「とにかく牛に縁のある妖怪も神様も多いね」

先生は皆に今度はヌーを見つつお話します、見ればオグロヌーと
オジロヌーの二種類のヌーがいます。

第二幕その四

「世界的に」

「そして牛女も」

「この前話題に出た」

「あの妖怪もだね」

「言うなら女性の和風ミノタウロスだね」
「そうなるということです。」

「牛女は」

「まさにそうだね」

「言うならね」

「お話を聞くと」

「体当たりでトラックを吹き飛ばしたというお話もあるけれど」
「それでもというのです。」

「温厚だっていうのがね」

「その実なんだ」

「悪い妖怪じゃないんだ」

「そうなのね」

「日本は悪い妖怪は少ないかな」

「先生の見たところではです。」

「実は」

「そうなんだ」

「そんなに多くないんだ」

「日本に悪い妖怪は」

「人を襲ったりする妖怪はね」

「そうした意味で悪い妖怪はということです。」

「調べたら少ないかな」

「そういえば狐さんや狸さんも」

「人を化かしたりするけれど」

「そんな極端に悪いことはしないね」

「言われてみると」

「悪戯は多いけれど」

「そうしたことをする妖怪はです。」

「それでもね」

「人を襲ったりする妖怪は少ない」

「言われてみればそうかな」

「むしろ愛嬌のある妖怪の方が多いかな」

「言われてみると」

「ただ、血を吸う妖怪はいるよ」

「そちらはということです。」

「日本にもね」

「所謂吸血鬼だね」

「吸血鬼のいない国もないね」

「言われてみたら」

「うん、中国にはいないって言った小説家の人がいるけれど」

「それでもということです。」

「中国にもいるしね」

「キョンシーだよね」

「キョンシーも吸血鬼だしね」

「中国で特に有名な妖怪だけれど」

「キョンシーがそうだね」

「うん、南洋にも中南米にもアフリカにもいるし」

「それということです。」

「北米でもだしね」

「東欧は一番有名だけれど」

「あそこがね」

「ドラキュラ伯爵のお話もね」

「東欧の吸血鬼がもとだし」

「そして日本でもね」

この国でもということです。

「吸血鬼はいるよ。濡れ女とか首は飛ぶろくろ首とかね」

「ろくろ首って首が伸びるけれど」

「飛ぶ種類もいて」

「それでそちらのろくろ首は吸血鬼なんだ」

「そうなんだね」

「そして首が伸びるろくろ首は穏やかだけれど」

それでもということです、先生は日本の妖怪の中でも特に有名なものの一つをここで皆にお話していきました。

「けれどね」

「そっちのろくろ首はだね」

「首が飛ぶ種類は」

「吸血鬼で怖い」

「そうなんだね」

「そう言われているよ、また妖怪の種類が豊富で」

日本はということです。

第二幕その五

「今も生まれているしね」

「ああ、トイレの花子さんとかね」

「この学園にも出るっていうしね」

「口裂け女もね」

「そして人面犬もだし」

「テケテケもそうね」

「日本は妖怪の国でもあるね」

先生は考えつつ言いました。

「そして牛女もね」

「そうなのね」

「日本の妖怪の一つで」

「しっかりと存在しているんだ」

「それで六甲にいるんだ」

「そうなるね、本当に機会があれば」

その時はということです。

「牛女にもお会いしたいね」

「そうだよね」

「どんな妖怪さんかね」

「お会いして確かめたいね」

「そうだね」

「そう思っているよ、それとね」

先生はさらに言いました。

「日本では牛は今も食べているけれど」

「そうそう、昔はね」

「昔は牛は殆ど食べなかったんだよね」

「農業に使う家畜でね」

「お乳も飲まなかったね」

「牛乳を飲むとかバターをお料理に使ったりチーズやバターを食べることは」

そうしたこととはということです。

「日本では明治になるまで殆どなかったよ」

「そうだったね」

「日本では殆どなかったね」

「牛肉を食べることも乳製品を口にすることも」

「牛乳を飲むことも」

「殆どなくて」

それということです。

「馴染みがなかったんだ」

「昔の日本人はそうだね」

「それで件も乳牛や肉牛じゃないね」

「農業に使う牛さんから生まれたね」

「そうだったね」

「体毛の色は黒や茶色だった筈だよ」

先生は体毛のこともお話しました。

「かつてはね」

「そうだったんだね」

「今の日本の牛さんはホルスタインが多いけれど」

「あの牛さんって乳牛や肉牛でね」

「農業には本来使わないし」

「日本には昔はいなかったね」

「そうだよ、牛乳を飲むなんて」

そして乳製品を口にするのもということです。

「日本では凄く限られていたよ」

「本当に明治まではそうで」

「江戸時代とかはね」

「牛肉はお薬ってことで食べてはいたけれど」

これはあったということです。

「それでも牛乳になるとね」

「本当に少なかったんだね」

「日本では」

「食文化になかったんだ」

「上流階級の人達が食べていたよ」

これはあったということです。

「蘇とか酪とか醍醐とかをね」

「それでもだね」

「殆どの人は食べていなかった」

「そうなんだね」

「ずっと」

「うん、けれど今ではね」

現代ではどうかといいますと。

「皆普通に食べているね」

「そうだね」

「言われてみると」

「皆牛乳飲むし」

「牛乳だって普通に食べるね」

「だから件や牛女が生まれるとなると」

それならということです。

第二幕その六

「その場合はね」

「ホルスタインだね」

「あの牛さんから生まれるね」

「そうなるわね」

「今だと」

「そうなると思うよ、妖怪の姿とかも」

「そうしたのもということです。」

「時代によってね」

「変わるんだね」

「牛の妖怪でも」

「そうなるものなんだ」

「時代によって」

「一つ目小僧だって」

「この妖怪はどうかといえますと。」

「今だとね」

「今の服着たりするかな」

「一つ目小僧ってお寺の小僧さんの服着てるイメージだけど」

「今だと違うんだ」

「洋服なんだ」

「そうなのでもね」

「その場合もということです。」

「おかしくないよ」

「妖怪の服も時代によって変わるんだ」

「江戸時代とかと今じゃ」

「そうなるのね」

「同じ妖怪でも」

「だって僕達の服も変わっているよ」

先生は人間のお話もしました。

「時代によってね」

「ああ、そう言われるとね」

「確かにそうね」

「人間の服も時代によって変わってるわ」

「それもかなりね」

「だから妖怪の服もね」

彼らのそれもということです。

「変わっていても不思議じゃないよ」

「そういえば姫路城の宴で洋食も出したしね」

「色々と現代風にアレンジしたし」

「そういうことも考えてみたら」

「妖怪も何かと時代によって変わる」

「そういうもののね」

「そうだよ、どんなものでも変わるしね」

この世にあるものはということです。

「そういうことだと考えればいいよ」

「成程ね」

「そう考えたらわかるよ」

「それもかなりわかりやすく」

「先生のお話はわかりやすいけれど」

「今回もそうよ」

「よくわかったわ」

「わかってくれて何よりだよ」

先生も満足しました、そうして皆で動物園を巡ってです。

閉園の時間になったので帰ろうと門を出た時にでした。

トレンチコートを着た黒いロングヘアに切れ長の目にマスクという恰好の女の人が先生の前に来て言ってきました。

「こんにちは、ドリトル先生」

「はい、こんにちは」

「口裂け女ですが」

自分から名乗ってきました。

「実は先生にお話したいことがあります」

「それで、ですか」

「お伺いしました」

「といいますと」

「実は六甲にお招きしたいのです」

口裂け女はこう先生に言いました。

「日をあらためて」

「六甲にですか」

「今度の日曜先生に予定がなければ」

「はい、その日は何もあります」

先生は笑顔で答えました。

「特に」

「ではその日の朝に先生のお家にお迎えに参りますので」

「それで、ですか」

「六甲まで案内させて頂きます」

先生に礼儀正しくお話します。

「その様に」

「それでは」

「また日曜に」

「お待ちしています」

先生も笑顔で応えます、こうお話してでした。

第二幕その七

口裂け女と名乗った人は先生にお別れの一札をしてから去りました、その後で動物の皆は先生のお家に帰りながら言いました。

「口裂け女ってね」

「研究室でお話していたね」

「日本の妖怪じゃない」

「この学園にもいるって聞いてたけれど」

「本当にいたんだね」

「うん、この学園は世界屈指の妖怪心霊スポットだけれど」

先生も皆に応えて言います。

「実際にね」

「出て来たね」

「僕達の前に」

「何でもない感じで」

「六甲にお誘いかけてきたね」

「そうだね、今度の日曜日に」

まさにその日というのです。

「なったね」

「そうだね」

「何ていうか急にね」

「日曜行くことになったね」

「口裂け女さんの車で」

「そうだったね、しかしね」

ここで先生は皆にこうも言いました、夕暮れの道を彼等と一緒に歩きつつ。

「口裂け女さんは色々言われていたんだ」
「そうだったんだ」
「別に悪い感じじゃないけれど」
「そんな妖怪さんだけれど」
「最初はその姿で出て来てね」
「マスクをした姿でというのです」
「あたし奇麗？って聞いてきたんだ」
「ああ、そのお話聞いたことあるよ」
「それでいいえって言ったら何もなくて」
「はいって言ったらマスク取ってね」
「耳まで裂けたお口見せて」
「これでも美人かって言うんだね」
「最初はそれだけだったのが」
「皆が言う通りだったというのです」
「それがね」
「変わっていったんだ」
「そうだったのね」
「最初はそんな風でも」
「それが」
「男女二人連れになったり」
「それかというのです」
「姉妹三人とか赤い車に乗って移動するとか」
「確かに変わっていったるね」
「どんだね」
「何でそうなったのかな」
「不思議だね」
「襲ったりする様になって」

驚かせるだけだったのがです。

「いいえって答えてもそうなる」

「狂暴になっていったんだ」

「次第に」

「最初は驚かせるだけだったのが」

「そうだったんだ」

「そう、鎌とか鉈持ってたね」

「そうした刃物をといたのです。」

「口を裂いたり殺したり」

「それも事件じゃない」

「人殺されてわからないの？」

「普通にわかるよね」

「切り裂きジャックみたいに」

「そしてどんどん凄くなって」

「その狂暴さのお話がということです。」

「それでね」

「どうなったのかな」

「一体」

「今の時点で凄いけれど」

「人殺す様になったっていう点で」

「死神が持つみたいだな大鎌を振り回して」

「そうしてというのです。」

「電話ボックスを真っ二つにしたとかね」

「もう滅茶苦茶だね」

「漫画でも物凄い迫力だよ」

「どんどんお話が大きくなって」

「遂にはそこまでいったんだ」

「これは皆があれこれ噂して
先生は皆にお話しました。」

第二幕その八

「大きくなっていったね」

「それでなんだ」

「そんなとんでもない妖怪になったんだ」

「もう切り裂きジャック真っ青の」

「そんな風になったんだ」

「そうだよ、口裂け女のお話は都市伝説でもあるけれど」

先生は民俗学のお話もしました、実は先生は民俗学についてもかなりの識見を持っている人なのです。

「これがね」

「どんどん大きくなって」

「尾鰭が付いて」

「それでなんだ」

「そこまでいったんだ」

大鎌で電話ボックスを真っ二つにするまでというのはです。

「それで当時の子供達が怖がってね」

「そりゃ怖がるね」

「誰だってね」

「そんな妖怪本当に襲ってきたら」

「どうしようもないから」

「集団下校したり」

そうした風になってというのはです。

「べっ甲飴やポマード持つ様になったんだ」

「飴？」

「それにポマード？」

「何、その二つ」

「よくわからない組み合わせだね」

「べっ甲飴は口裂け女の好物で」

先生はまずこちらからお話しました。

「これを投げると食べてその間に逃げられるって言われていたんだ」

「妖怪にはよくある話だね」

「そうしたお話もね」

「言われてみれば」

「そうだね」

「それでポマードはね」

今度はこちらのお話でした。

「口裂け女の苦手なものだったんだ」

「好物もあれば苦手なものもある」

「これも妖怪の特徴ね」

「人間も動物もあるけれど」

「妖怪もそこは同じね」

「そしてね」

それだというのです。

「嫌いな理由はポマードをべっ甲飴と間違えて食べて」

「ポマードは整髪料だから」

「食べられないからね」

「食べてとんでもないことになったんだ」

「それで嫌いになったの」

「そうしたお話なんだ、けれど実際の口裂け女は」

どうかといいますと。

「この学園にいるそのままで」

「ああ、驚かせるだけね」

「夕方に校門にいて」

「それで驚かせてくる」

「この学園じゃそう言われているね」

「だからね」

それでというのです。

「驚かさせられるけれど」

「それでもだね」

「襲われることはないし」

「安心していいのね」

「口裂け女については」

「そうだよ、特にね」

これといってというのです。

「怖い妖怪じゃないから」

「だったらいいよ」

「まあ驚かされる位ならね」

「それ位ならいいかな」

「襲われないなら」

「それなら」

「というかね」

老馬が言ってきました。

「妖怪のお話って後で色々つくよね」

「大きくなったり怖くなったり」

「そんな風にね」

チープサイドの家族も言います。

「どんどんね」

「そうなっていくね」

「というか人が殺されたなら」

こう言ったのはチーチーです。

第二幕その九

「行方不明でも大事件だからね」

「普通に大騒ぎになるよ」

トートーも言います。

「実際に起こったら」

「そもそも襲われたり殺されたりとか」

ポリネシアも言いました。

「生き残った人いるのかしら」

「いたら警察に行くね」

ガブガブは断言しました。

「日本だと」

「というかあんな目立つ格好だと」

ダブダブは口裂け女の服装から言います。

「普通に皆注意するでしょ」

「しかも姉妹三人とかだと」

どうかとです、ホワイティは指摘しました。

「余計に目立つよ」

「人を襲ったり殺した現場誰か見たのかな」

「真っ二つになった電話ボックスとか」

オシツオサレツも指摘します

「そもそも」

「大変な話なのに」

「結局全部噂話で」

ジップは思ったことを言いました。

「本当はそんなことなかったんだらうね」

「うん、実際はなかったよ」

先生も言います。

「だって本当にそんなことがあったら」

「大事件だし」

「世の中もっと大騒ぎだね」

「実際テロでもそうなるのに」

「それじゃあね」

「騒ぎにならない筈がないわ」

「そうだよ、騒ぎにならない方が」

まさにというのです。

「おかしいからね」

「もう集団下校どころじゃなくて」

「警察が特別にチーム組むね」

「それであたるわね」

「殺人事件とかになったら」

「そうになっていたよ、都市伝説は皆色々言って」

そしてというのです。

「大きくなるからね」

「そうしたものだから」

「それでよね」

「大きくなっていくもので」

「妖怪の実像とも離れるんだ」

「そうになっていくんだ」

先生は皆にお話しました。

「妖怪もね」

「何か凄いね」

「噂話も侮れないね」

「どんどん大きくなるとか」

「とんでもないものね」

「実際にそうだよ、これが人や国の根拠のないものだ」と
それこそというのです。

「どれだけ有害か」

「それはね」

「確かに思うね」

「根拠のない噂で人に危害が及んだら」

「どれだけ酷いか」

「例えばマスコミがね」

この人達がというのです。

「日本でもよくあるね」

「あっ、何の根拠もないことを書く」

「その人について」

「悪いお話ばかり書いて」

「それでだね」

「それがその人をどれだけ傷付けるか」
それこそというのです。

第二幕その十

「わからないね」

「そうだよね」

「人間でもそうだしね」

「国家でもだね」

「そうした噂を流されると困るね」

「日本はかつてイエローペーパーに色々書かれて
そうしてというのです。」

「物凄く誤解されていたしね」

「先生よくお話してるね」

「マスコミのとんでもないお話を」

「日本もだね」

「色々書かれてきたんだね」

「残虐で邪悪で世界征服を企んでいる様な」

「そうしたというのです。」

「ことを散々書かれてね」

「誤解されていたんだ」

「そうだったんだ」

「何かと」

「ハーストという出版社が行っていて」

「それでというのです。」

「それでね」

「ううん、酷いお話だね」

「そんなことを書いたマスコミは許したらいけないね」

「それって絶対に許されないことだよ」

「人としてね」

「そして企業としてもね」

「日本でも多くの普通の新聞社や出版社が平気でするしね」

日本においてもというのです。

「だからね」

「問題だね」

「そうしたことで実害が出たら」

「そうになったら」

「それで傷付いたり誤解される被害者が出たら」

「しかもね」

先生は眉を曇らせてさらにお話しました。

「マスコミは責任を取らないからね」

「嘘吐き放題ね」

「書き放題」

「もうやりたい放題」

「被害者が出ても」

「妖怪でもそれで迷惑していたら」

それならというのです。

「よくないね」

「噂は慎んだ方がいいね」

「そうした場合もあるわね」

「悪い噂は流さない」

「それに限るね」

「噂は噂だよ」

それに過ぎないというのです。

「問題はその真実を確かめる」

「そのことが大事ね」

「真偽を確かめる」

「噂については」

「じっくりと」

「災害が起こった時は特に出るけれど」

その噂がでる。

「何といってもね」

「大事なことは確かめる」

「それも冷静にだね」

「そして偽なら否定する」

「そうすべきだね」

「イギリスではゴシップが好まれるけれど」

先生の生まれたお国ではです、イギリスではこうした話題が好きな人が多くてよくお話されるのです。

第二幕その十一

「ゴシップはね」

「真偽を確かめる」

「それが大事だよね」

「インターネットでもそうだけれど」

「まず確かめる」

「それが大事ね」

「世の中には悪い人もいて」

「そしてということです。」

「わざと悪い噂を流すからね」

「ハーストみたいだね」

「日本の多くの出版社や新聞社みたいに」

「もう悪い考えでそうしたことをする」

「そんな人がいるから」

「注意しないと」

「本当にということです。」

「騙されるよ」

「僕達もね」

「そうなるのね」

「そんな悪い噂に」

「そして悪い人達に」

「世の中色々悪い人はいるけれど」

「それでもということです。」

「そうした噂を流す人達は」

「特に悪い人達だね」

「もう言うまでもなく」

「極悪非道っていうか」

「最低最悪かな」

「こうした人にはね」

先生は悲しいお顔で言いました。

「間違ってもなっではいけないね」

「全くだね」

「若しそんな人になったら」

「天国に行けないよ」

「地獄に落ちるよ」

「そうした人こそ地獄に落ちるよ」

実際にそうなるということです。

「本当にね」

「そうだよね」

「噂は真偽を確かめる」

「それが大事だね」

「今は画像もかなり巧妙に造られるから」

だからだということです。

「証拠写真と言ってもね」

「それでもだね」

「まずは確かめる」

「迂闊に信じないで」

「そうしないと駄目ね」

「騙されて後悔しても遅いからね」

それ故にということです。

「若しハーストに騙されて日本人を攻撃して」

「そうした人実際にいたよね」

「残念なことに」

「嘘に騙されたとはいえ差別した」

「そんな人が」

「その後で差別を糾弾する人に糾弾されたらどう言うのかな」

その攻撃した人というのはのです。

「騙されていたって言っても反省してもその罪は消えないって言うって容赦なく攻撃してくる人が目の前に出て来たら」

「もうその時はね」

「どうにもならないね」

「そうした人に攻撃されても」

「そうされても」

「攻撃してくる人も善人とは限らないしね」

差別という悪いことをした人を糾弾する人もです。

第二幕その十二

「どんなことをしても延々と攻撃してくる人もね」

「いるよね」

「やっぱり」

「そんなとんでもない人も」

「世の中にはいるね」

「こうした人に徹底的に攻撃されてからじゃ遅いから」

まさに後悔先に立たずということです。

「本当に気をつけないとね」

「そうだね」

「差別はしてからじゃ遅い」

「噂に騙されてからじゃ遅い」

「そういうことね」

「そうだよ」

こう皆にお話しました。

「実際後世まで批判されるしね」

「そうだよね」

「差別した人はね」

「歴史的にも言われるよね」

「それもずっと」

「アメリカで日系人の人達は大战中に収容所に入れられたけれど」

先生はこのお話もしました。

「この人達を収容所に送ってずっとカルフォルニアに帰さないって

言ったカルフォルニアの知事だった人は今も批判されているよ」

「そのことをだよね」

「随分とんでもない言葉言い続けてきたんだよね」

「根拠のないことまで」

「そうしていたのよね」

「戦争中で色々あったにしても」

「それでもというのです。」

「今も言われているよ、ただね」

「ただ？」

「ただっていうと」

「この人は後にアメリカの最高裁判所の長官になって
そうしてというのです。」

「アフリカ系の人達の権利獲得に貢献したんだ」

「そうそう、後でね」

「そうしたこともしたんだよね」

「キング牧師やマルコムエックスが凄い活躍したけれど」

「この人も貢献したんだよね」

「法律の専門家の立場から」

「確かに酷い人種差別政策を行ったけれど」

「カルフォルニアの知事だった時にです。」

「けれどね」

「後でだね」

「多くの人の権利を守ってだね」

「その拡大に貢献したのね」

「十万の日系人の人権を冒瀆して迫害したけれど」

「それでもというのです。」

「その後で二千万のアフリカ系の人達の未来を切り開いてね」

「今のアメリカの人権も確立した」

「そうした人だったんだよね」

「その人は」

「こうした人もいるよ、けれど差別をしたことは事実で
それです。」

「今も批判されているしね」

「差別はしないことね」

「最初から」

「それが第一だね」

「僕はそう考えているよ」

こう言っただけで、先生は皆とさらにお話をしました。そうして六
甲に行って牛女に会うことも考えるのでした。

第三幕その一

第三幕 赤い車に乗って

トミーと王子は先生にお家で六甲に行くことになったことをお家の居間で聞くとすぐに二人共目を丸くさせました。

「口裂け女に誘われてですか」

「それでなんだ」

「今度六甲に行かれるんですか」

「そうだったんだね」

「うん、それで今度の日曜日にね」

先生は皆にお話しました。

「行くんだ」

「凄いね、牛女と会うなんて」

王子は驚いたまま言いました。

「いるとは聞いていたけれどね」

「六甲にだね」

「本当にいてね」

そしてということです。

「会いに行くなんて」

「うん、ただね」

「ただ？」

「どうして牛女に会って欲しいか」

「口裂け女が言ってきたか」

「今はそのことが気になるね」

「病気じゃないですか？」

トミーはこう先生に言いました。

「それで、です」

「診て欲しいんだね」

「そうじゃないですか？」

「それでなんだね」

「先生はお医者さんですからね」

だからだということです。

「僕はそう思いましたけれど」

「やっぱりそうかな」

「はい、ただ」

「ただ？」

「牛女ってどんな身体の構造なのか」

「そのこともだね」

「ふと考えました」

こう先生にお話しました。

「僕は」

「そうだね、頭が牛で身体が人間だとね」

「どんな身体になるんでしょうか」

「ギリシア神話のミノタウロスと同じだよね」

王子も言ってきました。

「牛女って」

「うん、そうだね」

「日本の妖怪の件が頭が人で身体は牛で」

「それでだね」

「そうなっているけれど」

「僕が思うにね」

先生は王子に自分の考えをお話しました。

「頭は牛でもそれ以外はね」

「人間のものだね」

「頭蓋骨以外の骨格や内臓はね」

「そうなんだね」

「ミノタウロスもお肉食べていたね」

「人間のね」

「あれは歯は何故かライオンのもので」

牛の頭でもです。

「そのせいだったみたいだけれど」

「それで肉食だったんだね」

「牛の頭でもね」

牛は草食です、言うまでもなく。

「そうだったんだ」

「そうだよね」

「そしてね」

それでということです。

「牛女は人を襲うって話はないし」

「何かトラックに体当たりするとか」

「あれは噂でね」

トミーにすぐに返しました。

「実はとても穏やかな性格らしいから」

「そうしたこともしないですか」

「人も襲わないしね」

それでということです。

第三幕その二

「お肉は食べるかも知れないけれど」

「人は襲ったりしないですね」

「そうみたいだよ」

「こう言うのでした。」

「あの人は」

「そうですね」

「だからね」

「それでというのはです。」

「人の身体でね」

「それで、ですか」

「別にね」

「これといってというのはです。」

「僕が言っても襲われないし」

「牛女の身体もですね」

「別にね」

「人間のものとですね」

「頭以外は変わらないと思うよ」

「そうですね」

「牛は胃が四つあるけれど」

「牛の身体の特徴の一つです。」

「それでもね」

「牛女の胃は一つですね」

「そうだと思うよ」

「何か妖怪の身体って」

王子は腕を組み考えるお顔になって言いました。

「考えてみると色々あるね」

「僕もそう思うよ」

「そうだよね」

「その妖怪の身体についてね」

先生は王子に答えてお話しました。

「水木しげる先生が本で書いているよ」

「ああ、あの妖怪漫画の人だね」

「そう、あの人はね」

「妖怪の専門家みたいな人だったね」

「もう妖怪のことなら何でもただけれど」

それでもというのです。

「そうしたことなんだ」

「妖怪の身体のことも知っていたんだ」

「どうも研究して検証して」

そうしてというのです。

「わかっていたみたいだよ」

「そんなことまでなんだ」

「何処に住んでいてどうした暮らしをしているか」

「それぞれの妖怪のかな」

「そうだよ、本当にね」

実際にというのです。

「あの人は妖怪のことについては誰よりもね」

「知っている人だったんだね」

「そして妖怪を愛していた」

そうしたというのです。

「凄い人だったんだよ」

「まさに妖怪博士だね」

「そうだね、今はね」

先生は王子のお話を聞いて言いました。

「そうなっていてね」

「妖怪達と一緒にいるかな」

「そうかも知れないね」

こう言うのでした。

「あの人は」

「人間から妖怪になったんだね」

「大好きだね」

「あの人の作品は僕も読んで観てますけれど」

トミーも言ってきました。

「妖怪がどれだけ魅力的か」

「そのことを描いているよね」

「そして心から妖怪を愛している」

「そのことがわかるね」

「はい」

本当にということです。

「あの人の作品を読んで観ていますと」

「あそこまで妖怪を知っていて愛した人はいなくて」

「妖怪のことに詳しくて」

「そんな人だから」

「今はですね」

「妖怪になっいて」

そうしてということです。

第三幕その三

「妖怪博士にね」

「なっているかも知れないですね」

「そう思うよ、僕も」

「というかね」

王子はしみじみとした口調で言いました。

「妖怪の身体の構造も感が手見ると面白いね」

「そうだよね」

「牛女についても」

「そうだね、あと僕が思うに件はね」

この妖怪はといいますと。

「胃は四つあるよ」

「牛の身体だからだね」

「生まれてすぐに死ぬけれどね」

「予言をしてだね」

「うん、予言をしなかったら死なないと思うけれど」

それでもというのです。

「その身体についてはね」

「牛の身体だからだね」

「そうだと考えているよ」

「成程ね」

「色々考えていくと」

妖怪のことともいうのです。

「面白いよね」

「そうだね」

「これも学問だしね」

「日本だと民俗学になるね」

「うん、そちらの学問だよ」

妖怪のことはというのです。

「都市伝説にしてもね」

「そうだよね」

「だから水木先生はこちらの大家でもあったんだ」

民俗学のということです。

「普通の民族学者よりもだったんだ」

「妖怪のことに詳しくかったんだ」

「そうだったんだ」

「そういえば」

トミーが気付いたお顔になって言いました。

「民俗学は柳田邦男からでしたね」

「そう、あの人からはじまってね」

「確立されましたね」

「民俗学はあの人からはじめて」

そうしてということです。

「確立したね」

「そうした学問ですね」

「そしてその人からね」

柳田邦男からというのです。

「妖怪のことを書いていたんだ」

「そうでしたね」

「遠野のこととかね」

「東北でしたね」

「あちらの河童や座敷童のことも書いたし」

「それで、でしたね」

「あの人が妖怪のことを学問に取り上げたから
それでというのです。」

「民俗学ではね」

「妖怪も扱いますね」

「そうなんだ」

「それで今もですね」

「民俗学では妖怪のことを扱うし」

「水木先生もですね」

「妖怪のことだね」

まさにこの存在のことだというのです。

「大家の中の大家とね」

「言ってよかったですね」

「それに日本の妖怪の歴史は古くて」

先生はさらにお話しました。

「奈良時代にはね」

「鬼がいましたね」

「神話では八岐大蛇がいたしね」

「それで、ですね」

「日本の妖怪の歴史は古いんだ」

「そうですね」

「そういえばね」

ここでトートーが言ってきました。

「鬼は日本の妖怪の代表の一つだね」

「鬼に天狗に河童にね」

ダブダブも言います。

「変化ね」

「日本は幽霊のお話も多いけれど」
ポリネシアは幽霊のこともお話に出して言います。

第三幕その四

「鬼も多いわね」

「特に京都とかね」

「鬼のお話が多いわよ」

チープサイドの家族はかつて自分達が言ったその場所のお話をしました。

「酒呑童子とかね」

「色々あるよね」

「鬼の話って確かに多いね」

ホワイティもそうだと言います。

「日本にはね」

「何か西洋人みたいな姿で」

こう言ったのはチーチーでした。

「金棒持ってるね」

「角生やして虎柄の腰巻き姿で」

老馬も鬼の姿のお話をします。

「毛深くて身体が大きいね」

「童話にもよく出て来るし」

ガブガブは日本の童話のお話を思い出して言います。

「日本の妖怪の代表だね」

「地獄にもいるし」

ジップは日本のそちらを思い出しました。

「本当に鬼はあちこちに出るね」

「山にいるね、鬼は」

「そこから人里にも来るね」

オシツオサレツは鬼の棲み処を指摘しました。

「日本の妖怪は山にいる種類が多いけれど」

「鬼もそうだね」

「そう、鬼は日本の妖怪の代表の一つだね」

先生もそうだと思います、今も一緒にいる動物の皆に。

「童話でもよく出て来て山にね」

「いるよね」

「それで西洋人みたいな姿でね」

「狂暴で強いね」

「人も襲うし」

「日本では強い、怖いというと鬼でね」

それです。

「その姿は実際に漂流してきた白人の人をモデルにしているという説もあるよ」

「実際にそうだよね」

「先生前にそのことをお話してくれたけれど」

「実際にだね」

「鬼は漂流した人かも知れないんだね」

「そうだよ、そして鬼のこともね」

この妖怪のこともというのです。

「日本の民俗学の中にあるんだ」

「妖怪だからだね」

「それでよね」

「鬼も民俗学の中にあって」

「学問としても学べるんだね」

「そうなんだ、勿論天狗や河童もだよ」

彼等もというのです。

「民俗学で学べるよ」

「それじゃあ牛女もだね」

王子は先生が今度会うというその妖怪のお話をしました。

「そうなるよね」

「勿論だよ」

「やっぱりそうだね」

「僕は件の親戚だと思っているよ」

牛女はそうだというのです。

「逆にしてもね」

「まあそうだろうね」

「牛から生まれたと思うし」

「それで予言するのかな」

「多分ね、ただね」

「ただ？」

「件は予言をしたら死ぬし」

それということです。

「牛女もね」

「予言をしたらだね」

「死ぬんじゃないかな」

「そうなんだね」

「うん、そう考えているよ」

実際にというのはです。

「僕はね」

「そうなんだね」

「それが一度かどうかはわからないけれどね」

「そういえば戦争中日本の有料者の人のお家に匿われていましたね」

「順番みたいだね」

「じゃあ予言をしていたんですね」

「その力があると思われていただけかも知れないけれど
それでもいいのです。」

第三幕その五

「予言と関係があることはね」

「事実だね」

「そうだと思うよ」

「こう王子にお話しました。」

「僕はね」

「そうなんだね」

「まあ僕はね」

「先生は少し考えるお顔になって言いました。」

「予言は好きじゃないところがあるんだ」

「そうなんだね」

「悪い予言なら避けていい予言ならそうなる様にする」

「それはいいんだね」

「けれど予言に縛られて」

「そうしてというのです。」

「怖がったり惑わされることはね」

「駄目なんだね」

「そう思うからね」

「だからだというのです。」

「予言についてはね」

「好きじゃないことがだね」

「あるんだ」

「そうだと思います。」

「僕はね」

「そうなんだね」

「日本には予言の漫画もあるね」

「あるね、ノストラダムスとか」

「ああした漫画、本であるけれど」

「日本で物凄く売れたね」

予言の本がです。

「予言の本も」

「人類が滅亡するとかね」

「そうした話に惑わされてね」

「それでだね」

「怖がったりするだけなら」

「予言はよくないんだね」

「そのノストラダムスの漫画ではそれこそ箸が転がっても人類滅亡だったけれど」

その様に言っていたけれどということです。

「人類は今も存在しているね」

「確か一九九九年？」

「七月にだったね」

「人類は滅亡する」

「そうした予言だったね」

「けれど今も存在しているし」

人類はとです、先生は動物の皆にもお話します。

「そもそも宇宙人とか地震とか戦争とかね」

「色々あったね、滅亡の理由」

「一体どれで滅亡するかわからない位に」

「もう数えきれないだけ言ってたけれど」

「果たしてどれで人類滅亡するのか」

「あと三百人委員会とかあったかしら」

「ああしたお話はギャグと思って」

そうしてということです。

「読んでいかないとね」

「駄目なんだ」

「そうしていかないと」

「そうなのね」

「予言はあくまで道しるべだよ」

それだということです。

「事前に何があるかを知ったら」

「いいことならそうなる様にして」

「悪いことならならない様にする」

「それが避けられないと考えず」

「そうしてだね」

「やっていくものでね」

それでということです。

「だからだよ」

「予言に惑わされない」

「心を囚われない」

「そのことが大事なんだ」

「予言については」

「そうだよ、地震が起こるなら」

それならということです。

「被害をね」

「最低限にする」

「それが大事だね」

「避難をしたりして」

「そうするべきなのね」

「だからね」
「それでというのは。」

第三幕その六

「予言に心を支配されて」

「それでだね」

「人類は滅亡するとか言って」

「それで絶望したりしたらよくない」

「そういうことね」

「核戦争が起こってね」

先生は人類が滅亡するそのパターンの一つのお話をしました。

「それでその後にとんでもない世界になるとかね」

「ああ、モヒカンの人達がバイクに乗って暴れ回ってて」

「国家も法律もない世界ね」

「それで拳法の伝承者が歩き回る」

「そうした世界ね」

「そうした世界になるっていう予言もね」

これもということです。

「核戦争が第三次世界大戦でね」

「第三次世界大戦も予言であったね」

「予言の定番の一つだったわ」

「もうどれだけの本で出て来たか」

「わからない位ね」

「そうした予言もね」

これもということです。

「あったらどう避けるかが問題で」

「起こるからどうしようもない」

「そう思わないことだね」

「予言については」

「悪いものならそうならない様に努力することだね」

「僕はそう思うよ」

こう皆にお話しました。

「予言については」

「じゃああれですね」

トミーが言ってきました。

「さっきお話に出た漫画ですが」

「箸が転がっても人類滅亡って言う漫画だね」

「眼鏡かけた編集者の人がよく叫ぶ漫画ですね」

「見開きで言うことが多かったね」

「ああした漫画を読んでもですね」

「どうして避けるかを考えるべきだね」

それでということです。

「絶望しないことだよ」

「それが予言に対する行動ですね」

「というかあの漫画お話の都度人類滅亡の経緯が違うね」

「戦争とか災害とか」

「それにストーリーもキャラクターも荒唐無稽だね」

「あんな何もかもが荒唐無稽な漫画ってないね」

王子も言います。

「実際に」

「そうだよね」

「あの主人公も周りの人達も実在していたら」

「どうなるかな」

「確実に精神病院に入院させられているよ」

先生は精神科医でもあります、その立場から言いました。

「僕は読んでいてこの人達はね」

「精神病患者とだね」

「確信したしね」

「まあそうだよね」

「ああした発言を常にドラッグをしていないで行っていたら」

「それこそだね」

「確実におかしいからね」

「そうとしか思えないからだということです。」

「僕としてはね」

「あの人達が実在したら」

「精神病院に入ってもらって」

「そうしてということです。」

「治療を受けてもらうよ」

「そうするんだね」

「作中であれだけ異常な発言を異常なテンションで言い続けているから」

「だからだということです。」

「僕はね」

「そうするんだね」

「診断を受けさせてもらうにしても」

「それでもということです。」

「ぱっと見ただけでね」

「あの人達がおかしいことはわかるんだね」

「本当にね」

「実際にということです。」

「あの人達は」

「というかもう何があっても人類滅亡とか言う」と

トミも言います。

第三幕その七

「正気を疑われますね」

「そうだね」

「発言の内容もその前後から見ても」

「異常だね」

「それもテンションが高くて」

「だから僕は確信しているよ」

「あの作品のキャラクター達は実在していたら」

その場合はということです。

「確実にですネ」

「狂気の域に陥っているとね」

「断言されますね」

「電波という言葉があるけれど」

先生は日本で使われているこの言葉も出しました。

「まさにね」

「あの人達は、ですね」

「それを受信しているところか」

それで済まないで、ということです。

「自分達でね」

「出していますか」

「その域だよ」

「そうですよね」

「日本には数多くの漫画があるけれど」

本当に数えきれないだけあります。

「その中でも屈指の狂気に満ちた漫画だよ」

「屈指ですか」

「うん、小説やアニメやゲームでも」

他の創作のジャンルでもというのです。

「あの漫画程狂気に満ちた作品はないよ」

「そうでしょうね」

「うん、特に主人公は」

このキャラクターはといいますと。

「絶対に精神病院に入ってもらって」

「治療を受ける必要がありますね」

「極めて深刻な状況にしか思えないから」

だからだということです。

「本当にね」

「描いていた人達はどう思ってたんでしょうか」

「作品を創る中で」

「一体」

「わからないね、本当に正気とはね」

「思えない作品なので」

「だからね」

それでというのです。

「僕としてもね」

「わからないんですね」

「原作の人も作画の人も」

「他の携わった人達も」

「わからないよ」

本当にというのです。

「正気かどうかね」

「何があっても人類滅亡とかね」

「考えてみれば凄いね」

「そんな作品読んでるとね」

「それで心が支配されたら」

「よくないね」

「だから予言もね」

これ自体もというのです。

「どうするかでね」

「囚われない」

「それが大事なのね」

「いい予言なら実現する」

「悪い予言なら避ける」

「そう努力することだね」

「そう思うよ、僕はね」

先生は動物の皆にお話しました、そしてです。

日曜日朝ご飯を食べるとチャイムが鳴りました、すると。

玄関に口裂け女がいて赤い乗用車が停まっていた、するとです。動物の皆はその車を見て言いました。

「うん、口裂け女的車だね」

「はい、そうですよ」

口裂け女は先生ににこりと笑って答えました。

「言われていますよね」

「実際になんだね」

「口裂け女って赤い車に乗ってるんだ」

「そうしているんだ」

先生と一緒にいる動物の皆も応えました。

第三幕その八

「こうしてね」

「そうなんだね」

「成程ね」

「じゃあ三人姉妹なのかしら」

「そのことも」

「学園にいるのは私一人よ」

口裂け女は動物達に笑って答えました。

「それで基本学園から出ないけれど」

「それでもなんだ」

「こうして出る時もあるんだ」

「そうなのね」

「そう、だからね」

それでというのです。

「今もここにいるのよ」

「それじゃあね」

「今からだね」

「先生を六甲まで送ってくれるのね」

「そうしてくれるのね」

「あんた達も送るわよ」

口裂け女は動物の皆ににこりと笑って答えました。

「そうするわよ」

「けれどその車だと」

「僕達皆入れないよ」

「ちよっとね」

「どうにもね」

「じゃあ僕が皆を連れて行くから」
ここで王子が名乗りました。

「口裂け女さんの車について行ってね」

「じゃあ僕も一緒にな」

トミーも言ってきました。

「今回は」

「ええ、皆来てね」

是非にとです、口裂け女は笑顔で言いました。

「牛女さんも喜んでくれるし」

「じゃあ」

「皆一緒に来てね」

こう言っただけで、そのうえで。

先生は皆と一緒に口裂け女の車に乗って六甲に向かいました、動物の皆は王子のキャンピングカーに乗ってトミーは先生と一緒に口裂け女の車に乗りました。キャンピングカーを運転するのは執事さんです。

皆はすぐに六甲のある場所に着きました、そこはです。

「六甲にこうした場所があるんだ」

「奇麗なお家だね」

「和風の」

「こうしたお家が六甲にあるんだ」

「そうなんだ」

「ええ、このお家が牛女さんのお家よ」

口裂け女は動物の皆にお話しました。

「ここがね」

「そうなんだね」

「牛女さんここに住んでるのね」

「六甲って聞いたけれど」

「ここなんだ」

「そうよ、学園に来ることもあるけれど」

それでもというのです。

「お家はここなのよ」

「ここで一人暮らし？」

「ひょっとして」

「そうなのかな」

「いえ、結構お嬢様でね」

口裂け女は皆にこうもお話しました。

「お付きの人が何人かいてね」

「一緒に暮らしてるんだ」

「このお家に」

「そうなんだね」

「そういえば」

老馬が気付いた様にして言いました。

「ずっと有力者のお家にいたんだったね」

「そこで匿われていたのよね」

ポリネシアも言います。

「転々として」

「それでなんだね」

今度はガブガブが言いました。

「お嬢様なんだね」

「大人しい性格っていうし」

ジップは伝え聞く牛女の性格のことを言いました。

第三幕その九

「それじゃあだね」

「お嬢様なのね」

ダブダブははっきりと言いました。

「牛女さんは」

「それでこうしたお家に住んでるんだね」

「そうなのね」

チープサイドの家族は二階建てで結構な大きさのお家を見ています、見ますとお庭も結構な広さでよく整っています。

「お嬢様だから」

「それでだね」

「いや、本当にいいお家だよ」

トートーも言います。

「上品だね」

「風情もあるよ」

ホワイティはこのことを言いました。

「中々ね」

「しかも気候もいいね」

チーチーは涼しいものを感じました。

「ここは」

「冬は寒いだろうけれどね」

「それ以外は最適だね」

オシツオサレツは二つの頭で言います。

「まあ牛さんは寒さに強いし」

「冬も大丈夫かな」

「牛女さんは暑いのが苦手よ」

口裂け女も皆に言います。

「だから冬もね」

「寒い方がいいんだ」

「牛さんだから」

「そうなのね」

「そうなの、だからここにお家を持っ
ていて
そうしてというのです。」

「静かに暮らしているの」

「そういうことだね。それじゃあ」

先生は口裂け女に言いました。

「これから」

「中に入って下さい」

「そうさせてもらいますね」

先生は口裂け女に礼儀正しく応えました、そうしてです。

お家の中に入りますとすぐに牛の頭をした大正時代の書生さん
を
思わせる格好の人が出て来ました。

その人は先生達を見るとすぐに尋ねてきました。

「ドリトル先生ですね」

「はい」

先生はその人にも礼儀正しく答えました。

「そうです」

「そうですか、よくぞおいで下さいました」

「はじめまして」

お互いに深々と挨拶します、そしてです。

その人は先生にこう言いました。

「僕はお嬢様の従者です」

「そうですか」

「名前を潤一郎といいます」

「潤一郎さんですか」

「名前は。姓は件といいますと」

「といいますと」

「実は僕もこのお屋敷にいる人達も皆というのです。」

「牛から生まれまして」

「牛の頭をお持ちなんですね」

「そうした妖怪でして」

「それでというのです。」

「それで件とは逆ですが」

「姓はですね」

「そうなっています」

「そうなのですね」

「お嬢様も同じ姓です」

「件というのですか」

「はい」

「そうだというのです。」

「お嬢様が決められました」

「姓のことは」

「そして名前もつけてくれました」

「では皆さんは」

「お嬢様は家族とです」

「その様にいうのです。」

「言われています」

「左様ですか」

「はい、そして」

牛の青年さんはさらに言いました。

第三幕その十

「これよりです」

「牛女さんにですね」

「お会いして下さい」

「それでは」

こうしてでした、先生達はお家の中に案内してもらいました。お家の中も非常に清潔で上品な和風の内装でした。

そのお家の中の居間に入るとでした、そこには。

振袖の桃色の地で赤の牡丹と白い雪の模様の着物にえんじ色の綺麗な帯をきた牛の頭の女の人がいました。女の人は正座していて先生に深々と頭を下げました。

そうしてです、先生にこう言いました。

「はじめまして、牛女といます」

「貴女がですね」

「名前は件一葉といます」

「よいお名前ですね」

「有り難うございます、実は」

牛女さんは先生に一呼吸置いてからお話しました。

「先生に診察して欲しいのですが」

「それで、ですか」

「お呼びしました」

「僕が医者だからですね」

「人も生きものも診られますね」

「はい、どちらも」

先生は牛女さんにその通りだと答えました。

「僕は」

「そして相手が誰でも分け隔てしない」

牛女さんはこのことも言いました。

「妖怪でも」

「誰もが命がありますので」

「公平なのです」

「そうする様に心掛けています」

「そうした方なので」

「呼んで頂きましたか」

「はい、実はです」

牛女さんは先生にあらためて言いました。

「近頃歯が痛みまして」

「歯がですか」

「そちらを見て頂きたいのです」

「そうでしたか」

「お願い出来るでしょうか」

「喜んで」

先生は牛女さんに笑顔で応えました。

「そうさせて頂きます」

「そうですか。では」

「早速ですか」

「お口の中を見せて頂けるでしょうか」

「それでは」

こうしてでした、先生は。

牛女さんのお口の中を診察してそうして言いました。

「虫歯がありますね」

「そうですか」

「ですから」

それだというのです。

「歯もです」

「痛んでいるのですね」

「左の右の奥歯がです」

そこがというのです。

「結構酷いです」

「では」

「すぐに治療しましょう」

「抜かなくていいのですか」

「そこまではいっていません」

結構酷いにしてもというのです。

「ですから」

「治療してですか」

「痛まない様にしましょう」

「では」

「ただ。何度か手術が必要なので」

先生は牛女さんにこうも言いました。

「ですから」

「お家ではですか」

「難しいので」

「それなら」

ここで口裂け女が言ってきました。

「学園の敷地内にある病院で」

「八条病院ですね」

「あそこに入って」

そうしてというのです。

「治療しましょう」

「それでは」

牛女さんは口裂け女の言葉に応えました。

「先生がよければ」

「僕はそれで」

構わないとです、先生も答えました。

「病院の許可が出れば」

「それは大丈夫ですよ」

口裂け女は先生に明るく応えました。

第三幕その十一

「あの病院も学園の中にありますね」

「だから妖怪のことはですか」

「知っていました」

「それでいいのです。

「理解もです」

「してくれていますか」

「ですから手術室を使うことも」

「このこともいいのです。

「出来るので」

「それで、ですね」

「はい」

「まさにいいのです。

「手術室も使えます」

「そうですね」

「ですから」

「それでいいのです。

「病院の方には私からお話しますので」

「それで、ですね」

「後はです」

「僕が病院に行って」

「手術をして下さい」

「それでは」

「その様に」

「こうお話ししてでした。

手術のお話は決まりました、それが終わるとです。

皆は牛女さんに山海の珍味を出してもらって宴となりました、その中で王子はこんなことを言いました。

「妖怪も虫歯になるんだね」

「はい、死ぬことはないですが」

牛女さんは猪の味噌漬を焼いたものを食べる王子に言いました。

「それでもです」

「虫歯になったりするんだ」

「怪我もしますし」

それにということです。

「病気にもです」

「なるんだね」

「胃潰瘍にも」

「胃潰瘍にもなるんだ」

「はい、実は」

「牛女さんの胃は幾つか」

「一つです」

牛女さんははっきりと答えました。

「そちらは」

「一つだね」

「はい」

そうだということです。

「そこは牛と違います」

「じゃあ身体自体もだね」

「人間のものです」

「どうかって思っていたけれど」

王子は今度は鮎の塩焼きを食べつつ言いました。

「そうなんだね」

「頭は牛でもです」

「身体はだね」

「人間です」

「歯は牛の歯だったよ」

先生が蛸のお刺身を食べつつ言います。

「診たらね」

「そうだったんだ」

「かなり丈夫な歯だよ」

「牛の歯だけあってだね」

「うん、よく磨かれてもいたけれど」

「甘いもの好きだったのかな」

「実は」

牛女さんはこのことは恥ずかしそうに言いました。

「私は甘いものが好きで最近ライムジュースが特に」

「ライムって歯に悪いからね」

「おそらくそのせいですね」

「うん、ライムはビタミン補給にはいいけれど」

王子は牛女さんにお話しました。

「歯にはね」

「よくないですね」

「だから気をつけないとね」

「わかりました」

「昔はイギリス海軍でもライムを絞ってラム酒に入れて飲んでいたけれど」

トミーは言いました。

「歯に悪かったんだね」

「そうだね」

王子はトミーのその言葉に頷きました。

「水兵さんとか虫歯多かっただろうね」

「そうだね」

「ビタミンを摂らないと壊血病にもなるけれど」

「虫歯になるとね」

「それはそれで問題だったね」

「そうだね」

トミーは柚を入れたお野菜の酢の物を食べつつ言いました、そう
したお話をしながらそのうえで今は牛女さんと一緒に食べました。

第四幕その一

第四幕 歯について

先生達は牛女さんのお家でご馳走になってから口裂け女さんに送られてお家に戻りました、そこで口裂け女さんは先生に尋ねました。

「牛女さんは治るんですね」

「はい、ご心配なく」

先生はにこりと笑って答えました。

「抜くこともなく」

「手術したらですか」

「ちゃんと治ります」

「そうなんですね」

「ですから」

それでということです。

「後は手術の時間が決まれば」

「先生がですね」

「手術します」

「牛の歯も治せるんですね」

「獣医なので」

だからだということです。

「そちらの免許も持っていますので」

「じゃあ牛女さんの歯は」

「完治します」

「間違いなくですね」

「ご安心を」

「ではお任せしますね」

口裂け女さんはにこりと笑って応えました。

「牛女さんの歯は」

「虫歯は痛むだけでなく」

「健康にもですね」

「悪いので」

だからだということです。

「見付ければです」

「すぐに治した方がいいんですね」

「はい」

実際にという返事でした。

「よく噛まなくなって痛みで寝られなくなったり物事に集中出来なくなったり」

「本当に怖いですね」

「ですから」

それだけにということです。

「虫歯は見付けましたら」

「早くですね」

「治すことです」

何といってもということです。

「本当に」

「では牛女さんも」

「見付けたからには」

「すぐに治療すべきなんです」

「虫歯はそうしないと駄目です」

「じゃあ日のことは」

「そちらで、ですね」

先生は牛女さんに尋ねました。

「決めてくれますね」

「そうさせてもらいます」

「ではそちらはお願いします」

「また連絡させてもらいますね」

「お願いします」

こうしたお話をしてでした。

先生は口裂け女さんに送ってくれたお礼を言ってから皆と一緒に
お家に入りました、王子はそのまま執事さんと一緒にご自身のお家
に帰りました。

それで先生は動物の皆と一緒にりましたが。

ちゃぶ台のある居間で作務衣姿になってからウイスキーをロック
で飲んで干し肉を食べつつ言いました。

「歯はね」

「大事だよね」

「本当に」

「先生歯のことも言ってるけれど」

「実際にだよね」

「歯は大事だね」

「うん、今言った通り虫歯は放っておいたら駄目だし」
健康面から言ってもというのです。

「歯槽膿漏もね」

「駄目だね」

「そちらも健康に悪いよね」

「そうだね」

「だからね」

それということです。

第四幕その二

「歯のことはね」

「すぐにだね」

「治すべきだね」

「見付け次第」

「そうしないと駄目ね」

「人間も生きものもね」

「誰でもというのです。」

「勿論妖怪もね」

「だからああしてだね」

「牛女さんにお話したんだね」

「そういうことね」

「そうだよ、虫歯がどれだけ健康に悪いか」

「それこそというのです。」

「わかったものじゃないよ、健康な歯がね」

「健康な体を作る」

「そういうことだね」

「だから歯はいつも磨いて」

「それで奇麗にしないと駄目ね」

「牛女さんは奇麗にしていたよ」

「歯はよく磨いていたというのです。」

「けれどやっぱりね」

「ライムジュースね」

「それをかなり飲んでいたっていうけれど」

「実際なんだ」

「かなり飲んでいたから」

「虫歯になったのね」

「うん、歯を磨いても」

それでもというのです。

「やっぱりライムは歯に悪いから」

「飲み過ぎるとだね」

「虫歯になる」

「そうなるのね」

「そうだよ、ライムは確かにビタミン補給にはいいけれど」

このことは事実でもというのです。

「どうしてもね」

「そこが問題ね」

「確かに滅茶苦茶酸っぱいし」

「酸性強いわね」

「しかも柑橘類だから糖分もかなり入ってるし」

「歯には悪いね」

「しかも牛女さんは元々甘いものが好きだそうだから」

このこともあってというのです。

「余計にね」

「虫歯になりやすくなっている」

「実際に虫歯になった」

「そうなんだね」

「うん、これは僕も気をつけないとね」

ウイスキーを飲みながら言いました。

「言っている自分自身もね」

「そう言って自分も虫歯になったらね」

「まさに医者の不養生」

「本末転倒だよ」

「まさに」

「そうなるからね」

だからだということです。

「気をつけないと駄目だよ」

「だから先生いつもしっかりと歯も磨いてるね」

ジップはこのことを指摘しました。

「そうしているね」

「寝る前は絶対に磨いているね」

チーチーも言います。

「歯を」

「大体一日二回か三回は磨いてるわよ」

ポリネシアも指摘しました。

「基本毎食後ね」

「そうして磨いているからだね」

「先生は歯もお口の中も奇麗で」

チープサイドの家族も言います。

「虫歯にならないのね」

「歯槽膿漏とかもね」

「若し歯を磨かなかったら」

どうなるか、ホワイティは言いました。

「先生も虫歯になるね」

「それで大変なことになっているわよ」

ダブダブの指摘は容赦のないものでした。

「先生も」

「いや、そう思うと歯磨きは大事だね」

老馬の言葉はしみじみとしたものでした。

第四幕その三

「お口の中も常に健康に」

「身体だけじゃなくてお口の中もだね」

トートーの口調はしみじみとしたものでした。

「いつも奇麗に」

「さもないと虫歯になったり」

「歯槽膿漏にもなって」

オシツオサレツはお互いの口の中の歯を見ながらお話しています。

「健康も害する」

「本当に怖いね」

「だから先生も歯を磨いてね」

最後にガブガブが言いました。

「僕達もそうしているね」

「うん、本当にね」

まさにとです、先生は皆に言いました。

「歯磨きは大事だよ」

「全くだね」

「毎日ちゃんと歯を磨かないとね」

「健康の為にも」

「虫歯になって痛みで苦しまない為にもね」

「実は日露戦争で活躍した児玉源太郎さんも虫歯だったんだ」

先生はこの人のお話もしました。

「それで苦しんだらしいよ」

「そうだったんだ」

「あの人虫歯だったんだ」

「それで苦しんだんだ」

「うん、あとね」

さらに言う先生でした。

「歯は迂闊に抜いたら駄目だよ」

「そうだよね」

「だから先生牛女さんの歯は抜かなかったんだね」

「手術で済むとわかったから」

「尚更だったのね」

「そうなんだ、歯が一本ないだけで」

それだけでというのです。

「随分とね」

「違うんだね」

「歯が一本あるかないかで」

「それだけで」

「そうなんだ、だから歯は出来るだけ治療して」

そしてというのです。

「抜くことはね」

「しないのね」

「出来るだけ」

「それで手術を選んだ」

「そうなのね」

「そうなんだ、昔の歯医者さんは抜くだけの人が多くて」

それだというのです。

「よくなかったんだ」

「確かピョートル大帝？」

「ロシアの皇帝さんだったね」

「ロシアの近代化を推し進めた」

「あの人だったわね」

「あの人は興味があるものは何でも身に着けたがる人でね」
「そうした人でいうのです。」

「歯科のこともね」

「興味を持ったから」

「身に着けたんだ」

「そうだったんだ」

「船や大砲を造る技術も身に着けたから」
「そうもしたというのです。」

「あの人だね」

「何か凄いね」

「皇帝って畏まってると思っていたら」

「あの人は違ったんだね」

「そうだったのね」

「悪く言うと随分ガラッパチな皇帝さんでね」
「先生はこうした日本語も使いました。」

「それでね」

「そうした技術を身に着けていたんだ」

「ご自身で」

「そんな人だったんだ」

「礼儀作法とには無頓着で」
「それでいうのです。」

「天衣無縫、我が道を行くで」

「うわ、遠くで見ているといいけれど」

「近くだと困る人？」

「そんな人かな」

「ひょっとして」

「うん、動く台風みたいな人で
実際にそういうのです。」

第四幕その四

「歯が痛い人を見たら大喜びでね」

「歯を治していたんだ」

「それはいいかな」

「いいことだね」

「虫歯を治してあげていたら」

「怪力で歯をペンチで引っ抜いていたんだ」

それがピョートル大帝の歯医者さんでした。

「身長二メートルでいつも斧やハンマーを使っていた怪力でね」

「うわ、痛そう」

「そんな人に歯を抜かれたら」

「虫歯より痛そう」

「思い切り歯を抜かれるなんて」

「物凄い力で一気に抜くから」

虫歯になった歯をです。

「後で腫れ上がった人もいるそうだよ」

「うん、そうだね」

「何といっても」

「それはね」

「そっちの方が怖いんじゃない？」

「虫歯よりも」

「だから皇帝さんの前では皆歯が痛そうな素振りは見せなかったんだ」

そうだったということです。

「本当に歯を抜かれていたからね」

「皇帝さんらしくない行いだけれど」

「そんな虫歯の治し方もあったんだ」

「虫歯は抜く」

「そうしたものか」

「そしてこれが普通だったんだ」

「歯科のということです。」

「かつてはね」

「虫歯は抜く」

「それで終わりだったんだ」

「そうだったのね」

「だから昔は歯が何本かなくなっている人も多くて
それです。」

「今みたいに口に歯が沢山ある人もね」

「少なかったのね」

「昔は」

「そうだったのね」

「うん、虫歯になったら抜いていて」

「その歯をということです。」

「歯磨き粉や歯ブラシも今よりレベルが低かったし」

「ああ、そういえばね」

「歯磨き粉とか歯ブラシっていつもCMで言ってるね」

「最新技術を使ったとか」

「お口の中を清潔にするとか」

「そうね」

「こちらも日進月歩だから」

「技術的にということです。」

「凄い技術になっていてね」

「逆に言うと昔はそちらの技術も拙くて」

「それでなんだ」

「その分虫歯の人もいたんだ」

「今より多かったんだ」

「歯を磨くことの大事さも今より普及していなくて」

「それでというのです。」

「そしてね」

「そのこともだね」

「虫歯も多かったのね」

「そうなんだね」

「歯のない人も」

「そうだよ、だから今日露戦争のお話もしたけれど」

先生のお話はこちらに戻りました。

「乃木希典大将は歯がかなりなくなっていたんだ」

「児玉さんは虫歯で」

「乃木さんはそうだったんだ」

「皆歯で苦労していたんだね」

「昔は」

「うん、僕は今のところ虫歯になったことはないけれど」

「それでもというのです。」

「虫歯になったらね」

「大変だね」

「虫歯はまずならないこと」

「そのことが大事だね」

「何といっても」

「そうだよ、だから毎日磨いていくよ」

歯はというのです。

「そうしていくよ」

「それが第一だね」

「歯のことは」

「本当に」

「酷いお話もあってね」

先生はウイスキーをさらに飲みました、ボトルのそれを自分で入れてロックで楽しみ続けています。

第四幕その五

「ルイ十四世だけれど」

「フランスの王様だったね」

「ブルボン朝の」

「太陽王だったね」

「あの人はとあるお医者さんが歯は万病の元と言い出して
それでというのです。」

「その人の手術を受けて歯を全部抜いたんだ」

「全部って」

「それは凄いね」

「というか歯が万病の元とか」

「よくそんなこと言ったね」

「医学は色々紆余曲折もあって」

「ただ順調に進歩していた訳ではないというのです。」

「色々珍説も出てね」

「それはもう珍説の中の珍説だね」

「何といっても」

「物凄い説もあったね」

「聞いていて驚いたわ」

「それでルイ十四世は歯を全部抜いたけれど」

「それでもというのです。」

「麻酔なしでも抜いた跡を埋める為に焼きゴテも入れたんだ」

「それって酷過ぎてね」

「逆にそのお医者さんに怒りたいわ」

「よくそんな学説出たね」

「出せたわね」

「しかも手術は失敗して」

そしてということです。

「お口とお鼻がつながったんだ」

「尚更酷いね」

「もう悪魔みたいな所業だね」

「麻酔なしで歯を抜いて焼きゴテって」

「しかも手術が失敗したって」

「これで終わりじゃなかったしね」

ルイ十四世の受難は続いたということです。

「歯が全部なくなったから」

「ああ、噛めないね」

「歯がないから」

「それも一本もだから」

「噛めないね」

「相当柔らかくしたもののしか食べられなくなってね」

噛めなくなっただけということです。

「消化不良と下痢にも苦しんで」

「ただ痛いだけでなくて」

「まだなんだ」

「まだ続いたんだ」

「本当に地獄だね」

「さらになんて」

「おトイレが極端に近くなって」

下痢をします。

「お口と鼻がつながったから食べたものがお鼻から吹き出てね」

「それも嫌だね」

「どうにも」

「苦しいよ、それ」

「食べたものがお鼻にいくって」

「そうしたことあるけれど」

「それでもとです、皆も言います。

「それがいつもだとね」

「これまた地獄だね」

「地獄の苦しみだね」

「何といっても」

「しかもお口の隅から隅まで奇麗に出来なくなったんだ」

ルイ十四世の苦しみはまだありました。

「お鼻とつながったからね」

「ああ、お口だけだとね」

「歯磨きをしたらお口全体も奇麗になるね」

「歯磨き粉が歯を磨いているうちに泡になって」

「それでお口全体も奇麗になるね」

「そうなるわね」

「それもなくたってね」

お鼻とつながった結果です。

「お口の中を全部奇麗に出来なくなって口臭もね」

「酷くなったんだ」

「そうだったのね」

「噛めなくなって下痢にもなって」

「口臭も酷くなって」

「あとあまりにも酷い下痢で」

また下痢のお話になりました。

第四幕その六

「体臭もね」

「ああ、それもね」

「仕方ないね」

「下痢が酷いとね」

「まあそのね」

「おトイレに行く前にか」

「口臭も体臭も酷くなったんだ」

両方共ということです。

「本当に大変だったんだよ」

「歯を全部抜いたらだね」

「そこまで酷いことになったの」

「もう地獄の苦しみじゃない」

「いいことは一つもない」

「ルイ十四世も大変だったね」

「これが四十一歳の時でルイ十四世は七十九歳まで生きたけれど」

それでもということです。

「ずっとね」

「ルイ十四世は大変だったんだ」

「歯を全部抜いたせいで」

「あとの三十八年はそうだったのね」

「人生ではかなり長い期間だけれど」

「大食漢でもあったけれど」

そちらでも有名な人だったということです。

「本当にね」

「大変だったんだね」

「どれだけ歯が大事かわかったわ」

「そうしたお話を聞いたら」

「僕もそう思うよ、医学は紆余曲折もあって」

順調に進歩しているのではなく、です。

「珍説も結構出ているけれどね」

「それはまた極端ね」

「歯が万病の元とか」

「どうしてそうした結論になったかわからないけれど」

「とんでもない珍説ね」

「今の医学からみればそうした説もあったんだ」

昔はということです。

「本当に医学も他の学問と同じでね」

「紆余曲折があったのね」

「そうなんだね」

「かつては」

「そして今もかな」

「うん、今もかもしれないよ」

先生も否定しませんでした。

「人は間違えるもので時としてね」

「おかしいことも言うから」

「そしておかしいこともするし」

「だからなのね」

「今もなんだね」

「そうした説も出ていると思うよ」

珍説、それがということです。

「僕もね」

「あらゆることで言えますね」

トミーも言ってきました。

「世の中では」

「うん、ちょっと考えればおかしいことでもね」

「そうしたことを言う人が」

「そこは冷静に考えてね」

「自分でも検証してですね」

「見極めないとね」

そうしないと、というのです。

「僕達も間違えてしまうよ」

「そういうことですね」

「そう僕は思うよ」

こうお話してでした。

皆はこの日は寝ました、そしてです。

八条病院で牛女さんの歯の手術の日と時間も決まって先生はその準備にも入りましたがここで、でした。

動物の皆は研究室で論文を書いている先生に言いました。

第四幕その七

「先生も色々あるね」

「その人生でね」

「アフリカに行ったり航海したりね」

「サーカスやキャラバンや郵便局やったろ」

「月にも行ったし」

「そして今は日本にいるし」

「日本でも色々あるね」

先生自身言います。

「確かにね」

「何とかね」

「色々あったわね」

「狐さんや狸さんと会ったり」

「北海道や長野や琵琶湖にも行って」

「高野山に入ってたね」

「沖縄でヒヤンやハイとも会ったし」

本当にということです。

「色々あったね」

「そうだね」

「日本に来てからも」

「姫路城で宴のセットもしたし」

「本当に色々あったね、そしてね」

先生は論文を書きながらさらに言いました。

「今度は牛女さんの歯の手術だね」

「妖怪の歯の手術っていうのも」

「凄いね」

「こうした経験も滅多にないよ」

「そうそうね」

「先生の人生は本当に色々あるよ」

「それがまた楽しいね、ピンチがあっても」

それでもというのです。

「皆がいるから何とかなってきたし」

「僕達がいてなんだ」

「トミーや王子も」

「それでなんだ」

「ピンチも乗り越えてきているし」

それでというのです。

「運もあるね」

「先生いつも言ってるね」

「本当に運がいいって」

「そうね」

「うん、僕は本当に運がいいよ」

実際にというのです。

「有り難いことにね」

「それでピンチも何とかなって」

「僕達と一緒にいわれて」

「それで幸せに過ごせている」

「そうなのね」

「そうだよ、出会う人や生きものも性格がいい相手ばかりだしね」

このこともいいというのです。

「僕は本当に幸せだよ」

「まあ悪人は何処でもいるし」

「残念なことに」

「けれど先生には実際に僕達がいるし」

「ピンチは何とかするし」

「悪い人が来てもね」

「いつも悪いね」

先生は論文を書きつつ紅茶を飲みます、ミルクティーを飲んでいますが先生はやっぱりお茶では一番好きです。

それでその紅茶についても言いました。

「しかも美味しいお茶も飲めるしね」

「紅茶飲むと頭が冴えるんだよね」

ホワイティが言ってきました。

「先生は」

「だからよく飲むんだよね」

「論文を書く時もね」

チープサイドの家族も言います。

「それで頭を冴えさせてね」

「飲んでいくのね」

「しかも目も覚めるし」

このことはジップが指摘しました。

「そちらもいいんだよね」

「尚且つ美味しい」

ガブガブは食いしん坊だけあってこのことがお話ししました。

「余計にいいね」

「紅茶とミルクの組み合わせは最高よ」

ダブダブも言います。

「イギリスが生み出した最高の飲み方よ」

「そこにお砂糖も入れてさらに甘くする」

老馬はこちらを忘れませんでした。

第四幕その八

「これがいいんだよね」

「物凄く甘くして飲む」

トートーはそのミルクティーを飲む先生を見えています、勿論そのミルクティーにはお砂糖が入っています。

「それがいいんだよね」

「何杯も飲んでね」

こう言ったのはポリネシアでした。

「論文を書くのが先生のスタイルだね」

「論文どんどん書いているけれど」

チーチーは先生の飲みながらも続いている速筆を見えています。

「それが先生の学問だね」

「先生の学問ってお茶が欠かせないね」

「読む時も飲んでるし」

オシツオサレツも言います。

「その中でも特に紅茶だね」

「とりわけミルクティーだね」

「うん、ただね」

先生は笑いながら言いました。

「甘いものを飲んでいるから」

「そうそう」

「先生もしっかり歯を磨いているね」

「虫歯にならない様に」

「そうだね」

「うん、虫歯の怖さは知っているから」

だからだということです。

「そうしているよ」

「そうだね」

「糖尿病にも気をつけてお砂糖は入れても少なくしてるし」

「沢山入っていないわよ」

「入れない時もあるし」

「ミルクの甘さだけでもいいしね」

その味がということです。

「だからね」

「飲んでるね」

「今もね」

「そうしているね」

「うん、ミルクティーは好きだよ」

何といってもということです。

「だから今の論文もね」

「書いていくんだね」

「どんどん」

「そうしていくのね」

「学者は論文を書くことだよ」

これが仕事だということです。

「何といってもね」

「学んでね」

「読んで検証して」

「フィールドワークもして」

「そうしていくことだよ、若ししないと」

学んでそして論文を書かないと、ということです。

「学者としてね」

「よくないね」

「そうだよね」

「何といっても」

「そうだね」

「若しそれをしなかったら」

その時はというのです。

「学者としてはね」

「よくないね」

「やっぱり学者さんならね」

「論文を書かないとね」

「読んで検証してね」

「フィールドワークもして」

「そうしないと駄目だよ」

こう言いつつ論文を書きます、そして。

先生はロシア語の本を読んでまた言いました。

「実は今は歯科の本を読んでいるんだ」

「その歯だね」

「今度牛女さんの歯を手術するけれど」

「歯の論文を書いているんだ」

「歯科のそれを」

「そうなんだ」

皆に笑ってお話しました。

「今はね」

「手術をしながら論文も書く」

「奇遇だね」

「それはまた」

「そうだね、ちなみに論文は鯨の歯だよ」

この生きもののことだということです。

第四幕その九

「あのお魚のものだよ」

「あの歯が何列もあって」

「折れてもすぐに次の歯が出て来るっていう」

「あのお魚ね」

「それなんだ」

「うん、鯨の歯は面白いね」

「こうも言う先生でした。」

「学んでいると」

「普通歯は一列でね」

「折れたら次はないけれど」

「それでもね」

「鯨の歯が違っていて」

「折れても次が生える」

「すぐにそうなるのよね」

「それが面白くて」

「それでいうのです。」

「学んでいてもね」

「学びがいがあるんだ」

「先生にとっても」

「そうなのね」

「実際に」

「面白いね、人間の歯はね」

「先生は自分達の歯のお話もしました。」

「乳歯と永久歯があるね」

「そうそう」

「それで乳歯は子供の頃に抜けて」

「その下から永久歯が出て来る」

「そうなるのよね」

「この乳歯が抜ける時がもどかしいんだよね」

先生は笑って言いました。

「これが」

「皆そう言うね」

「人間の人達は」

「乳歯が抜ける時がもどかしいって」

「歯がぐらぐらと揺れて」

「その感触が」

「僕も経験したけれどね」

人間だからです、当然先生も乳歯が抜けています。

「歯が揺れてね」

「その下から永久歯が出て来る」

「その感触がどうにもだね」

「もどかしいんだね」

「いい感触ではないね」

どうにもというのです。

「それでレントゲンを取ったら」

「歯が縦に二列ある」

「そうだよね」

「人間の子供ってね」

「そうなのよね」

「うん、そうもなっていて」

それということです。

「成長するとね」

「それでだね」

「徐々に歯が抜けていって」

「永久歯になって」

「後は生え代わらないんだよね」

「そう、けれど鯨はね」

今論文に書いているこの生きものはということです。

「何度でもね」

「生え代わるね」

「すぐに次の歯が出るね」

「歯が折れても」

「そうなるわね」

「かつてはプロトペランという鯨もいて」

この鯨はといいますと。

「下顎に何列もね」

「もう歯があったの」

「そうだったんだ」

「既に」

「物凄い姿だったんだ」

そのプロトペランという鯨はということです。

第四幕その十

「本当にね」

「そうだったんだ」

「鮫も色々だね」

「進化の過程でそんな鮫もいたんだ」

「かつては」

「そうだよ、そして今の鮫はね」

「その歯はということです。」

「それこそね」

「何度もだね」

「歯が生え代わる様になっている」

「そうだね」

「これだと虫歯になっても」

「それでもということです。」

「大丈夫だね」

「その歯が駄目になってもね」

「すぐに別の歯が生えるから」

「何の問題もないね」

「確かに」

「便利な歯ではるね」

「先生は笑って言いました。」

「それは」

「うん、歯は抜けたら終わりだけけど」

「その時は」

「けれど鮫はね」

「そうしたことはないからね」

「いいね、まあ鮫は他にも色々あるよ」
論文を書きつつ言いました。

「種類も多いし」

「かなり多いっていうね」

「鮫と一口に言っても」

「そうだね」

「この学園の水族館でもそうだね」
鮫がいるということです。

「そうだね」

「ネコザメとかドチザメとかいるね」

「あと他にもね」

「鮫の仲間がいるね」

「ああした鮫達もいればホオジロザメやアオザメもいるね」
こうした鮫達の名前も出しました。

「そうだね」

「人食い鮫だね」

「大きくて怖くて」

「いつも泳いでいないと死ぬんだったね」

「そうした鮫達もいれば深海にもね」

そちらにもというのです。

「鮫達がいるね」

「ええと、ミツクリザメとか」

「あとラブタザメとかもいたかな」

「そうだったね」

「そちらにもね」

「本当に鮫の種類は多いよ」

実際にというのは。

「何かとね」

「そうだね」

「一口に鮫といっても」

「種類が多いね」

「そうだよ、さっき人食い鮫って言葉が出たけれど」

鮫といえばそれという言葉でした。

「ヨシキリザメみたいにスマートな鮫もいればイタチザメみたいに
見るからに獰猛そうな鮫もいるよ」

「人食い鮫っていても」

「ホオジロザメだけじゃないのよね」

「あの鮫映画にも出てるけれど」

「大きくてとても狂暴で」

「滅茶苦茶怖いけれど」

「あの鮫もいてね」

そしてということです。

「シュモクザメみたいな鮫もいるよ」

「あのトンカチみたいな頭の形の鮫ね」

「あの鮫も目立つよね」

「目がそのトンカチみたいな頭の左右にあって」

「一度見たら忘れられないよ」

「だから鮫の進化や生態も学ぶと面白いんだ」

そうなのです。

第四幕その十一

「これがね」

「成程ね」

「そして齒のこともなんだ」

「学ぶと面白い」

「そうなのね」

「そうだよ、だからね」

「それでというのです。」

「僕は今楽しんでるよ」

「鯨のことを学んで」

「そうしているのね」

「そちらの学問のことも」

「そうなのね」

「学問は何でも好きだしね」

「学べるならです、それが先生なのです。」

「今もだよ」

「先生鯨ともお話出来るしね」

「水族館でも出来るし」

「そうしたことも」

「だから水族館にも行って」

「そうしてというのです。」

「そしてね」

「そこでだね」

「そちらの鯨さん達ともお話するのね」

「そうするんだね」

「歯のことを聞くよ」

鯨達に直接というのです。

「そうするよ」

「そして鯨語のこともだね」

「論文にも書く」

「そうするのね」

「そのことも書かないとね」

鯨と鯨語で話すこともというのです。

「当然ね」

「そうだよね」

「学問は誠実に」

「それも先生のポリシーだね」

「若し学問が誠実でないと」

その時はというのです。

「とんでもないことになるからね」

「学者さんが嘔吐くとね」

「誠実でないのならね」

「学問がどれだけ歪むか」

「そして悪影響が及ぶか」

「わかったものじゃないからね」

だからだというのです。

「僕も気をつけてるよ」

「そうだよね」

「だから鯨語のことも書くね」

「そうするんだね」

「絶対にね」

こう言ってます、先生は論文を書き続けます。そうしてでした。

論文を書きつつ先生はこんなことも言いました。

「歯がどれだけ大事か」

「わかるね」

「何かと」

「そうした論文を書いても」

「牛女さんのことでもね」

「本当にわかるわね」

「うん、じゃあ牛女さんの手術もね」

これもというのです。

「しっかりとするよ」

「そうしてだね」

「そのうえでだね」

「牛女さんの虫歯を完治させる」

「そうするわね」

「絶対にね」

こう言ってでした。

先生は論文を書いていきました、そうして牛女さんのことも考えるのでした。

第五幕その一

第五幕 虫歯の手術

手術の日が来ました、牛女さんはお家の人達と一緒に病院に来ました。そこで先生に心配そうに尋ねました。

「痛くないですね」

「大丈夫です」

先生は笑顔で答えました。

「そこまで酷くはないですから」

「そうですか」

「今治療すれば」

「痛くなくてですか」

「完治しまして」

そしてということです。

「抜くこともです」

「ありませんか」

「はい、手術の時は痛みません」

そこまではないということです。

「麻酔も使いますし」

「大丈夫なのです」

「今の技術では」

それならということです。

「これといってです」

「痛まないで、ですね」

「無事にです」

「完治しますか」

「ですから」

それでというのは。

「安心して下さい」

「それでは。ただ」

「ただといいますと」

「はい、ライムジュースも問題ですね」

「飲み過ぎるとですよ」

「その場合はですか」

牛女さんはこう返しました。

「そういえば最近お水の代わりの様にです」

「ライムジュースを飲まれていましたか」

「そうでした」

「流石にそこまで飲まれますと」

「歯に悪かったですね」

「そうかと。歯磨きをされていても」

それでもというのは。

「やはり」

「そうですか」

「味が好みでも」

「それでもですね」

「過ぎると何でもです」

「よくないですね」

「ライムですと歯に悪いですし」

それにというのは。

「他の食べものも飲みものもです」

「過ぎるとよくないですね」

「そうしたものです、お酒もですね」

「飲み過ぎると体を壊しますね」

「そうなりますので」

だからだということです。

「まことにです」

「何でもですね」

「過ぎないことです」

このことが大事だということです。

「どうしても」

「そういうことですね」

「そうなのです」

「これから気をつけます」

「では今はライムジュースは」

「飲む量を十分の一にしまして」

それでということです。

「その分お茶を飲んでいます」

「お茶ですか」

「色々なお茶を」

「それはいいですね」

「そうですね。お茶はお砂糖とかを入れませんし」

日本の飲み方でした、牛女さんは日本の妖怪なので飲むお茶も日本の飲み方で飲むことが好きなのです。

第五幕その二

「麦茶等を」

「麦茶はいいですね」

「先生もお好きですか」

「日本に来て好きになりました」

「そうなのですね」

「冷えた麦茶はいいですね」

「これが美味しいということです。」

「まことに」

「麦茶は冷えたものを飲みますね」

「あれが特に夏にです」

「いいですね」

「僕も大好きです、実は代用コーヒーの味ですが」

「代用コーヒー？」

「欧州にはこうしたコーヒーもありまして」

「先生はこちらのお話もしました。」

「コーヒーがない時にです」

「飲むのですか」

「コーヒー豆ではなく蒲公英から作りました」

「春のあのお花から」

「これが麦茶の味です」

「そうなのですね」

「普通は熱いものを飲むので」

「それでということです。」

「麦茶とはです」

「味が同じでもですね」

「あまり評判がよくありません」

「熱い麦茶は」

実際にと言う牛女さんでした、そのお話を聞いて。

「私は」

「飲みたくないですか」

「やはり麦茶はです」

「よく冷えたものですね」

「それしかないかと」

麦茶といえぱということです。

「まさに」

「日本ではそうですね」

「ですから」

それでということです。

「どうしても」

「それではですね」

「はい、私は代用コーヒーを飲むとしたら」

その時はといいますと。

「よく冷えた」

「アイスコーヒーですね」

「そちらがいいですね」

「僕もそう思います、今代用コーヒーを飲むなら」

それならということです。

「やはりです」

「冷えたものですね」

「アイスですね」

こちらだということです。

「日本に来てそうになりました」

「そうですか」

「といいますか」

先生はさらに言いました。

「僕はイギリスにいて基本紅茶でした」

「紅茶派ですか」

「それでコーヒーは他国に行った時でないと飲まないで」

「代用コーヒーもですね」

「東欧に行った時に飲んだ位で」

「殆ど飲まれたことはないですか」

「はい」

そうだったということです。

「実は」

「馴染みのものではなかったのですね」

「イギリスは紅茶の国なので」

「私は紅茶も好きですが」

「日本の紅茶とは味が違うんです」

「そうなのですか」

「お水が違うので」

そのせいでということです。

「どうしてもです」

「味が違いますか」

「日本はお水が物凄くよくて」

「紅茶も美味しいですか」

「その美味しさに惚れ込んでいます」

先生は牛女さんににこりと笑ってお話しました。

「僕は」

「そこまでですか」

「はい、ですから」

それでというのです。

「牛女さんが紅茶を飲まれるなら」

「いいですか」

「日本で紅茶を飲めることは」

まさにというのです。

第五幕その三

「幸せなことです」

「では手術が終わりましたら」

「紅茶を飲めますか」

「手術した後は暫く飲んだり食べたり出来ないですね」

「はい、ですが」

それでもというのです。

「数時間後、僕がお話した時間が過ぎれば」

「その時はですね」

「飲めますので」

先生は今も笑顔でお話しました。

「ご安心下さい」

「わかりました、では」

「今から手術をしましょう」

「宜しく願います」

こうして牛女さんの虫歯の手術が行われました、手術が終わると

先生は牛女さんに飲んだり食べたり出来る時間をお話して。

そしてです、こうも言いました。

「あと二回位手術します」

「そうですか」

「それで完全に治しますので」

「あと二回の手術で、ですね」

「虫歯は治ります」

完治するということです。

「ご安心下さい」

「それでは」

「あと二回この時間を置きましょう」

「わかりました」

牛女さんは笑顔で応えてでした。

そうして六甲のお家に戻りました、送ったのは口裂け女さんでした。

その手術の後で、です。先生は動物の皆に大学の研究室で言いました。

「恐縮だよ」

「恐縮って？」

「一体どうしたの？」

「何かあったの？」

「いや、手術をしてね」

それでというのです。

「報酬だけれど二百万なんだ」

「歯の手術一回で？」

「それはまた多いね」

「歯の手術の値段じゃないね」

「ちょっとね」

「妖怪さんには保険はないけれど」

これは人のものだからです、妖怪の世界にはそうしたものはないみたいです。

「幾ら何でもね」

「二百万はだね」

「多過ぎるっていうんだね」

「幾ら何でも」

「多いって言ったけれど」

それでもということです。

「折角だからってね、けれどあと二回の手術分のお金はね」
「受け取らないんだね」

「もう」

「そうするんだね」

「二百万貰ったら」

それでということです。

「充分だよ」

「そうなんだね」

「じゃあね」

「お金のことはね」

「いいんだね」

「充分過ぎるって言っても足りないからね」

こう皆に言うのでした。

「だからこれでいいよ」

「先生ってお金には無欲だしね」

「今の生活が出来るだけあればいい」

「そうした人だからね」

「もう充分だね」

「うん、大学教授としてのお給料があるんだよ」

先生にはということです。

「だったらね」

「もういいよね」

「充分だし」

「それで手術一回で二百万も貰ったら」

「それじゃあね」

「多過ぎるよ、けれどね」

それでもというのです。

第五幕その四

「二百万はどうしてもって言われたから」

「受け取ったんだ」

「そうしたのね」

「そのお金は」

「何でも牛女さんにとっては何でもないらしいけれどね」
「それだけの額のお金ということです。」

「二百万は」

「そうなのね」

「牛女さんってお金持ちなのね」

「姫路城のお姫様もだったけれど」

「牛女さんにしても」

「そう、だからね」

「それでというのです。」

「何でもないみたいだけれどね」

「先生にとってはね」

「歯の手術としては」

「とてもね」

「多過ぎるね」

「そうだよ、だからあとの二回は受け取らないよ」
「その分はというのです。」

「僕はね」

「それがいいね」

「先生がそう言うならね」

「それじゃあね」

「お金はこれだけだね」

「うん、あと手術は無事に成功したから」

先生はこのことは笑顔でお話しました。

「もうね」

「後二回の手術もして」

「それでだね」

「牛女さんの歯は完治するね」

「そうなるね」

「虫歯はね」

本当にとです、トートーが言いました。

「辛いらしいからね」

「私には歯がないけれど」

ポリネシアは自分のお口のお話をしました。

「なると辛いことはわかるわ」

「ええ、何かとね」

ダブダブも言います。

「最近歯のお話をよくするし」

「鳥に歯はないけれど」

「哺乳類にはあるから」

チープサイドの家族も言います。

「それでもね」

「虫歯はなると怖い」

「だからならないに越したことはないよ」

ホワイティは鳥達に言いました。

「最初からね」

「そしてなったらすぐに治療する」

チーチーはなってからのことをお話しました。

「それが大事だってことだね」

「歯がどれだけ大切か」

老馬の口調はしみじみとしたものでした。

「最近実感するよ」

「歯が一本でも欠けると大変だっていうことも
ジップも言いました。」

「最近先生とお話して頷くばかりだよ」

「虫歯にならない様にしないと」

「そこから気をつけて」

オシツオサレツは二つの頭で言いました。

「そうしてね」

「なったらすぐに治療だね」

「僕達も気をつけないとね」

ガブガブはお話をまとめる様に言いました。

「本当に」

「うん、例え歯がなくてもね」

それでもとです、先生は皆にお話しました。

「お口の中は清潔にね」

「それが大事ね」

「歯がなくても」

「ルイ十四世のこともあるし」

「そうしないと駄目ね」

「それが出来たら」

「そう、お口の中が汚いと」

例え歯がなくても虫歯でなくともというのです。

「よくないからね」

「そこから雑菌が入ったりしてね」

「いざって時に病気になるから」

「だからだね」

「お口の中は綺麗によね」

「歯を磨いていなかった人が歯を磨いたら急に健康になった」
それはということです。

第五幕その五

「当然のことだよ」

「お口の中の雑菌がなくなって」

「それで雑菌に脅かされることがなくなったから」

「それで健康になるんだよね」

「そういうことだね」

「そう、だからね」

「それでというのです。」

「お口の中はね」

「奇麗にだね」

「誰でも」

「そうあるべきだね」

「そうだよ、清潔第一であることは」

「このことはというのです。」

「お口の中も同じだよ」

「歯磨き粉があればそれを使う」

「出来るだけ奇麗にする」

「それが大事ね」

「うん、昔はお塩で磨いていたけれど」

「それを歯磨き粉にしていたのです。」

「お塩も消毒になるし」

「いいんだよね」

「日本の時代劇でもそうして歯を磨いていたかな」

「木枯し紋次郎だった？」

「あの時代劇でも」

「それでもいいよ、ただね」

ここで先生はどうかというお顔になって言いました。

「一つ気になることはね」

「気になること？」

「っていうと？」

「何かあったの？」

「何でもかんでも買ってはいけないとか言っていた雑誌だけれど」
その雑誌で書いてあったことだということです。

「歯磨き粉を使わないで歯を磨けとかね」

「付け過ぎないといいんじゃないの？」

「要するに」

「それだけじゃないの？」

「何でも過ぎるとよくないから」

「それだけじゃないかしら」

「何か適当な理由をつけてね」

お医者さんでもある先生から見ればそう見えるものでした。

「主張していたけれど」

「それはだね」

「間違いだね」

「歯磨きは使った方がいい」

「そうなのね」

「あればね、あの雑誌は何でも買ってはいけないって言っていたけれど」

このことはといいますと。

「企業は嫌いだね、それが根幹にあって」

「企業が嫌いなもの」

「そうなの」

「それがまずあるの」

「極端な自然主義で科学とか文明が嫌いで
それでというのです。」

「化学調味料とか添加物が嫌いだね」

「そうしたものが入っているとなんだ」

「物凄く嫌うの」

「そうした傾向があるんだね」

「そうなんだ、それで言っていて科学的に検証したら
そうしたらどうかといいますと。」

「とんでもない間違いばかりなんだ」

「じゃあその買ってはいけないもなんだ」

「あと歯磨き粉のことも」

「信じたらいけないのね」

「あの雑誌は他にもおかしいことしか言わないから
その内容のことも言うのでした。」

「読者欄からコラムまでね」

「つまり全部だね」

「雑誌の主張の隅から隅までおかしい」

「そうした雑誌なの」

「だから買ってはいけないし読んでもいけないよ」
「その雑誌こそがというのです。」

「僕は思うよ」

「そんな雑誌も日本にはあるのね」

「非科学的で文明も嫌いな」

「そんな雑誌が」

「日本にはおかしい雑誌やタブロイド紙が多いけれど」
「それでもというのです。」

第五幕その六

「この雑誌はタブロイド紙二誌と並ぶね」

「日刊とか夕刊とか」

「あの日本のタブロイド達だね」

「もうどっちもね」

「本当に最低だからね」

「よくあんな記事書けるね、どっちの記者も」

「それで発表出来るよ」

「皆もそうした新聞紙にはこう言います。

「恥ずかしくないのかな」

「碌に取材もしていないっていうし」

「もう常識や理性や品性疑う様な文章ばかりで」

「そうしたものばかり書いてね」

「それで人に見せてね」

「恥ずかしくないの？」

「どっちの記者の人達も」

「皆言います。

「本当にね」

「人間恥を知らないとおしまいっていうけれど」

「どっちの記者も恥を知らないのならね」

「おしまいだね」

「本当にそうね」

「そうしたタブロイドと同じだね」

「先生は難しいお顔で皆にお話しました。

「とんでもない雑誌だよ」

「非科学的で」

「それで文明や企業が嫌いで」

「酷い雑誌なのね」

「うん、とんでもなく偏っているしね」

「この要素もあるというのです。」

「政治的に左にね」

「日本ってそういう人もいるけれど」

「そうした雑誌？」

「じゃあ普通の人はありのまま飲んだらいけないわね」

「悪影響を受けるから」

「そうなるから」

「そうだよ、歯磨き一つ取っても」

「そちらのことでもというのです。」

「おかしなことを言ってるよ」

「ちゃんを歯磨き粉付けて磨くのが一番」

「何といってもね」

「そうだよね」

「変に良識ぶっておかしなことをしたら」

「その時はといひましよう。」

「おかしなことになるよ」

「おかしなことをしたらおかしなことになる」

「そういうことね」

「だからちゃんとしたことをちゃんとやる」

「それが一番なのね」

「そうだよ、確かに医学も科学も誤った説が出るけれど」

「それでもというのです。」

「もう科学的にはっきりしているならね」

「そっちを守るべきね」

「そんな非科学的なことは信じないで」

「科学的に動いていく」

「そうあるべきね」

「そうだよ、買ってはいけないとい主張も出鱈目ないかがりしかなかったけれど」

先生はさらに言いました。

「その主張もね」

「出鱈目で」

「もうどうにもならない」

「そうしたものなのね」

「そうなんだ、この雑誌あの料理漫画の原作者も漫画の原作していたけれど」

先生は眉を曇らせたままお話を続けました。

「同じ様なものだよ」

「ひょっとしてあの漫画？」

「新聞記者がお店で暴れる」

「それがまかり通ってる漫画よね」

「あのとんでもなく酷い漫画」

「あの漫画は登場人物が皆下品で野蛮で無教養で短気な野蛮人ばかりだけれど」

それでもというのです。

第五幕その七

「原作者の人間性が出ているのかって思うし」

「そうした人も関わってるとなると」

「まさに類は友を呼ぶで」

「それでなのね」

「同じ様な人達だから」

「どっちも読まない方がいいのね」

「僕はそう思うよ、あの漫画の言ってることも出鱈目のオンパレードだしね」

「そこまで酷いというのはです。」

「読まない方がいいから」

「そして歯磨きはちゃんとする」

「それに尽きるわね」

「歯磨き粉も使って」

「そのうえで」

「うん、どうして歯磨き粉が世にあるか」

「そのことをというのです。」

「そこから考えないとね」

「だよね」

「必要ないものがずっと世の中にあるか」

「考えてみればわかるよ」

「ちょっと考えたらね」

「そうしたものだからね」

「それ故にというのです。」

「歯もお口も奇麗で健康である為に」

「ちゃんと歯を磨く」

「歯磨き粉も使って」

「それが大事ね」

「僕はそう思うよ」

笑顔で言ってでした。

先生はまた論文にかかりました、そして鯨の歯について書いてからです。

皆に言われてそれぞれのお口の中を見ました、そうして皆に言いました。

「うん、皆奇麗だよ」

「それで虫歯もない」

「そうなんだね」

「大丈夫なんだね」

「僕達のお口も歯も」

「だから安心していいよ」

皆に笑顔で言いました。

「このままね、だからこれからもね」

「お口を奇麗にしておく」

「それも毎日」

「そうするべきだね」

「特に甘いものを食べたなら」

その後はということです。

「磨いて奇麗にしておかないとね」

「そういえば」

ここでジップが言いました。

「エリザベス一世も虫歯になられたね」

「あの方は有名な」

「少なくともイギリスではね」

オシツオサレツも言いました。

「チョコレートを使ったビスケットが大好きで」

「そちらをよく召し上がられていてね」

「虫歯だらけだったっていうね」

トートーも言います。

「何でも」

「それは大変なことだね」

「そうよね」

チープサイドの家族もそのお話に言います。

「ルイ十四世も大変だったけれど」

「あの方もね」

「虫歯一本でも大変なのに」

こう言ったのはガブガブでした。

「それが一杯だとね」

「歯がないことも大変だけれど」

ホワイティもルイ十四世のことを思い出しました。

「虫歯だらけもね」

「痛くて仕方なかったでしょうね」

ダブダブ自身は歯はないですがこう想像しました。

「あの方も」

「非常に素晴らしい方だったけれど」

ポリネシアはその功績から思いました。

「悩みもありだったのね」

「虫歯が怖くない人はいないと思うけれど」

こう言ったのはチーチーでした。

「あの方もだったのかな」

「いや、本当に歯は磨かないと」

心から言う老馬でした。

「このことから思うね」

「うん、実はあの方は虫歯に苦しんでおられたんだ」

先生もエリザベス一世のお話をしました。

第五幕その八

「当時チョコレートを使ったお菓子なんて高価だったけれど」

「かなり好きでね」

「あの時は今位歯を磨かなかったし」

「それじゃあね」

「虫歯になられたのも当然」

「そうだね」

「残念ながらね」

先生はこうお話しました。

「そういうことだよ」

「そうだね」

「何というかね」

「あの方も虫歯に苦しんでおられたなんて」

「虫歯も深刻ね」

「そうよね」

「だから虫歯が多い分だけね」

エリザベス一世はということです。

「あの方は健康でなかったよ」

「そうだよね」

「今だったら歯を磨くしね」

「虫歯の治療もしっかりしているけれど」

「昔はそうじゃなかったし」

「あの方も虫歯が多くて」

「それで大変だったんだ、ルイ十四世の王妃も」

この方もということです。

「チョコレートが大好きでね」

「虫歯だったの」

「その方も」

「そうだったの」

「そうだったんだ、とても明るい人だったそうだけれど」
「それでもというのです。」

「虫歯にはね」

「苦しんでおられたのね」

「何か本当に虫歯のお話って尽きないね」

「一旦すると」

「そうだね、チョコレートっていうと」

「このお菓子のお話もしました。」

「やっぱりお砂糖入れるね」

「そのままだと苦いだけよ」

「カカオだけだと」

「もうもの凄く苦くて」

「それこそお砂糖を入れないとね」

「中々食べられないかも」

「ヒトラーも好きでね」

「ナチスドイツの独裁者だったこの人もというのです。」

「お肉もお魚も食べない菜食主義者でね」

「しかもお酒も飲まなくて」

「あと煙草も吸わない」

「そんな人だったね」

「それは有名よ」

「その代わりチョコレートが好きで」

「それでというのです。」

「甘いもの全体が好きだね」

「じゃあやっぱり虫歯？」

「あの人も虫歯だったんだ」

「それで苦しんでいたの」

「あの人にしても」

「そうだよ」

ヒトラーもということです。

「あの人もね」

「独裁者も虫歯だった」

「そうなのね」

「何というかね」

「虫歯のお話って尽きないね」

「今お話した通りに」

「本当に」

まさにということです。

「ヒトラーも人間だったんだね」

「虫歯に苦しむとか」

「あれだけ悪名高いけれど」

「それでも」

「まあヒトラーはその政策はともかくね」

悪名高いそれは置いておいてということです。

第五幕その九

「私人としてはまともだったしね」

「確かにそうだね」

「菜食主義でお酒も煙草もしなくて」

「女性のお話もないし」

「身内贔屓もしなかったっていうし」

「趣味は読書と音楽鑑賞で」

「しかも仕事人間だったんだ」

お仕事もちゃんとしていたというのです。

「そんな人だったからね」

「やったことはとんでもないけれど」

「個人としては真面目で」

「別に悪い人じゃない」

「そうだったのね」

「贅沢もしなかったしね」

独裁者でやりたいことをやれてもです。

「個人としては人種的偏見はかなり強くても」

「真面目で質素で」

「しかも悪いこともしない」

「そんな人だったの」

「いじめとか意地悪もしなかったよ」

「そうだったというのです。」

「これといってね」

「何かイメージ違うね」

「処刑見て生肉食べたりね」

「お酒もどんどん飲んで」

「しょっちゅう暴力振るったり」

「そんな感じだったけれど」

「個人としてはそうだったから」

真面目で清潔で質素だったというのです。

「それで甘いものが好きで」

「チョコレートとか」

「それで虫歯になったりしていた」

「それで苦しんでもいたのね」

「ケーキも好きでね」

このお菓子もということです。

「料理人がよく夜もお仕事しているヒトラーに差し入れていたそうだよ」

「へえ、ケーキ好きだったんだ」

「そっちもだったの」

「チョコレートも好きで」

「ケーキもだったの」

「ヒトラーを批判することは当然にしても」

その行いを見ればです。

「それでもどういった人か知る」

「そのことは大事だね」

「無闇に否定しないで」

「そうするべきね」

「しっかりと」

「そうだよ、ヒトラーだって人間だった」

甘いものが好きで虫歯で苦しむ様な。

「そうだったことはね」

「わかっておく」

「それで学ぶことね」

「それが大事ね」

「そうだよ、まあヒトラーは毎日明け方まで仕事をして」
ヒトラーの生活のお話もしました。

「遅くても九時には起こされて」

「あまり寝てないね」

「明け方から九時って」

「というか殆ど徹夜じゃない」

「毎日そうって」

「働き過ぎよ」

「それでお風呂に入って疲れを癒して」
そしてというのです。

「そのうえでね」

「またお仕事ね」

「本当にお仕事ばかりじゃない」

「幾ら真面目でも」

「お仕事ばかりって」

「独裁者は自分に権限を集めるから独裁者だよ」
自分で何でもするからというのです。

「それでお仕事もね」

「増えるんだね」

「必然的に」

「そうなるんだね」

「独裁者っていうのは」

「そうだよ、だからヒトラーも忙しくて」
そうなってというのです。

「毎日そこまで働いていたんだ」

「独裁者も大変ね」

「働き詰めなんて」

「毎日そうだって」

「何というか」

「これはスターリンもそうだったから」

ソ連のこの独裁者もということです。

第五幕その十

「独裁者は怠け者だとなれないよ」

「独裁者になるなら働き者であれ」

「そういうことだね」

「要するに」

「そうでないと駄目なのね」

「そうだよ、怠け者の独裁者なんてね」

それこそということです。

「存在しないよ」

「国を思いのままに動かすのも大変だね」

「それがどんな目的でも」

「独裁者も大変なのね」

「働き者で優秀で真面目でないとね」

こうした要素が揃っていないと、ということです。

「なれないよ」

「ううん、僕達は無理だね」

「ヒトラーやスターリンにはなれないね」

「チョコレートやケーキは食べられても」

「虫歯にもなっても」

「僕にもなれないよ、というか僕は彼等程度真面目でも働き者でもないし何といっても」

先生は笑って言いました。

「優秀でもないしね」

「ヒトラーやスターリンは優秀ではあった」

「とんでもないことをしても」

「そうした人達でも」

「そのことは事実でね」

「それでというのはです。」

「僕は独裁者にはなれないよ」

「先生はあくまで学者さんだね」

「何といっても」

「他の何でもないね」

「先生の場合は」

「お医者さんであってね」

「そしてということです。」

「そしてね」

「そうしてだよね」

「色々な分野の学者さん」

「そうだね」

「先生は」

「他の何でもないから」

「だからだということです。」

「独裁者にはだよ」

「ならないね」

「差しよから」

「それじゃあ先生はね」

「これから学問をしていくね」

「そうするのね」

「そのつもりだよ、僕は学問が好きだから」

「それでということです。」

「学者さんになれてね」

「満足してるよね」

「お仕事もことは」

「それじゃあね」

「これからもね」

「選挙には行くけれど」

日本国籍になっているので日本の選挙にです。

「それでもね」

「立候補はしないね」

「政治家の選挙にも」

「それには」

「そう、出なくてね」

それでというのです。

「政治学者でもあるから」

「そちらでだね」

「政治をしていくね」

「学者さんとして」

「そうしていくよ」

こう言ってでした。

先生は牛女さんの二度目の手術の前も論文を書いていきました、
そして動物園にも行きました。その中で。

ふとです、先生は動物園の生きもの達の歯を見て言いました。

「皆歯が奇麗だね」

「一回虫歯で騒動になったけれど」

「今はだね」

「虫歯もなくて」

「いい感じね」

「うん、あの時はどうして皆虫歯になるか」

そのことがというのです。

第五幕その十一

「騒ぎになっていたね」

「そうだったね」

「それでミステリーにもなって」

「それでね」

「先生探偵にもなったね」

「うん、けれど今は皆気をつけているから」

動物園の生きものにお菓子をあげることはなくなったというので
す。

「だからね」

「それでだよね」

「皆虫歯にならなくなって」

「歯が奇麗だね」

「そうだったね」

「よかったよ」

先生はにこりと笑って言いました。

「動物園の皆もだよ」

「健康でないと駄目だし」

「それだったからね」

「虫歯にならない」

「そうでないとね」

「駄目だから」

それでということです。

「今みていいと思うよ」

「鰐さんもそうだし」

「ライオンさんでもね」

「象さんもだしね」

「熊やゴリラの諸君も」

彼等もということです。

「そうだね」

「熊さんやゴリラさんは甘いものも食べるね」

「蜂蜜とか林檎が好きだから」

「だったらちよっと虫歯が心配になるね」

「そうした生きものは」

「けれどね」

それでもということです。

「その彼等もね」

「虫歯がない」

「そのことはいいことだね」

「本当にね」

「何といっても」

「やっぱり歯は健康の第一歩だから」

そのうちの一つだからだということです。

「僕もそれを確認して嬉しいよ」

「先生にとっても」

「そうなってるのね」

「本当に」

「そうなのね」

「そうだよ」

皆に笑顔で言います。

「動物園の皆もそうで何よりだよ」

「そうだね」

「それじゃあね」

「動物園も行ったし」

「お家に帰って晩ご飯食べて」

「お風呂も入ってね」

「お酒も飲もうね」

先生は夜はそちらだと言いました。

「今日はジンを飲もうかな」

「いいね、ジンも」

「日本人はあまり飲まないけれど」

「ストレートではね」

「けれどあれがまた先生好きだよね」

「それでよく飲むんだ」

そのジンもということです。

「そして今日はね」

「ジンを飲む気分だね」

「じゃあご飯を食べてお風呂に入ったら」

「その後はね」

「ジンにしましょう」

「ロックでナッツと一緒に楽しもう」

笑顔でこう言ってでした。

先生は皆とお家に帰りました、そうしてジンを実際に楽しみました。

第六幕その一

第六幕 妖怪達の齒

牛女さんは二度目の手術の前に休日に先生をまたお家に呼びました、そうしてそのうえで動物の皆と一緒に来たこんなことを言いました。

「あれからライムジュースは控えています」

「そうされていますか」

「それよりもです」

こう先生に言うのでした。

「おぢやをです」

「飲まれていますか」

「麦茶にお抹茶に梅茶にと」

「日本のお茶をですか」

「よく飲んで」

そうしてというのです。

「ライムジュースはです」

「控えられていますか」

「幸いお茶は好きなので」

それでというのです。

「そちらを飲んでいますと」

「ライムジュースはですか」

「飲まないでいられます」

「お茶があればですか」

「はい」

そうだというのです。

「大丈夫です」

「それは何よりですね」

「お茶は美味しいですし」

牛女さんは先生に穏やかな笑顔でお話しました。

「しかも身体にもいいですね」

「はい、ビタミンがあります」

「そうですね」

「ですから飲みましても」

「身体にいいですね」

「左様です」

まさにということです。

「ですから」

「それで、ですね」

「どんどん飲まれて下さい、またお砂糖を入れないと」

そうなればということです。

「別に歯にもです」

「悪くないですね」

「はい」

そうだというのです。

「ですから」

「飲んで問題はないですね」

「全く、後は塩分とミネラルをです」

「摂ればいいですね」

「そうされて下さい」

「塩分でしたら」

牛女さんの傍にいる若い人が言ってきました。

「お料理にです」

「入れていますね」

「はい」

まさにというのです。

「そうしています」

「それは何よりです」

「和食ですと塩分が多いですね」

「そうですね」

「ですから」

それでというのです。

「これといってです」

「塩分のことはですね」

「問題ないです」

こちらのお料理を食べていると、というのです。

「そしてミネラルもですね」

「和食ですと」

先生は笑顔で応えました。

「別にです」

「問題なしですね」

「そちらのお料理でしたら」

「それでは」

「あと実は」

ここでまた牛女さんが言ってきました。

第六幕その二

「ミルクもです」

「飲まれていますか」

「毎日よく飲んでいます」

「ミルクもいいです」

「よく飲んで、ですね」

「ミルクは栄養の塊なので
だからだということです」

「飲まれてもです」

「そうですか」

「何もです」

まさにということです。

「問題ありません」

「では」

「どんどん飲まれて下さい、そして歯磨きは」

「忘れないで、ですね」

「されて下さい」

「わかりました」

「あと二回の手術で完治しますので
それでということです」

「ご安心下さい」

「それでは」

「あと二回手術を受けて下さい」

「そうさせて頂きますね」

「それとお金は受け取ったので」

先生はこちらのお話もしました。

「もうです」

「宜しいですか」

「はい」

牛女さんにこちらのお話もしました。

「二百万も頂きましたので」

「二百万で充分ですか」

「ですから」

それでというのです。

「もうです」

「いいですか」

「充分です」

「二百万は私にとっては」

「何でもないですか」

「何しろこの六甲に広い土地を持っています」

牛女さんは先生にご自身のお話をしました。

「そこに六甲の妖怪の多くが住んでいて」

「大家さんですか」

「妖怪のマンションもアパートも多く持っていて」

そしてというのです。

「遊ぶ場所もです」

「持っていますか」

「そちらの収入がありますので」

先生にお話します。

「二百万位は」

「何でもないのですか」

「はい」

「そうだということです。」

「妖怪は妖怪でお金を持っています」

「そうなのですね」

「私입니다」

「収入があります」

「その管理もしています」

「では」

「はい、二百万をお出ししました」

最初の手術のお金としてということです。

「ですが」

「もうです」

「では」

「はい、むしろ二百万も頂いて」

先生は恐縮した声で牛女さんに言いました。

「ご安心下さい」

「それでは」

牛女さんは先生のお話を聞いてこう返しました。

「お酒やお菓子では」

「そちらですか」

「お礼をしないというのもどうですし」

「だからですか」

「お酒やお菓子で宜しいでしょうか」

「そうですね」

先生は牛女さんの提案に考えるお顔になって答えました。

第六幕その三

「そこまでいわれるなら」

「はい、それでは」

「宜しく願います」

「ではこれを」

牛女さんは先生ににこりと笑ってあるものを出しました、そしてです。

先生は皆と一緒にお家でお話しました。

「いや、美味しいね」

「そうだね」

「このお饅頭美味しいよ」

「羊羹も素敵だわ」

「お団子もね」

皆も言います、見れば皆牛女さんから貰った和菓子を食べています。色々なお菓子が一杯あります。

そしてです、皆で笑顔で食べながらお話しています。そこで先生はまた言いました。

「こんな美味しいものを貰えるなんてね」

「やっぱり恐縮？」

「先生としては」

「そうなの？」

「どうもね」

実際にということです。

「これまたね」

「まあ謙虚で無欲なのはいいけれど」

老馬が先生に言いました。

「あちらさんもどうしてもって言ってるし」

「いいと思うよ」

「そうよね」

チープサイドの家族も言います。

「お菓子ならね」

「これ位だと」

「お金は恐縮でも」

今言ったのはダブダブです。

「あちらもお礼をしない訳にはいかないわよ」

「これは礼儀だったね」

チーチーも言います。

「日本の」

「お礼を贈るのはね」

ジップはチーチーに続きました。

「他の国でもあるけれど日本は特にそれがあるね」

「まあこれ位はいいんじゃないかしら」

ポリネシアは寛容な感じでした。

「お礼の贈りものなら」

「日本にはお中元とかもあるしね」

ガブガブはこちらのお話をしました。

「それじゃあね」

「いいと思うよ」

トートーもこう言いました。

「こうしたものなら」

「あちらもお礼をしない訳にはいかないし」

ホワイティは先生に強く言いました。

「そこは応じないかね」

「若し応じなかったら」

「先生の方が失礼になるよ」

オシツオサレツは二つの頭で言いました。

「イギリスと同じで日本も礼儀には厳しいし」

「先生は紳士だし守らないかね」

「受け取ってよかったのかな」

先生は言いました。

「つまりは」

「そうそう」

「お金は受け取ったけれどね」

「それでもういいとしても」

「お礼には応じないと」

「相手にも悪いし失礼だしね」

「そういうことだね、じゃあ素直に」

先生は皆にあらためて言いました。

「食べてね」

「うん、そしてね」

「楽しんでね」

「美味しかったってお礼言おうね」

「またお会いした時にね」

「それがいいね」

先生は羊羹を食べて言いました、そしてです。

この日はお菓子を楽しんで次の日は大学の研究室に入って論文を書きました、そこに何とろくろ首にです。

子泣き爺や砂かけ婆、一反木綿にぬり壁、から傘、河童にキジムナーに鬼と色々な妖怪達がやってきました。

第六幕その四

妖怪達はノックをして先生にどうぞと言われて研究室に入るところ
う言ってきました。

「ドリトル先生ね」

「お話は聞いてるわ」

「会うのははじめてかな」

「八条学園にいる妖怪だけれど」

「僕達のことは知ってるかな」

「うん、この学園の妖怪は有名だしね」

「それでというのです。」

「君達のことは聞いているよ」

「それは何より」

「わし等のことを知っているとは」

「まあわし等はこの学園の住人だしな」

「悪魔博士と一緒にずっと暮らしているし」

「それも仲良く」

「ああ、あの大学の伝説の教授の」

「先生は悪魔博士と聞いて言いました。」

「何でも百五十歳は過ぎてるといいう」

「いや、百五十歳って」

「それもう人間じゃないわよ」

「あの人のことは僕達も聞いてるけれど」

「本当のこと？」

「百五十歳って」

「江戸時代から生きてるって噂があるよ」

先生は周りにいる動物の皆に答えました。

「何でもね」

「江戸時代って」

「凄いね」

「仙人みたいね」

「そういえば仙術とか錬金術やってるって噂あるね」

「それで長生きになってるの？」

「そうかしら」

動物の皆はお話を聞いて言いました。

「あの人は」

「それで妖怪さん達ともお付き合いあるの」

「噂では秘書の人がそうだとか」

「そんなお話もあるね」

「ああ、ろく子ちゃんね」

着物姿のろくろ首が言ってきました、細長い首が何メートルも伸びていてその先のお顔がにこにこしています。

「あの娘は実際によ」

「妖怪だったんだ」

「あの秘書さん」

「そうだったのね」

「私の親戚でね」

「それでというのです。

「ろくろ首よ」

「そうなんだ」

「その実は」

「そうだったのね」

「ええ、それでね」

そのうえでというのです。

「学園の中でよく一緒に飲んでるわ」

「そうだったんだ」

「あの人はろくろ首で」

「貴女と親戚同士なのね」

「そうなのね」

「そうよ、それで今日ここに来たのはね」

ろくろ首は自分から言いました。

「先生に歯を見て欲しくてね」

「それでだね」

「お邪魔したの」

こう言うのでした。

「私達はね」

「牛女さんのお話を聞いてだね」

「私達も歯が気になって」

それでというのです。

「お邪魔したのよ」

「そうだったんだね」

「それでだけれど」

ろくろ首はあらためて言いました。

「先生に診て欲しいの」

「診察代はこちらで」

砂かけ婆はお金をぽんと出してきました、見れば札束です。

「百万でどうですか」

「診察代としては多いから」

先生は砂かけ婆にこう返しました。

第六幕その五

「幾ら何でも」

「そうかのう」

「その十分の一でも多いかな」

「十万で」

「ちよっとね」

「いやいや、金の心配はいらん」

砂かけ婆は先生にこう言ってきました。

「わしは砂金も出せる」

「砂だけじゃなくて」

「うむ、だからな」

それでということです。

「お金の心配はいらんからな」

「それでなんだ」

「十万では」

それだけしか受け取ってもらえないことはということです。

「少ない」

「では」

「せめて半分」

「五十万を」

「受け取って欲しいのじゃが」

「そうなんだね」

「そこは頼む」

こう言うのでした。

「百万が駄目でもな」

「そこまで言うのなら」

先生も頷いてです、そうしてでした。

実際に五十万だけ受け取りました、そのうえで研究室に来た皆のお口の中を歯科室に移ってそこで診ました。

その診察の後でこう言いました。

「皆大丈夫だよ」

「虫歯はないのね」

「うん、一本もね」

ろくろ首に答えました。

「皆ないよ」

「それは何よりね」

「今が大丈夫ならね」

「この状態を維持することね」

「歯磨きはこれからもね」

先生は妖怪達に穏やかな笑顔でお話しました。

「しっかりとね」

「磨いていくことね」

「特に寝る前にね」

この時にということです。

「しっかりとね」

「それじゃあね」

「甘いものは食べていいけれど」

「歯磨きはしっかりと」

「そうして」

そのうえでということです。

「歯を健康なままだね」

「それじゃあね」

「あとね」

ここで、でした。先生はさらに言いました。

「鬼君の歯が凄かったね」

「わしの歯が」

「特に強いね」

「まあわしの歯は自慢だな」

「実際にだね」

「何でも噛み砕けるということで」

まさにということです。

「自慢だよ」

「だからこれからもね」

「歯を磨いてだね」

「その強さを保っていつてね」

「そうさせてもらうよ」

是非にというのです。

「わしも」

「そうすればね」

「これからも美味しいものを楽しんで食えるな」

「そう出来るよ」

「それは何より、では今宵は焼肉に」

それにということです。

「日本酒もな」

「飲むね」

「そうするでしょう」

鬼は楽しそうに言いました。

「是非」

「それではね」

「尚焼肉は牛のだよ」

「そちらの焼肉だね」

「最近羊も好きだが」

こちらのお肉を焼いたものもというのです。

第六幕その六

「今宵は牛だ」

「そちらの焼肉もいいね」

「うむ、愉しみだ」

「皆で食べよう」

その焼き肉をとです、ぬり壁も言います。

「お酒も飲んで」

「やはりお酒は欠かせないな」

「どうしても」

まさにということです、そしてです。

子泣き爺は先生にこんなことをお話しました。

「実はわし等は宴が好きで」

「それでだね」

「毎晩のう」

「飲んで食べてだね」

「楽しんでおるのじゃ」

そうしているというのです。

「毎日」

「では夜は」

「わし等の時間であるし」

このこともあってというのです。

「心からのう」

「楽しんでいて」

「毎日な」

それこそというのです。

「皆で」

「仲良くだね」

「やっておるよ」

「それでだけれど」

ここで先生は妖怪達に尋ねました。

「皆朝に寝ているのかな、やっぱり」

「如何にも」

「朝は寢床じゃ」

「そこでぐーぐーぐー」

「そうしとるよ」

「歌であったけれど」

先生は日本の妖怪アニメを思い出しつつ言います。

「実際になんだね」

「大体午前中は寝て」

「昼飯を食べてから動くな」

「それで夕方から夜に遊んで」

「夜明け頃に寝ておるな」

「夜は墓場で運動会というけれど」

アニメのお話をさらにしました。

「そうなんだね」

「あの歌の通りだよ」

「あの漫画家さんの作品通りで」

「あの漫画家さんも今はわし等の仲間だし」

「妖怪博士になっておるよ」

「妖怪博士だね」

その名前を聞いてです、先生はこう言いました。

「江戸川乱歩の小説でもあったね」

「二十面相じゃな」

「あの人の作品だったのう」

「二十面相は色々あったが」

「その作品の一つだな」

「それを思い出したけれど」

先生はさらに言いました。

「あの人は本当にそうなったんだね」

「あれだけ妖怪に親しんだ人はいなかったからね」

ぬり壁が言ってきました。

「だからだよ」

「お亡くなりになって」

「そしてね」

そのうえでというのです。

「妖怪になったんだ」

「大好きなそれにだね」

「そう、外見はそのままで」

「妖怪のことなら何でも知っている」

「そうした人になったんだよ」

「そうなんだね」

「今はわし等と楽しく過ごしているよ」

そうしているというのです。

「本当にね」

「それは何よりだよ」

先生もお話を聞いて笑顔になりました。

第六幕その七

「僕もあの人のことは知っていたけれど」

「凄い人だったね」

「妖怪のことなら世界一だったと思うよ」

「その人が妖怪になって」

「なるべくしてなったと思うし」

「それにということです。」

「幸せになっていたらね」

「尚更だね」

「そう思うよ」

「そうなんだね」

「その人にもお会いしたいね」

「先生は笑顔でこうも言いました。」

「何時かね」

「そうだね、じゃあね」

「機会があればね」

「先生は妖怪の皆に言いました、そしてです。」

「彼等が研究室を後にしてからです、先生は動物の皆にお話しました。」

「妖怪の諸君とも会えたね」

「この学園にいるね」

「皆とね」

「それが出来たわね」

「よかったよ、歯も奇麗だったしね」

「皆のそれがということです。」

「本当にね」

「よかったよね」

「何かとね」

「歯も奇麗で」

「他にも色々聞けたしね」

「うん、それとね」

先生はさらに言いました。

「あの漫画家さんのことも聞けたしね」

「そうそう」

「あの人のこともね」

「ちゃんと聞けたし」

「よかったね」

「今は妖怪になっていて」

妖怪博士になってというのです。

「妖怪の皆と楽しく暮らしているんだね」

「心から愛していた妖怪になれるとか」

「いいよね」

「それじゃあ楽しくない筈がないね」

「そうだよね」

「あの人位妖怪が好きで詳しい人は」

先生は先程妖怪の皆にお話した言葉を言いました。

「本当にね」

「先生も知らないね」

「そうだよね」

「先生も妖怪や妖精が好きだけれど」

「それでもだね」

「僕なんか足元にも及ばないよ」

その漫画家さんと比べたらということです。

「本当にね。多くの妖怪の身体の仕組みやお家や生活まで描いたんだから」

「それ凄いね」

「そこまで描くなんてね」

「これまでそこまでした人いるかな」

「いないよね」

「うん、知らないね」

先生にしてもということです。

「実際にね」

「そうだよね」

「そのことは」

「僕達も思い当たらないし」

「そうした人がいて」

そしてということです。

「今愛している妖怪と一緒になれたんなら」

「それでだね」

「素晴らしいね」

「そのことは」

「何といってもね」

先生は笑顔で言いました。

「こないいいことはないよ」

「うん、しかしね」

ここでこう言ったのはジップでした。

「よく妖怪の身体とかお家まで描いたね」

「普通そこまでしないわよ」

ダブダブも今は唸っています。

「本当に」

「そんなことする人なんてね」

それこそとです、ホワイティも言います。

第六幕その八

「これまでいなかったんじゃないかな」

「日本じゃ怪獣の身体まで設定するけれどね」

「特撮でね」

チープサイドの家族も言います。

「それでも妖怪のそこまで描くなんて」

「何処までなんだろうね」

「妖怪って日本だけでも多いけれど」

ガブガブも首を傾げさせます。

「世界中の妖怪にも詳しいみたいだし」

「しかもそこまで描くなんてね」

トートーもガブガブに言います。

「尋常なものじゃないよ」

「尋常じゃないっていうか」

チーチーも唸っています。

「まさに人類の歴史一の妖怪学者だったんじゃないかな」

「そちらのことは下手な学者さん以上だったっていうし」

「そうかも知れないね」

オシツオサレツも言います。

「あの漫画家さんは」

「そこまでだったかもね」

「そして今は妖怪さんになっていて妖怪さん達と一緒にいる」

「こう言ったのは老馬です。」

「いいことだね」

「日本人の宗教は生まれ変わりがあるけれど」

ここから言うポリネシアでした。

「妖怪にも生まれ変わるんだね」

「そうだね、僕はキリスト教徒だけれど」

それでもとです、先生も皆にお話します。

「生まれ変わりは信じているよ」

「そこは宗教によるね」

「キリスト教の世界では最後の審判があつて」

「仏教や天理教では生まれ変わりがあつて」

「そういうことだね」

「そう、宗教はそれぞれの精神世界でね」

そのことであつてというのです。

「生まれ変わりを信じるならね」

「生まれ変わるんだね」

「そうなるのね」

「次の人生を送れるのね」

「そうだよ、魂は不滅で」

それでというのです。

「最後の審判まで待ったりね」

「生まれ変わる」

「そこは色々だね」

「宗教によって違う」

「それぞれの精神世界で」

「アメリカのパットン将軍はキリスト教徒だったけれど」

先生は今度はこの人のお話をしました、第二次世界大戦で活躍したとても勇敢で目立つ個性の人でした。

「生まれ変わりを信じていたんだ」

「そうだったんだ」

「あの人もなんだ」

「キリスト教徒でも」

「そうだったのね」

「自分をカルタゴの名将ハンニバルの生まれ変わりと言っていたんだ」

そうだったというのです。

「あの人はね」

「そうだったんだ」

「あの人は」

「自分をハンニバル將軍の生まれ変わりって言っていたんだ」

他にもピュロス大王の生まれ変わりともね」

ハンニバルだけでなくです。

「言っていたんだ」

「キリスト教でも生まれ変わりあるんだ」

「それを信じている人がいるんだ」

「そうだったんだ」

「うん、そして日本ではね」

この国ではといいますと。

「昔から生まれ変わりの話が多いよ」

「あの漫画家さんだけじゃなくて」

「他の人もなんだ」

「生まれ変わってるの」

「そうしたお話が多いんだ」

「うん、これは猫のお話だけれど」

そのお話はといいますと。

「長く飼っていた猫が亡くなって」

「生まれ変わる？」

「そうだったんだね」

「今のお話の流れだと」

「暫くして子猫が家の前にちょこんと座っていたとかね」
そうしたことがというのです。

第六幕その九

「あったりするそうだよ」

「長く飼っていた猫の生まれ変わり？」

「それじゃあ」

「そうなの」

「僕はそうじゃないかって思っているよ」

先生としてはです。

「長く飼ってもらって馴染んでいるからね」

「だからだね」

「今度も猫に生まれ変わって」

「それでお家に来た」

「またそのお家で暮らす為に」

「そうじゃないかなってね、そう思うと」

先生は微笑んで言いました。

「面白いね」

「そうだよね」

「そうしたお話を聞くとね」

「生まれ変わりって本当にあるんだ」

「何かと面白いね」

「また次の一生を送るなんて」

「僕も仏教徒なら」

どうかとです、先生はさらに言いました。

「生まれ変わっているね」

「一度死んでも」

「それでもだね」

「生まれ変わって次の一生を送る」

「それが繰り返されるのね」

「人とは限らないけれどね」

次の一生はというのです。

「決して」

「他の生きものの可能性もあるね」

「僕達みたいな生きものの場合もあれば」

「妖怪の場合もある」

「そうなのね」

「六道があるね」

仏教にはです。

「そのうちの何処かになるよ」

「一度死んだら何処かに生まれ変わるね」

「その六つの世界のどれか」

「どれかに生まれ変わるんだなね」

「そうだよ、そしてね」

それにといいます。

「相当悪いことをしたら地獄に堕ちたりね」

「餓鬼になるのよね」

「仏教の考えだと」

「地獄に堕ちるのも嫌だけれど」

「餓鬼に生まれ変わるのもね」

「かなり嫌よね」

「うん、餓鬼にはね」

先生にしてもでした。

「生まれ変わりたいくないね」

「そうだよね」

「餓鬼だけはね」

「凄く嫌だね」

「あれに生まれ変わることは」

「動物には生まれ変わったら嬉しいけれど」

あの漫画家さんが妖怪を愛していたのと同じだけ動物の皆を愛している先生はそう思っています、この辺り同じです。

「けれどね」

「餓鬼はね」

「地獄に堕ちるのも」

「どうしても嫌だね」

「絶対に」

「それは嫌だよ、というか」

それにといいのです。

「僕は修羅界にも行きたくないね」

「ずっと戦うとかね」

「先生は絶対無理ね」

「先生と戦争ってね」

「無縁だから」

「僕は争いは嫌いだよ」

それこそ一番嫌いなものです。

「心からね」

「争いは何も生まない」

「先生いつも言ってるわね」

「争うのなら学ぶ」

「それが先生だね」

「そう考えているからね」

だからだということです。

第六幕その十

「どうしてもね」

「修羅界は嫌だね」

「餓鬼界や地獄と同じだけ」

「そうだね」

「その行いで生まれ変わるなら」

それならということです。

「僕は修羅界はないと思うけれど」

「それでもだね」

「絶対に行きたくないね」

「先生としては」

「うん、あと極楽に行くのなら」

それならということです。

「人界の方がいいかな」

「そうなんだ」

「極楽よりもなんだ」

「この世界の方がいいんだ」

「確かに色々あるけれど」

人界にはということです。

「いいことも悪いこともね」

「それでもだね」

「人界の方がいいんだ」

「また人間に生まれ変わりたい」

「そうなのね」

「流石に北朝鮮には生まれたくないけれど」

それでもということです。

「基本的にね」

「人間に生まれ変わりたいのね」

「先生は」

「若し仏教徒なら」

「そう考えているのね」

「うん、それかね」

若しくはということです。

「皆と同じ様な」

「動物にだね」

「生まれ変わりたいのね」

「そうなんだね」

「どちらかだね」

こう皆に言うのでした。

「僕は。妖怪も悪くないけれどね」

「妖怪も楽しそうだしね」

「見ていたら」

「牛女さんもそうだし」

「他の妖怪の皆もね」

「だからね」

それでということです。

「妖怪もいいね」

「確かにね」

「かなり長生きみたいだしね」

「その間ずっと楽しいとか」

「凄くいいね」

「それだけに」

さらに言う先生でした。

「妖怪もいいね」

「そうだね」

「じゃあね」

「先生が生まれ変わるなら人か動物か」

「それか妖怪だね」

「その三つのうちどれかだね」

先生は紅茶を飲みつつ微笑んで言いました。

「そして幸せに過ごしたいね」

「幸せは絶対だね」

「そうじゃないと生きている意味ないね」

「誰もが幸せになる義務がある」

「先生いつもそう言ってるし」

「何故生きているか」

今度はこう言う先生でした。

「それはね」

「幸せになる為」

「それが先生の持論だね」

「だからだね」

「僕達も幸せになるべきで」

「先生もだね」

「そして他の皆もだよ」

まさに誰もがということです。

第六幕その十一

「幸せにならないとね」

「生きているのなら」

「それならね」

「楽しく幸せに」

「そうなるべきだね」

「そうだよ、幸せになる努力もね」

これもということです。

「しないとね」

「先生も努力しているしね」

「幸せになる為に」

「学問だけじゃなくて性格もね」

「いつも円満になる様にね」

「紳士でありたいと思っているよ」

先生は皆に応えました。

「人に嫌なことをしないこともね」

「先生は自分では努力してないって言うけれど」

「それは立派な努力よ」

「何といっても」

「本当にね」

「そう言ってくれるならね」

それならということです。

「僕はね」

「これからだね」

「努力していくね」

「幸せになる為に」

「そうしていくよ」

本当にというのです。

「僕はね」

「先生は努力していないって言うけれど努力しているよ」

「それは僕達が保証しているよ」

「紳士になる様になっていることも」

「そして学問もね」

「学問は好きだからしているけれど」

それでもというのです。

「好きなことに励むこともだね」

「やっぱり努力だよね」

「それが自分を高めることになるなら」

「それならね」

「そうだね、ただ本当に僕はね」

謙遜しての言葉でした。

「自分ではね」

「努力しているとはだね」

「思っていないのね」

「そうなんだね」

「うん、気楽に暮らしているね」

本当にこう思っています。

「僕は」

「それでもいつも本読んでるし」

「現地に行ってもいってるし」

「検証もしてるじゃない」

「実際に紳士だし」

「そうなる様になっているし」

「そうだといいね」

皆の言葉に励まされたお顔になって述べました。

「僕も」

「このことは安心していいよ」

「努力しているから今の先生があるんだよ」

「そしてこれからもね」

「先生はどんどん立派になっていくよ」

「そうなる様に心掛けるよ」

先生にしてもです。

「僕も」

「是非ね」

「じゃあ牛女さんの手術もね」

「またするね」

「あと二回」

それだけというのです。

「するよ」

「うん、じゃあね」

「そっちも頑張っていこうね」

「牛女さんの歯完治させようね」

「是非共ね」

先生は笑顔で応えました、そうして皆とさらにお話をして楽しい時間を過ごしました。

第七幕その一

第七幕 牧場で

先生はこの時動物の皆と一緒にお仕事で兵庫県のある牧場に来ていました、そこで牛達を診察しましたが。

その診察の後で先生は皆に言いました。

「いや、この牧場の牛達は立派だね」

「確かに体調が悪い牛もいるけれど」

「丁寧に育ててもらって」

「いい感じなのね」

「うん、凄くね」

こう皆にお話します。

「肉牛も乳牛もね」

「粗末に育てられていないんだね」

「そういえば厩舎も奇麗だったしね」

「清潔だね」

「ご飯もよかったし」

「牛さん達体格立派だね」

「毛並みもよかったわ」

「何故日本の牛肉や牛乳が美味しいのか」

それはということです。

「丁寧に育てられているからだよ」

「だからだよね」

「それで美味しいんだね」

「和牛って有名だしね」

「霜降りだね」

「牛乳もいいしね」

先生は牛乳のお話をさらにしました。

「そして乳製品もね」

「どれもいいよね」

「日本の場合は」

「どれも美味しくてね」

「それはどうしてか」

「牧場に来ればわかるね」

「うん、ただね」

こうも言った先生でした。

「手間をかけているだけにね」

「和牛って高いね」

「アメリカやオーストラリアのお肉と比べて」

「どうしてもね」

「そうなるね」

「そこは仕方ないね」

どうしてもというのです。

「本当に」

「そうだよね」

「手間がかかっている分ね」

「牧草だけでなくビールもあげて」

「それで身体擦って霜降りにしてるから」

「そこまで手間をかけているから」

それだけにというのです。

「高いのもね」

「当然だね」

「そこは仕方ないね」

「そうよね」

「そうだよ、あとね」

先生は皆にさらにお話しました、今は牧場の中の休憩用のログハウスの中で牧場の人達が出してくれた牛乳を皆で飲みながらお話をしています。

「日本は各地に牧場があるけれど」

「大体山地だね」

「高原に多い？」

「北海道にもあるけれど」

「その傾向があるかな」

「牛は涼しい気候の方がいいからね」

そうした生きものだからだということです。

「だからね」

「日本の牧場は高原に多いのね」

「あと北海道に」

「そうなんだね」

「そうなんだ、それで飛騨とかにも牧場があるんだ」

岐阜県の北にということです。

「そうだったりするんだ」

「飛騨って完全に山地だね」

「日本アルプスだね」

「そうだったね」

「そうだよ、あそこにも一度行きたいと思っているよ」

先生としてはです。

「飛騨だけじゃなくて岐阜県全体にね」

「岐阜県っていうとね」

「関西にいと馴染み薄いね」

「どうしてもね」

「東海だから」

「けれど東海も面白い地域でね」
「それでというのはです。」

第七幕その二

「僕行ってみたいんだ」

「それで岐阜県にもだね」

「行きたいのね」

「先生にとしても」

「そうなんだ、名古屋にもね」

「この街にもというのです。」

「そう思っているよ」

「名古屋だね」

「あそこも凄い街らしいね」

「いつも賑わっていて」

「世界的に有名な工業地帯の中心地でもあるし」

「中京工業地帯だね、名古屋は工業も盛んだしね」

「このこともあってというのです。」

「見ていきたいよ。食べものも美味しいし」

「そうそう、名古屋ってそっちな有名よね」

「食べものについても」

「きし麺とか味噌カツとか味噌煮込みうどんとか」

「名古屋コーチンもあるし」

「海老フライもういろいろもあるね」

「皆はその名古屋の食べものを挙げていきます。」

「モーニングもあるし」

「パスタも有名だね」

「物凄い食文化ね」

「大阪もいいけれど」

「そちらも注目しているよ」

先生としてはです。

そして牛乳を飲んで言いました。

「あまりにも美味しくて幾らでも飲めるね」

「牛乳もイギリスのものと味が違うね」

「そうよね」

チープサイドの家族も飲んでから言います。

「飲んでいるとわかるわね」

「どちらも飲むとね」

「これもあれかしら」

ガブガブはこう言いました。

「牧草とお水の関係かしら」

「牛さん達が食べて飲むものがどうか」

トートーも言います。

「それ次第で牛乳の味も違うのね」

「日本とイギリスでは土も違うからね」

ポリネシアはこのことを指摘しました。

「本当にね」

「同じ生きものでも育てられ方と飲んで食べるもので違う」

「僕達もそうだしね」

オシツオサレツは二つのあ田案で言いました。

「それで牛さんも違っていて」

「牛乳もだね」

「紅茶も味が違うし」

老馬は先生が大好きなこの飲みもののお話もしました。

「あれはお水が大きいね」

「何から何まで違うね」

ホワイティの口調はしみじみとしたものでした。

「イギリスと日本だと」

「同じものの筈なのに」

チーチーの口調もしみじみとしたものでした。

「味が違うなんてね」

「考えてみれば凄いことだよ」

ジップも言いました。

「牛乳一つ取ってもね」

「こんなに美味しいなら」

ダブダブは誰よりも美味しそうに飲みながら言いました。

「幾らでも飲めるよ」

「そうだね、日本人が普通に牛乳を飲む様になったのは明治からだけれど」

先生は日本の歴史のお話もしました。

「こんなに美味しい牛乳を生み出せるんだよね」

「日本の酪農家の人達の努力の賜物だね」

「そして食品会社の人達も」

「皆頑張ってるね」

「この味ね」

「うん、ただね」

「ここでも言う先生でした。」

「ある料理漫画で紙パックで高温で瞬時に殺菌することがどうとか言ってたけど」

「またあの漫画だね」

「本当にあの漫画は問題じゃないわね」

「読んだら駄目になりそうな漫画だね」

「鵜呑みにしたら駄目ね」

「うん、皆がすぐに沢山の牛乳を飲む」
先生はこの現実を指摘しました。

第七幕その三

「その為にはね」

「高温ですぐに殺菌して」

「紙パックに入れてお店に出す」

「それがいいんだね」

「ビンもあるけれど」

「こちらもということです。」

「やっぱりね」

「高温で殺菌してるわね」

「そうだね」

「そうしているわね」

「皆が清潔な牛乳を沢山飲むには」

「その為にはということです。」

「必要不可欠なことだよ、確かに栄養はある程度本来のものより落ちるけれど」

「それでもだね」

「皆が清潔な牛乳を沢山飲むと思ったら」

「紙パックと高温で瞬時に殺菌する」

「その技術が必要なんだね」

「あの漫画はハウス栽培でも問題を起こしていたし原発でもだったし」

「先生は皆に眉を曇らせてお話しました。」

「お店ですぐに抗議するしね」

「登場人物達がね」

「調理の仕方が悪いとか化学調味料使うのかな」

「完全に営業妨害よね」

「そんなことも普通にするし」

「酷い漫画だね」

「あの漫画の言うことは殆どが間違いか現実を見ていないからだからだということです。」

「鵜呑みにしたらとんでもないことになるよ」

「そう思うと読んだら駄目だね」

「迂闊には」

「鵜呑みにしたら間違えるね」

「そうなるね」

「お店で口に合わないから他のお客さんの迷惑を考えずに怒鳴り散らしたら」

そんなことをすればということです。

「今だと普通にネットの動画に出るよ」

「それで拡散されるね」

「もう一気に」

「某新聞記者の取材としてね」

「それで問題になるわね」

「そうなるよ」

実際にということです。

「新聞記者という特権を悪用しているからね」

「問題にならない方がおかしいよ」

「あの漫画程おかしい漫画はないね」

「よくあんな漫画が存在しているよ」

「だから僕はあの漫画の言うことは検証してね」

学者さんとしてそうしました。

「おかしいことはおかしいとね」

「今も言ってるね」

「あんなおかしい作品はないって」

「それで牛乳のこともだね」

「おかしいわね」

「うん、本当にあんな漫画を読んだら」

それこそというのです。

「それで鵜呑みにしたら危険だよ」

「出て来る登場人物皆凄く短気だしね」

「それで知性も教養もないし」

「出て来る人皆そうってのも凄いよね」

「何でもないことで怒るし」

「だから僕は鵜呑みにしないし」

科学的に検証した結果です。

「否定しているよ」

「そうだよね」

「本当にあの漫画は危険ね」

「日本には色々な漫画があるけれど」

「あの漫画については」

「そうした漫画だよ」

こう言ってまた牛乳を飲む先生でした、そして皆と牛乳のことや牛のことをお話してそうしてでした。

その後で、です。お家に帰ってから晩ご飯を食べますが。

先生はトミーが作ったチーズフォンデュを見て言いました。

「これも日本で食べる様になったね」

「イギリスでは食べなかったですね」

「そうだったね」

「知ってはいましたけれど」

トミミにしてます。

第七幕その四

「ですが」

「食べることはね」

「なかったです」

「そうだったね」

「日本では色々なものを食べるので」

だからだということです。

「それで、ですね」

「このチーズフォンデュも食べるね」

「僕達も」

「スイスのお料理だね」

先生はチーズフォンデュがどの国のお料理かもお話しました。

「これは」

「そうでしたね」

「スイスも面白い料理があるね」

「そうですね」

「そしてこのチーズフォンデュからね」

先生はさらに言いました。

「チョコレートフォンデュも生まれたよ」

「あれは物凄く美味しいですね」

「うん、僕も好きだよ」

「日本ではビュッフェにありますね」

「あれでお菓子や果物を食べてね」

そうしてということです。

「飲む紅茶やワインは最高だよ」

「ワインは赤ワインですね」

「うん、あれは今のイギリスではあるかな」

「どうですかね」

「わからないね、というかね」

「こうも言う先生でした。」

「イギリスの食文化ってつくづくね」

「寂しいですか」

「よくまずいって言われるけれど」

「世界的にですからね」

「イギリス人自身否定しないしね」

「お国のお料理がまずいことをです。」

「昔から」

「そうですね」

「それでチーズフォンデュもないし」

「チョコレートフォンデュもどうか」

「だからね、しかしこれはね」

「そのチーズフォンデュにパンやベーコン、ソーセージ、茸等を串に刺して入れていって食べてでした。」

「赤ワインも飲んで先生は言いました。」

「ワインに凄く合うね」

「チーズだからね」

「やっぱりそうよね」

「パンやソーセージもワインに合うし」

「尚更だね」

「これは魔性の食べものだよ」

「先生は動物の皆にこうも言いました。」

「本当にね」

「そうだよね」

「チーズとそれを付ける色々な食べもの」

「この組み合わせだけでもいいのに」

「ワインにも最高に合うから」

「食べる方も止まらないけれど」

それだけでなくというのです。

「ワインもね」

「そうだよね」

「もう先生随分と飲んでるし」

「食べる方もかなりだけれど」

「飲んでる方もね」

「うん、これは困ったかな」

言いつつさらに飲んで食べています。

「止まらないよ」

「これは先生明日二日酔いかな」

「そうなるかもね」

「いつもより飲んでるし」

「それじゃあね」

「そうなるかもね」

先生も否定しませんでした。

「これは」

「そうだよね」

「じゃあ明日は酔い覚ましのお薬飲んでから学校かな」

「そうなるかしらね」

「いや、僕はいつも朝早く起きるから」

それと言う先生でした。

第七幕その五

「お風呂に入ってね」

「そこですっきりするんだ」

「熱いお風呂に入って」

「それでだね」

「熱いお風呂に入って冷たいシャワーを浴びる」

お風呂だけでなくです。

「それを繰り返すとね」

「お酒は抜けるね」

「二日酔いは嘘の様に消える」

「そうなるわね」

「だからね」

それでということです。

「今回もそうするよ」

「若し二日酔いになったら」

「その時はなのね」

「それですっきりして学校に行く」

「そうするんだ」

「そう考えているよ、しかしね」

飲みつつ言う先生でした。

「本当に食えることもワインも止まらないよ」

「僕もそう思います」

トミーも赤ワインを飲みながら言います。

「赤ワインに最高に合います」

「そうだよね」

「パスタやピザや肉料理も合いますが」

赤ワインにです。

「これはまた別格ですね」

「全くだね」

「それとですね」

さらに言う先生でした。

「日本人は本当に柔軟ですね」

「そうだね」

「はい、食べるものについても」

「美味しいと思ったら何でも取り入れますね」

「他のこともそうですね」

「お料理もですね」

「そうだね、それでこのチーズフォンデュもね」

先生はパンを串に刺してお鍋の中に入れつつ言います。

「食べているんだ」

「そうですね」

「最初は珍しい美味しい料理って紹介されてね」

「定着しましたね」

「僕達が食べている様にね」

「そうですね」

「それが日本人の凄いところだよ、こうした人達だから」

それ故にというのです。

「お料理もね」

「多彩で」

「そしてね」

そのうえでというのです。

「そこにアレンジも加えるんだ」

「そこから凄いものも出来ますね」

「鉄道なんて我が国がはじまりなのに」

それでもというのです。

「今ではイギリスを遥かに凌駕しているよ」

「それ学園の鉄道博物館でもわかるね」

「明治維新に取り入れて」

「そこからどんどん線路が出来て」

「日本中を走る様になって」

「色々な鉄道会社も出来たしね」

「車両の数も種類も多いし」

このこともあってというのです、先生は小津物の皆にお話しました。

「もうね」

「今やだね」

「イギリスを遥かに超えて」

「世界屈指の鉄道大国だね」

「そうだったしね」

そしてというのです。

「他の色々な分野でね」

「日本は凄いね」

「工業の様々な分野でも」

「農業でも漁業でもだし」

「ハイテク分野でもね」

「本当に凄いよ」

また言う先生でした。

第七幕その六

「他の国の優れたものをすぐに取り入れて」

「さらに凄いものを造り上げる」

「それが日本人だね」

「それが凄いよ」

とてもということです。

「本当に」

「そうだよね」

「このチーズフォンデュからチョコレートフォンデュを普通に普及させたし」

「そう思うとね」

「日本人は侮れないよ」

「物凄くね」

「そう思うよ」

言いながらまたワインを飲む先生でした、そして次の日先生はお風呂に入ってから学校に行きました。そこでお茶を飲みながら論文を書いていますと。

そこにお静さんが来てこう言ってきました。

「牛女さんはどうなの？」

「あの人の歯のことだね」

「順調って聞いたけれど」

「うん、問題ないよ」

先生もお静さんに答えました。

「完治するよ」

「それは何よりね」

「けれど遅かったらね」

「抜くしかなくなるのね」

「そうなるとうくくないからね」

「歯はあるに限るわね」

「さし歯はあっても」

「それでもというのです。」

「やっぱりね」

「元の歯が一番ね」

「だからね」

「それでというのです。」

「あの人も抜かなくてよかったよ」

「そういうことね」

「確かにライムジュースの飲み過ぎで虫歯になったけれど」

「それでもというのです。」

「毎日磨いていただけあってね」

「それなりに状況はよかったのね」

「そうだったんだ」

「やっぱり普段から磨いているといいのね」

「というか普段こそがね」

「まさにというのです。」

「歯いや健康には大事なんだ」

「普段から歯磨きをして」

「そして身体にいいものを食べてね」

「そうしないと駄目なのね」

「牛女さんはライムジュースの飲み過ぎで虫歯になったけれど」

「歯に悪いそれをです。」

「これはイギリス海軍で飲まれていたんだ」

「美味しいからじゃないわね」

お静さんはこれまでのお話の流れから言いました。

「そうでしょ」

「ライムはビタミンがあるからね」

「それでなのね」

「飲んでいたんだ」

イギリス海軍でそうしていたというのです。

「ビタミン補給、壊血病の予防だね」

「壊血病ね」

「お静さんも知ってるよね」

「知ってはいるけれど見たことはないわ」

「そうだということです。」

「私はね」

「日本には縁がなかったからね」

「ビタミン不足でなる病気ね」

「欧州特に船乗りでは多くてね」

「長い航海でよね」

「それでよくなって」

「そうしてというのです。」

「命を落とした人も多いんだ」

「そうだったわね」

「だからね」

「その壊血病の予防の為に飲んでいたのね」

「そうだったんだ」

「そうよね」

「ライムを絞ってね」

その実をです。

第七幕その七

「お汁をラム酒に入れて飲んでいたんだ」

「それをビタミン補給にしていたのね」

「歯に悪くてもね」

「壊血病になるよりましだったのね」

「若しなったら」

壊血病、それにです。

「命に関わるからね」

「大変な病気だったのね」

「本当に大航海時代から命を落とした人は多いよ」

欧州ではということです。

「深刻な問題だったんだ」

「だからイギリス海軍でも飲んでいたのね」

「そうなんだ、クック船長が最初にそうしたんだ」

「冒険家の」

「そう、ザワークラフトを船に沢山積んで」

そうしてというのです。

「果物も積み込んでね」

「そうして航海をしてなの」

「壊血病を防いでいたんだ」

「そうだったのね」

「クック船長はそうした意味でも名船長だったんだ」

先生は笑顔でこうも言いました。

「ただ船や艦隊を動かすことに長けていただけじゃなくて」

「そうしたことも考えられて」

「防げたからね」

「凄い人だったのね」

「本当の意味でね」

「とにかくかつては壊血病が問題で」

「それでね」

その為にというのはです。

「ライムのお汁を飲んでいたんだ」

「歯に悪くても」

「そうだったんだ」

実際にというのはです。

「壊血病が怖かったからね」

「本当に怖かったのね」

「実際にね、ただね」

「ただ？」

「牛女さんはライムジュースの味が好きでね」

「それで飲んでいたのね」

「お水みたいに飲んでいたみたいだから」

そこまで飲んでいたというのはです。

「幾ら歯磨きをしてね」

「虫歯になったのね」

「うん、幾ら身体によくても美味しくても」

それでもというのはです。

「過ぎるとね」

「よくないわね」

「何でもそうでね」

それだというのです。

「ライムジュースもだよ」

「そういうことね」

「だから普段こそがね」

「大事なのね」

「そうなんだ」

「よくわかったわ、ただね」

「ここでお静さんはこうも言いました。

「先生今ザワークラフトお話に出したわね」

「ああ、それだね」

「あれはキャベツの千切りを酢漬けにしたわね」

「それで発酵させたものだよ」

「あれもビタミンがあるのね」

「要するにお漬けものでね」

「そうなのね、だからなのね」

「お静さんも納得しました。

「ビタミン補給にいいのね」

「美味しいしね」

「そうなのね」

「ドイツでもよく食べるよ」

「実際ドイツ語だしね」

「僕も好きだしね」

「ソーセイジにも合うしね」

「お静さんはこうも言いました。

「だからよね」

「いい食べものだよ」

「そうよね、私最近になって食べたけれど」

「それでもというのです。

「戦後からね」

「第二次世界大戦の後だね」

「それから食べはじめたけれど」

「美味しいね」

「好物の一つよ、あと普通のキャベツの酢漬けもね」
「これもということです。」

第七幕その八

「好きよ」

「あれもいいね」

「お野菜とお酢の組み合わせはいいわ」

「サラダもだしね」

「そうよね」

「ドレッシングのね」

その中に入っているお酢がということです。

「いいね」

「本当にそうね」

「そんなお話をしていると」

「ザワークラフトを食べたくなったかな」

「サラダもね」

こちらもということです。

「そうだったわ」

「お静さんはお野菜も好きなんだね」

「猫又の食べものは人と変わらないから」

それでということです。

「お野菜も食べるわ」

「そうなんだね」

「けれど一番の好物はお魚よ」

何といてもということです。

「お刺身よ」

「それが好きなんだね」

「ええ、お刺身を食べられるなら」

それならということです。

「最高に幸せよ」

「そこまでなんだね」

「本当にね、けれどサラダとかも好きだから」

「食べるんだね」

「ええ、今夜はサラダがいいわね」

「じゃあ食べてね」

「勿論お魚もね」

笑顔で言うお静さんでした、そのお話の後でお静さんは研究室を後にしました。そしてまた論文を書きはじめた先生にです。

動物の皆は先生にこう言いました。

「日本人は壊血病のことあまり知らないね」

「名前を知ってる位で」

「実際にはどんな病気か」

「実感として知らないね」

「それがわかるよ」

「日本で問題になっていた病気は脚気でね」

この病気でということです。

「壊血病じゃないよ」

「どっちもビタミン不足でなるけれど」

「それでもなのね」

「壊血病はあまり知らない」

「そうなんだね」

「実際の経験としてはね」

歴史にあったそれではということです。

「そうだよ」

「大航海時代はなかったし」

「冬でもお漬けものとか蜜柑食べてたし」
「それでだね」
「壊血病は知らなかったのね」
「うん、その病気はね」
「実際にというのはです。」
「それよりもね」
「脚気なのね」
「日本の場合には」
「あの病気なんだ」
「壊血病はビタミンC不足でなっ
て」
「そうしてというのです。」
「脚気はビタミンB1不足でなるよ」
「同じビタミンでもね」
「種類が違うね」
「それでなる病気も違う」
「そういうことだね」
「そうだよ、あと昔は結構鳥目の人が多かったのは」
「夜あまり見えない人のこともお話します。」
「ビタミンA不足だったからだよ」
「そこでもビタミンだね」
「目のことも」
「そうなのね」
「うん、それで日本ではヤツメウナギの干物がお薬だったんだ」
「鳥目のそれだったというのです。」

第七幕その九

「かつてはね」

「ヤツメウナギねえ」

「あの変わった生きもののね」

「実はお魚じゃない」

「そうした生きものだったね」

「そう、あの生きものの干物を食べてね」
「そうしてというのです。」

「鳥目を防いでいたんだ」

「昔の日本はそうだったんだね」

「今よりも栄養状態が悪くて」

「脚気が問題になっていて」

「鳥目の人も多かったんだね」

「それで特に脚気がね」

「この病気がというのです。」

「問題だったんだ」

「江戸腫れとか大坂腫れとか呼ばれてて」

「軍隊でも問題だった」

「先生前にお話してくれたね」

「うん、白いご飯ばかり食べていると」

「おかずを食べないで、です。」

「脚気になるんだ」

「麦のご飯とか玄米だとならないんだよね」

「あとパンを食べていたら」

「それでならないわね」

「けれど昔は脚気の原因がわからなくて
そのせいでというのです。

「多かったんだ」

「沢山の人が死んだんだよね」

トートーは暗いお顔で言いました。

「昔の日本では」

「壊血病と同じだね」

ホワイティも言います。

「それじゃあ」

「というかね」

「日本で脚気はかなり深刻な問題だったのよね」

チープサイドの家族も言います。

「戦争にも影響していたから」

「日清戦争でも日露戦争でも」

「戦死者も多かったけれど脚気で亡くなった人も多くて」

老馬はその戦争のお話をしました。

「問題だったんだよね」

「ロシア軍は壊血病だったわね」

ダブダブは日本の相手のお話をしました。

「もやし食べられるの知らなくてね」

「それで日本軍は脚気だった」

「白いご飯ばかり食べて」

オシツオサレツは二つの頭で言います。

「特に陸軍さんが問題で」

「どんどん倒れていたんだったね」

「そう思うと脚気は怖いわ」

ポリネシアは真っ青になっている感じですよ。

「あの病気もね」

「壊血病も怖いけれど脚気も怖い」

チーチーはしみじみとして言いました。

「そういうことだね」

「このことは覚えておかないといけないね」

ジップも言います。

「脚気のことね」

「白いご飯ばかりだと駄目なんだね」

最後にガブガブが言いました。

「おかずやパンも食べないと」

「そうなんだ、白いご飯だけだとよくないから」

先生も言います。

「栄養的にね」

「だからだね」

「そこは何とかしないとね」

「まずは脚気にならない」

「そのことからだしね」

「今は栄養のことだってわかっているけれど」

それでもというのです。

「昔は細菌、伝染病と言う人もいたんだ」

「原因がわからなくて」

「それでよね」

「そう言われていたんだね」

「脚気は伝染病って」

「作家の森鷗外、本名森林太郎がね」

先生は明治から大正にかけて活躍した文豪の名前も出しました。

第七幕その十

「問題だったんだ」

「日本の有名な作家さんだよね」

「沢山の名作を残した」

「ドイツ留学もしていて」

「エリートだったんだよね」

「そう、エリート中のエリートだったんだ」

この人はということです。

「当時はね」

「今の東大医学部を卒業して」

「ドイツでも優秀で有名で」

「凄い人だったね」

「それで陸軍のお医者さんのトップにもなったけれど」

それでもということです。

「細菌の権威でもあって細菌にこだわって」

「脚気は伝染病って信じ込んでいたんだ」

「そうだったんだ」

「それで脚気についてもなんだ」

「栄養が原因とはね」

それはということです。

「思っていなくて」

「それで陸軍では脚気が多かったんだ」

「そうだったんだ」

「あの人が陸軍にいたから」

「それでなんだ」

「逆に海軍ではね」

こちらの軍ではといますと。

「違っていたんだ」

「そうだったのね」

「海軍では」

「あちらでは」

「そうだよ、海軍は同じ船の中で水兵さんはなっても士官の人はならなかったから」

その脚気にです。

「何故かって思ってね」

「同じ船にいたら伝染病だと誰でもなるよね」

「そうなるね」

「閉じられた空間だから」

「どうしてもね」

「そこからおかしいって思って」

そうしてというのです。

「水兵さん達はご飯、士官の人達はパンを食べていたから」

「そこから考えて」

「脚気への対策をしていったんだ」

「そうだったんだ」

「それで水兵さんの食事を麦ご飯にしたら」

そうしたらというのです。

「もうね」

「それでなのなの」

「脚気になった人がいなくなった」

「それでわかったんだ」

「なった人はいたけれど」

麦ご飯を食べた水兵さんにもです。

「ちゃんと食べていなかったからね」

「答えは出てるね」

「もうそれでね」

「それで海軍は麦ご飯を食べる様になって」

「脚気はなくなってたんだ」

「そうなんだ、脚気はね」

本当にということです。

「日本で深刻な問題だったんだ」

「壊血病はそうでなくても」

「問題は脚気だった」

「あの病気がどうか」

「ずっと問題だったんだね」

「森鷗外という人がね」

先生は困ったお顔で言いました、論文を書きながらもどうしても
そうしたお顔になってそれで皆にお話するのです。

「どうにもならなかったんだ」

「あの人だね」

「小説家として凄い業績を残したけれど」

「翻訳家としても有名で」

「文豪でもあったけれど」

「それでもなんだ」

「本業のお医者さんとしてはね」

どうにもというのです。

「言うなら官僚で官僚としてもね」

「よくなかったよね」

「脚気を防げなかったから」

「それじゃあ」

「物凄く出世欲と名誉欲も強かったそうだし人としてです。」

第七幕その十一

「ドイツ留学で最新医学を学んだと自負していてね」

「権威主義だったんだね」

「それも頑固だったのね」

「そうだったんだね」

「そうした人でね」

それでというのです。

「お医者さんとしてはね」

「よくなかったんだね」

「本来はそちらなのに」

「そうだったんだね」

「うん、調べていて暗くなったよ」

お医者さんとしての森鷗外のことをです。

「小説家だからそちらから調べるね」

「文学からだね」

「沢山の名作を残しているから」

「それでだね」

「凄い人だと思ったら」

それがということです。

「その実はね」

「どうにもよくない人だね」

「権威主義で名誉欲と出世欲が強くて」

「それで頑固で」

「女性問題も起こしたって説もあるしね」

こちらのこともあったというのです。

「舞姫は実はって、話もあるし」

「そうなんだ」

「あの人の代表作の一つだけれど」

「あの人がモデルだったんだ」

「そうした話もあるしね。人として医師としてのあの人は好きになれないよ」

森鷗外ではなく森林太郎としてはということです。

「どうもね。ニュートンも酷かったけれどね」

「ああ、あの人もね」

「嫌いな相手の功績を抹消したりね」

「酷かったよね」

「功績と人間性は別でね」

そうしてということです。

「そして人間は誰もがいい部分と悪い部分があるからね」

「森鷗外はその悪い部分が出て」

「脚気で間違ったことをした」

「そうなのね」

「だから最近批判されているよ」

そうなっているということです。

「勿論脚気のことだね」

「それは真実はわかるとね」

「やっぱり批判されるよね」

「当然としてね」

「そうなるね」

「うん、それは当然のことだから」

先生はこのことを肯定しました。

「批判されるべきことは批判される」

「それは当然だね」

「むしろ批判されないよね」

「その方が問題だね」

「だからね」

それでということです。

「それは当然だよ」

「森鷗外にしてもだね」

「そしてニュートンも批判されているけれど」

「それは当然のことね」

「批判されていることは」

「そうだよ、しかし脚気はね」

この病気のことをあらためてお話しました。

第七幕その十二

「油断できない病氣だよ」

「どうしてもね」

「命に関わることもあるし」

「それでだね」

「余計にだね」

「ちゃんとしたものを食べないとね」

「白いご飯だけでなくということです。」

「よくないよ」

「昔は日本ではお米食べてれば死なないって言われてたんっだよね」

「それは玄米のことだけれど」

「白米もそう思われて」

「それでそればかり食べられていたね」

「だから問題だったんだ、日本でだけある病氣だったし」

「かつてはです。」

「何でなるのかってね」

「色々言われていて」

「原因が調べられていたけれど」

「中々わからないで」

「それでだね」

「そう、原因が栄養のことだってやっとわかって」

「それでということです。」

「麦ご飯とかを食べる様になったんだ」

「そうなんだね」

「軍隊でも」

「そうだったのね」

「陸軍でも何とか麦ご飯にしたしね」

こちらでもというのです。

「かなり遅れたけれど」

「森鷗外がいたけれど」

「それでもだね」

「そうしたんだね」

「陸軍のトップ、山縣有朋さん達にしたら麦ごはんでは脚気にならないからベストだからね」

それでというのです。

「そうだったんだ」

「そうなんだね」

「まあそれは当然だね」

「幾ら森鷗外が文句言ってもね」

「それで脚気にならないならいいわよね」

「それでそうなって」

それでというのです。

「日本では脚気が克服されたんだ」

「病気にも歴史ありだね」

「色々あるよね」

「脚気を見てもわかるね」

「壊血病もだしね」

「そうだよ、その論文もね」

これもというのです。

「今度書くよ、脚気のことをね」

「そちらも頑張ってるね」

「是非ね」

「そうしてね」

「うん、そうしていくよ」

先生は皆に笑顔で言いました、そうして今の論文を書いていくのでした。

第八幕その一

第八幕 順調に回復していて

先生はまた牛女さんの歯を治療しました、そして牛女さんに笑顔で言いました。

「あと一回で完治ですね」

「そうですか」

「はい、ですから」

それでというのです。

「あと一回だけ我慢して下さいね」

「わかりました」

牛女さんも笑顔で応えました。

「それでは」

「宜しく願いますね」

「それでこれからはですね」

「はい、歯磨きは大丈夫ですが」

「ライムジュースや歯によくないものはですね」

「お水のように飲まれたりすることはです」

「控えるべきですね」

こう先生に言いました。

「やはり」

「そこは願います」

「わかりました」

「それで大丈夫ですから」

「それでは。ただ」

「ただ？」

「今回は反省しました」

先生にこうも言うのでした。

「本当に」

「虫歯になられて」

「それで」

「そうですか」

「これまでになったことがなかったのです。
それでというのです。」

「本当にです」

「ではその反省を活かされて下さい」

「これからは」

「反省もまた健康の為に必要ですから
先生は微笑んで言いました。」

「ですから」

「それで、ですか」

「それが取り返しのつくものならいいですから」
「だからですね」

「どうぞ。ですが」

「ですが？」

「これが取り返しのつかないものなら
この場合ならというのです。」

「残念ですし」

「そうした病気になった場合はですね」

「糖尿病や脳梗塞になりますと」

「後が大変ですね」

「ですから」

それ故にというのです。

「お話する僕自身もです」

「気をつけておられますか」

「はい」

実際にということです。

「これでも」

「そうなのですね」

「イギリスにいた時より毎日ずっと歩いて」

そしてということです。

「食生活もです」

「よくなっていますか」

「お酒はよく飲みますが」

「それでもですか」

「炭水化物やお肉だけでなく」

そういったものの中心の食生活でなくということです。

「お野菜やお魚もです」

「よく召し上がられていますか」

「そうなっています」

日本に来てからそうなっているということです。

「僕も」

「そうですか」

「それでイギリスにいる時よりもです」

「健康ですか」

「随分と。脂肪率もかなり減って」

そしてということです。

「血圧も血糖値もよくなって乳酸値もです」

「よくなりましたか」

「はい」

先生は笑顔で答えました。

第八幕その二

「そうになりました」

「それは素晴らしいことですね」

「それだけ日本の食生活がいいのでしょう、あとです」

「あと？」

「いつも論文を書いて講義をして」

大学教授もつと言えば学者さんとしてそうしてというのです。

「頭をかなり使っていますと」

「そちらでもですか」

「カロリーをかなり使っていました」

「学問でもカロリーを使いますね」

「それがいつもですと」

「それならというのです。

「もうです」

「そちらでもカロリーを使われて」

「かなりです」

「健康になりましたか」

「はい」

「実際にというのです。

「日本に来てから」

「先生は来日されてよかったのですね」

「そう思います」

先生は牛女さんに即座に答えました。

「心から」

「それは何よりですね」

「こんないい国だったとは思わなかったですし」
それにということです。
「こんなに健康になるともです」
「思われなかったですか」
「イギリスの食生活はよく味が酷いと言われますが」
「健康でもですか」
「実は日本以上に肥満が問題になっていまして」
「そうなのですね」
「僕もお世辞にもいいとは言えない食生活でした」
「そうだったということです。」
「今みたいによくお豆腐を食べたりです」
「お豆腐美味しいですね」
「お野菜も少なくお魚もです」
「召し上がられなかったですか」
「イギリスでは鱈やニシン、鮭や鰻は食べますが」
「日本の様にですか」
「沢山の種類の魚介類をいつも食べないので」
「それでということです。」
「その分です」
「そうでしたか」
「イギリスでは蛸も烏賊も食べないです」
「えっ、本当ですか!？」
牛女さんは先生の今のお話に驚いて先生に聞き返しました。
「蛸も烏賊もですか」
「そうなのです」
「あの、どちらも日本では」
「普通に食べられていますね」

「はい」

実際にというのは。

「そうですが」

「たこ焼きもありますね」

「いか焼きもあります」

「関西では二種類ありますし」

「それがですか」

「イギリスではどちらも食べないです」

そうだということです。

「他の色々な魚介類も」

「そうでしたか」

「ですから魚介類もよく食べる様になって」

「魚介類も身体にいいですね」

「さらに健康になりました」

「そうでしたか」

「血もさらさらだとか」

先生は笑顔でお話しました。

「嬉しいことに」

「それは何よりですね」

「ですからこれからです」

「日本におられてですね」

「健康的な生活を楽しみます」

「気をつけられて」

「そうしていきます」

先生は笑顔のままでした、そうしたお話をしてです。

牛女さんとお別れをしてこの日はお家に帰りました、この日は冷奴に枝豆そしてハマチのお刺身を楽しみつつ白ワインを飲んでいま

したが。

第八幕その三

動物の皆にです、先生はこう言われました。

「確かに健康的だね」

「今のおつまみは」

「どれもね」

「凄くヘルシーね」

「うん、こうしたものを食べてるとね」

実際にとです、先生も答えます。

「健康になるね」

「お酒の飲み過ぎはよくなくても」

「それでもね」

「おつまみ自体は健康的で」

「凄くいいね」

「大豆にお魚はね」

その枝豆を食べつつ言います。

「本当に身体にいいね」

「先生お豆腐も好きだしね」

ガブガブが言ってきました。

「日本に来てからそうなったね」

「美味しくて食べやすい」

ポリネシアも言います。

「いつもそう言ってるわね」

「豆乳も飲んでるしね」

ジップはこの飲みもののお話をしました。

「そちらでも健康だね」

「そういえば豆乳もイギリスではメジャーでないね」

ホワイティはこのことを言いました。

「身体にいいし美味しいのに」

「大豆は凄く身体にいいから」

「しかも美味しくて」

チープサイドの家族も言います。

「日本ではこうしてよく食べるけれど」

「イギリスではどうもだったね」

「最近枝豆を何かと食べる感じにしても」

こう言ったのはダブダブです。

「まだ定着していないわね」

「日本料理の一つで」

イギリスでの枝豆のポジションはそうだとです、トートーは言いました。

「イギリス料理じゃないね」

「まあイギリス料理って世界的に評判悪いし」

「今もそうだしね」

オシツオサレツは二つの頭で言いました。

「栄養的にもね」

「ただ食べるって感じかな」

「色々文化も発展したけれど」

チーチーは難しいお顔で述べました。

「こと食文化だけはだったからね」

「ティーセットと朝食はいいけれど」

最後に老馬が言いました。

「それ以外は、だからね」

「そこは改善していくべきだけれど」

それでもと言う先生でした。

「難しいことだね」

「イギリスの場合はね」

「どうしてもね」

「ことお料理のことについてはね」

「そうだよね」

「本当に最近になって少しよくなってきたかな」

先生の見たところです。

「味も栄養的にも」

「そうだといいね」

「長い間評判悪かったし」

「実際によくなかったから」

「食べることも大事だしね」

「それでもビーフシチューやカレーが日本のお料理に影響を与えているから」

評判が悪くてもです。

「決してね」

「筋は悪くない？」

「イギリス料理も」

「カレーは日本で凄い人気で完全に定着してるし」

「ビーフシチューも定着してるしね」

「ビーフシチューから肉じゃがも生まれたし」

「だから悪い筈がないんだ」

先生は白ワインを飲みました、お箸でおつまみを食べながらそのうえでグラスにあるワインを楽しんでいます。

第八幕その四

「ちゃんと調理すれば美味しい筈だよ、ただハギスはね」

「ああ、あれね」

「スコットランドのお料理ね」

「怪獣とかジョークで言われるけれど」

「あれはだね」

「どうか」

ハギスについてはということです。

「一体」

「あれだけはちゃんと調理しても」

「果たしてどうか」

「わからないんだね」

「うん、あと鰻のゼリーもね」

このお料理もということです。

「アレンジが必要な、ニシンのパイもね」

「あの丸ごと入れて焼いたね」

「あれもだね」

「アレンジが必要だね」

「あのままじゃなくて」

「そう思うよ、けれどちゃんとアレンジしたら」

それでということです。

「よくなる筈だよ」

「イギリス料理でも」

「きっとそうなるね」

「絶対によね」

「うん、ちゃんと味付けと火加減をしてね」

そうしてというのです。

「調理したらね」

「よくなるわね」

「そのイギリス料理も」

「きつとね」

「僕はそう思うよ、しかしこうして和食で白ワインを飲むと」

今度は冷奴を食べています、おろした生姜と刻んだ葱それに鰹節を上に乗せてそこにお醤油をかけています。

それを食べてです、先生は言うのでした。

「いいね」

「日本酒もいいけれど」

「白ワインもいいね」

「そうなのね」

「かなりね」

そうだというのです。

「僕はお勧めだよ」

「魚介類には白ワインだけれど」

「欧州ではそうよね」

「けれど和食にもそうだよね」

「ワインだと白ね」

「日本酒が苦手な人もね」

そうした人でもというのです。

「こうしてね」

「白ワインならいい」

「お酒を楽しめる」

「そういうことだね」

「それも健康にね」

ただ美味しいだけでなくということです。

「そうなるよ」

「先生が食べているお料理はどれも普通に居酒屋にあるね」

「日本の居酒屋の定番ね」

「それを食べるとね」

「凄く健康的でもある」

「そうなのね」

「うん、健康にもいいものはお酒のおつまみでもそうだし
こちらにも言えることだということです。」

「もっと言えばお酒もね」

「ワインは健康にもいいんだよね」

「お酒の中では」

「そうよね」

「うん、アルコールの摂り過ぎはやっぱりよくないけれど
それでもというのです。」

「ワインはお酒の中ではかなりいいから」

「先生も今飲んでるね」

「先生色々なお酒飲むけれど」

「今はワインだね」

「それを飲んでるよ、それとね」

先生はさらに言いました。

第八幕その五

「僕は煙草は吸わないからね」

「そうそう、先生煙草吸わないよね」

「もう一切ね」

「それは絶対に吸わなくて」

「そのことでも健康よね」

「煙草はね」

どうしてもというのです。

「健康に悪いからね」

「若し煙草をかなり吸ってるとね」

「それだけで健康に良くないね」

「本当にね」

「ヘビースモーカーの人だね」

こうした人はといいますと。

「それだけでね」

「健康に不安があるね」

「実際リスクあるし」

「タバコは吸わない方がいいわね」

「どうしてもね」

「うん、だから僕も吸わないし」

先生はそうしているというのです。

「他の人にもね」

「薦めないよね」

「喫煙は」

「そうだったね」

「そうだよ、まあ昔は吸う人も多くて
それでというのです。」

「作家さんや軍人さんはかなりだったね」

「どっちも吸う人多かったのよね」

「あと漫画家さんもね」

「煙草吸いながら書いたりしていたね」

「軍人さんも戦いや訓練の合間に吸っていたね」

「そうしていたんだ、けれど最近だね」

煙草についてよく言われる様になってです。

「そうした人も減ったね」

「作家さんでもだね」

「そして自衛官の人でも」

「煙草を吸う人は減っていて」

「主流じゃなくなってるわね」

「そうなっているよ」

実際にというのです。

「会議の時でも吸わなくなっているみたいだしね」

「軍隊、今の日本だと自衛隊だね」

「自衛隊の会議でもそうなのね」

「煙草を吸わなくなっている」

「そうなっているのね」

「そうだよ、昔のドイツ軍をモデルにした軍隊が出ているアニメだ
と」

こちらの創作ではどうかといいますと。

「会議の場面で普通に皆葉巻を吸ってるけれどね」

「かつてはそれが普通だったからね」

「皆煙草を吸う」

「そうしたものだっただからね」

「それでワインもあったんだ」

会議の場にです。

「それで喉を潤しながらね」

「会議していたんだね」

「昔のドイツ軍がモデルだと」

「煙草にお酒」

「その二つがあったね」

「だから煙草を吸わなくてお酒も飲まなかったヒトラーは凄く目だつたんだ」

独裁者だったこの人はです。

「もう異様な位にね」

「皆会議で煙草吸ってワインを傍に置いていたのに」

「ヒトラーはどちらも口にしなかった」

「確かにそれはかなり目立つね」

「だからだよ」

その為にといいます。

「今も言われているんだ」

「菜食主義者でも有名だったし」

「会議で煙草吸っていないくて」

「お酒もとなるとね」

「そうだったんだ、それどころかヒトラーの前では誰も煙草を吸えなかったんだ」

そうだったということです。

「彼は煙草嫌いだったからね」

「皆吸っているのに」

「それは辛いね」

「会議の場で吸えないと」

「本当にね」

「そうだよ、それとね」

さらにお話する先生でした。

第八幕その六

「ヒトラーは甘いものが好きでね」

「あっ、虫歯」

「虫歯だったんだ」

「それがあったの」

「それで随分苦しんでいたんだ」

「そうだったというのです。」

「あの人は」

「煙草を吸わなくてお酒は飲まなかったけれど」

「それでもだね」

「甘いものは好きで」

「虫歯だったの」

「そうだったんだ」

「これがというのです。」

「甘いもののせいでね」

「そういえばこのお話前にしたかな」

「ヒトラーは誰でも知ってる人だしね」

「菜食主義者で煙草もお酒も嗜むことがなくて」

「甘いものが好きだってね」

「そうだったね、しかしお酒を飲まなくて」

「それでと言う先生でした。」

「お魚を食べないと」

「先生としてはだね」

「どうにも残念だよね」

「煙草はともかくとして」

「そうだね」

「うん、それは困るね」

こう言って白ワインをまた飲みます、ここでトミーは先生の前にホッケを焼いたものを持ってきて言いました。

「どうぞ」

「あっ、ホッケだね」

「先生こちらもお好きですね」

「大好きだよ、食べやすくて」

そしてということです。

「物凄く美味しいからね」

「だからですね」

「大好きだよ、しかしイギリスにはね」

「ホッケもなかったですね」

「来日してはじめて食べたよ」

このお魚もということです。

「河豚や秋刀魚や鯖と同じくね」

「そうですね」

「鰐にしてもね」

「鰐も美味しいですよね」

「うん、日本は本当に魚介類が豊富だよ」

「お陰でいつも楽しめますね」

「イギリスにいたままだと」

それこそということです。

「こうまではね」

「楽しめませんでしたね」

「絶対にね」

こうトミーに言います。

「僕達は」

「そうでしたね」

「それとね」

先生はさらにお話しました。

「今河豚のことを言っただけね」

「あのお魚ですね」

「信じられない位美味しいね」

「凄いですよね、あの美味しさは」

「お刺身にしてもお鍋にしても唐揚げにしても美味しいよ」

「まさに何にしても」

「絶品だよ」

そこまでたということです。

「本当にね」

「全く以てですね」

「毒があってもね」

「そうそう、河豚って毒があるのよ」

ダブダブが言ってきました。

「それが怖いよ」

「常識で考えて毒があったら食べないよ」

ホワイティも言います。

「もうね」

「その時点で、だね」

チーチーはホワイティに続きました。

「普通は食べないね」

「それでも日本では食べるから」

トートーは感心している感じです。

「凄いよ」

「しかも猛毒でね」

「あたったら死ぬから」

チープサイドの家族はこう言いました。

第八幕その七

「鉄砲って言われる位だから」

「鉄砲も弾にあたったら死ぬってことで」

「そんな怖いお魚を喜んで食べる」

「ジップはしみじみとして言いました。」

「こんなこと普通に出来ないよ」

「それをやっていて楽しんでる日本人って」

老馬は言いました。

「昔からだっていうからね」

「昔から大阪や下関では食べていたんだったね」

「あと博多でも」

オシツオサレツも言います。

「そうだったね」

「そして古代から」

「そんな怖いお魚僕でも食べないよ」

食いしん坊のガブガブでもです。

「そのままはね」

「ちゃんと調理して毒のある部分を取って食べる」

最後にポリネシアがいました。

「そうなのよね」

「うん、そうして食べるんだ」

先生はホッケをとっても美味しそうに食べつつ皆に答えました。

「河豚もね」

「日本人はね」

「確かに物凄く美味しいし」

「そうしてるのよね」

「昔から」

「貝塚、昔の人が食べた後の貝殻やお魚の骨を捨てた場所から河豚の骨も出ているんだ」

日本の縄文時代の遺跡からもということです。

「だから日本では本当に昔からね」

「河豚を食べていて」

「それでだね」

「楽しんでいたのね」

「あの美味しさを」

「確かに物凄い犠牲が出たけれど」

それは事実でもということです。

「やっぱりね」

「食べていたんだ、河豚を」

「そうだったのね」

「かなりの犠牲が出ても」

「それでも」

「そうだよ、そして僕もね」

先生もということです。

「河豚が大好きになったよ」

「そうだね」

「あと先生オコゼや鮫鰯も好きだしね」

「変わったお魚も」

「そちらも」

「オコゼや鮫鰯の美味しさもね」

こちらもということです。

「凄いね」

「そうだよね」

「どちらも美味しくなさそうなのに」

「食べたらこれがね」

「滅茶苦茶美味しいのよね」

「オコゼも毒があるけれどね」

「このお魚もというのです。」

「鰭にね」

「こちらは刺す毒だね」

「それがあってよね」

「物凄く危ない」

「そうだったね」

「そうなんだ」

「これがというのです。」

「だから気をつけないといけないけれど」

「お料理にしたら美味しい」

「毒があって顔も怖いけれど」

「それでもね」

「絶品だよ、というかイギリスにはこうしたお魚が全くないないことがね」

「どうかと言う先生でした。」

「日本にいいると残念に思えて仕方ないよ」

「それはね」

「来日して実感するね」

「もう常だね」

「そうなるわね」

「全くだよ、ニシンは日本でも食べるけれど」

「それでもというのです。」

第八幕その八

「イギリスのより美味しいね」

「お料理の仕方がね」

「どうしてもね」

「そうなってるね」

「オマール海老も」

「こちらもというのです。」

「それもね」

「日本でのお料理の方がね」

「どうしてもね」

「美味しいよね」

「イギリスのものより」

皆しみじみとした口調です、そしてです。

「ここで、です。先生はこうも言いました。今度は枝豆を食べています。ですがそれでもお魚のことを思うのでした。」

「シーフードは遥かにいいね」

「もっと言えば他のお料理もね」

「常に思うね」

「というか日本じゃイカも蛸も普通に食べるのに」

「イギリスじゃ食べものと思われてないし」

「怪物扱いだし」

「外見が不気味とかね、これがね」

その蛸やイカの外見もということです。

「日本人は見たらすぐに美味しそうだし」

「そうそう、怖いって思わず」

「もう即座にそう思って」

「映画とかで巨大な蛸やイカが出ても全く怖がらなくて」

「たこ焼きとかイカ焼きのお話するから」

「日本人は鮫は怖がってもね」

それでもというのです。

「欧州人程じゃないしね」

「ちゃんと鮫の捕まえ方知ってるし」

「弱点も」

「それで鮫も食べるしね」

「そうしてるしね」

「そして鮫も結構美味しいし」

このお魚もというのです。

「エイだってね」

「エイも美味しいね」

「あの平たいお魚も」

「あれで結構ね」

「怖そうだね」

「そして蛸やイカなんて」

それこそというのです。

「完全に食べものでね」

「怖いって思う日本人いないね」

「この神戸でも」

「食べものとは思わなくて」

「不気味とも思わないね」

「それが日本人だね、あの人達に聞いても」

その日本の人達にです。

「怖いと思ってないからね、食べものとしかね」

「凶鑑読んでもですしね」

トミーも言ってきました。

「どうして食べたなら美味しいかって書いてますし」

「ミズダコでもね」

「ミズダコって大型で人も襲いますね」

「それが日本人の殆どは知らなくて」

ミズダコのこのことをです。

「完全に食べものとは思っていないよ」

「蛸壺を置いて捕まえて」

「それで食べるのしかね」

「それが日本人ですね」

「実際にミズダコも怖いと思わないからね」

「そうですね」

「最初のそのお話を聞いて驚いたけれど」

先生にしてもです。

「今はね」

「来日されて日本に住まれて」

「もうね」

それこそということです。

「僕もその考えになったよ」

「イカや蛸は美味しい」

「怖いとか不気味とかね」

そうした認識はということです。

第八幕その九

「最初から思ってたなかったけれど」

「先生にとって生きものは皆友達ですから」

「そうだったけれど」

「今ではですね」

「美味しいと思う様になったよ」

そうになったということです。

「本当にね」

「左様ですね」

「そうだよ、じゃあ今日はボトル三本かな」

白ワインの飲む量はということです。

「それだけ飲んでね」

「そうしてですね」

「飲み終わったら歯を磨いて寝るよ」

「そうしますね」

「そして明日も頑張るよ」

先生はお刺身もお豆腐も枝豆もホッケも食べました、そうして魚肉ソーセージも食べてそれからでした。

白ワインも実際に三本空けて飲みました、それからです。

歯を磨いてお布団に入って次の日は朝ご飯を食べて学校に行きましたが研究室に来た王子が先生から昨夜のお話を聞いて言いました。

「そうそう、日本人って色々なお魚を食べるよね」

「河豚もオコゼもね」

「毒があってもね」

「そして蛸やイカもだね」

「僕イギリスでは魚介類は殆ど食べてなかったよ」

王子もそうだったみたいです。

「ましてや蛸とかイカなんて」

「食べられるともだね」

「思っていなかったよ」

「そうだね」

「それが日本だとね」

今自分達がいるお国ではということです。

「皆喜んで食べるからね」

「そうだね」

「しかもこれが美味しいからいいね」

「全くだよ」

「特にイカの姿焼きとね」

それにということです。

「たこ焼きはね」

「美味しいね」

「たこ焼きは恐ろしい食べものだよ」

こうまで言う先生でした。

「本当に」

「あまりにも美味しいからだね」

「うん、つつい食べて」

そうしてということです。

「止まらなくなるよ」

「一旦食べだすとね」

「そうなるよね、たこ焼きは」

「僕もだよ」

「大阪名物だけれど」

「あれは凄いね」

先生もたこ焼が好きなので言います。

「日本を代表するお料理の一つだね」

「大阪だけじゃなくてだね」

「そうだよ、ただね」

「ただ？」

「串カツでも魚介類が沢山あって」

その具の中にです。

「よく食べるね」

「海老にキスにね」

「ほたて貝にね」

「その蛸やイカも」

「色々あるね、シーフードも」

「そうだね」

先生も頷いて応えます。

「よくあるね」

「お肉だけじゃなくてね」

「それで僕もなんだ」

「先生串カツも好きだね」

「ネタでそちらもよく食べるよ」

魚介類もということです。

「そうしているよ」

「そうだよね」

「妖怪も海にいる種類が多いし」

「ああ、そういえば」

王子も頷きます。

第八幕その十

「日本ではそうだね」

「そうだよね」

「海坊主とかいるよね」

「磯女とかね」

「船幽霊もいるし」

「船幽霊は怨霊だね」

「日本は何か幽霊と妖怪の区別が曖昧だけれど
それでもというのです。」

「船幽霊は妖怪と言ってもいいかな」

「まあそうだね、人間が妖怪になる場合もあるし」

「そうだったね」

「というか怨霊が魔王になって」

「それでとんでもない力を持つね」

「日本では悪魔よりも妖怪よりも怖いよ」

「怨霊の方がというのです。」

「王子もそれはわかるね」

「天神様もだね、大宰府の」

「菅原道真さんだね」

「あの人は怨霊になったって言われているね」

「それで物凄い祟りだったとされているから」

「そのことを見ても」

「そう、怨霊はね」

「実際にというのです。」

「日本では一番怖いんだ」

「悪魔よりもで」

「当然妖怪よりもね」

「遥かに怖いんだね、ただ妖怪の総大将で」

「こうも言う王子でした。」

「ぬらりひょんがいるけれど」

「あのお話は戦後からだから」

「あっ、そうなんだ」

「あの妖怪漫画の大家の人が漫画の設定で出して
それでというのです。」

「定着したんだ」

「そうなんだね」

「僕は姫路城のお姫様もそうだし牛女さんみだけれど
妖怪ともお付き合いがあるね」

「日本の妖怪も日本にいるから」

「それでというのです。」

「皇室に敬意を持っているね」

「あの方々にはだね」

「そして勿論ね」

「陛下にもだね」

「そう、あの方にもね」

「日本の皇室は妖怪も敬う位だね、僕もね」

「一国の跡継ぎである王子もというのです。」

「あの方々にはね」

「敬意を持っているね」

「世界の王室であの方々に敬意を持っていないなんて
それこそというのです。」

「そんな人いないよ」

「共和制の国でもだしね」

「そうした方々だからだね」

「うん、妖怪の皆もね」

「彼等もというのです。」

「敬意を持っているよ」

「姫路城のお姫様にしても」

「あの人が播磨今の兵庫県の妖怪の棟梁らしいけれど」
「それでもというのです。」

「そのお姫様でもね」

「敬意を持っているとなると」

「妖怪の主、というか妖怪もいる日本の国家元首はね」

「天皇陛下ということだね」

「じじつぬらりひょんさんは日本の妖怪の中でかなり高い地位にいるらしいけれど」

「そのぬらりひょんもだね」

「日本の皇室にはね」

「この方々にはというのです。」

「敬意を持っているみたいだよ」

「つくづく凄なお家だね」

「全くだね、ただね」

「ただ？」

「日本の皇室は河豚は絶対に食べられないんだ」

「毒があるからだね」

「そうなんだ」

「まさにその通りだというのです。」

「だからなんだ」

「何かあったら駄目だから」

「とんでもなくご多忙で食事も決められたものばかりだね」

「河豚も食べられないなんてね」

「王子は食べられるね」

「僕も事前に毒見や厳重なチェックがされただけけどね」

「食べられるね」

「うん、まだね」

それは出来るということです。

第八幕その十一

「僕は食べられるよ」

「そうだね、けれど日本の皇室は」

「それが出来ないんだね」

「どうしてもね」

「河豚が食べられないとか」

王子はあらためて言いました。

「不自由だね」

「そうだね」

「僕は日本の皇室にはいられないね」

「王子もだね」

「どの王家にいても制約や義務は多いけれど」

それでもというのです。

「あの方々には負けるよ」

「それはイギリス王家もだよ」

「イギリス王家はもっと自由だね」

「スキャンダルが出る位にね」

「スキャンダルが出る位はまだ自由があるよね」

「そう、それが出来ないとなると」

それこそというのです。

「修道院の様にだよ」

「制約が多いってことだね」

「そして義務もね」

こちらもというのです。

「かなりあるんだよ」

「そういうことだね」

「伝統も凄いしね」

日本の皇室のそれはということです。

「皇紀は二六〇〇年以上とされているから」

「ローマ帝国より前だしね」

「まだ中国で始皇帝も出ていないよ」

「イギリスも僕の国も」

「そう、他の国がなにもない様な時代から存在していたよ」

「日本と皇室は」

「歴史ではっきり記録が残っているのは飛鳥時代だね」

「その前から皇室は存在していたね」

「うん、そんなとてつもなく古い家で」

それです。

「伝統もね」

「凄いね」

「そうなんだ」

「そんな伝統があると」

「もうそれだけでかなりだね」

「僕も王室の人間だからわかるよ」

それも跡継ぎであるだけ尚更です。

「本当に」

「そうだね」

「日本の皇室の伝統はかなりで」

それでということです。

「恐ろしいものがあるよ」

「その皇室のことを考えると」

「あのお家はね」

「凄いものがあるなんてものじゃないね」

「うん、そして河豚はね」

「食べられないんだね」

「残念なことだね」

「そうだと思います。」

「というか好きなものを召し上がるなんてね」

「出来ないんだね」

「そうだよ、あの激務でプライバシーもなくてね」

「つくづく大変な方々だね」

「その中でいつも日本の為に頑張っておられるんだ」

「そうだね、そうした方々を見ているとね」

「王子は先生に強い声で言いました。」

「僕もね」

「気を引き締めてだね」

「あの方々をお手本にして」

「そうしてというのです。」

「やっていくよ」

「頑張ってね、そうしたらね」

「日本の皇室の方々みたいなんだね」

「立派な国王になれるよ」

「絶対にそうなるよ、昭和天皇みたいな王様になるよ」

「おお、凄い方だね」

「あの方を一番尊敬しているから」

「だからだということです。」

「それでね」

「特にあの方をお手本にしてだね」

「あの方みたいになるよ」

「そうなってね」

「うん、絶対にね」

王子は先生に約束しました、そうしてです。

先生とそれから色々なお話をしました、そうして楽しい時間を過ごしました。

第九幕その一

第九幕 明治からのこと

先生はこの時大学の中をお散歩して運動と気分転換に励んでいました、この時も動物の皆も一緒ですが。

皆一緒に歩く先生に口々に言いました。

「先生よく歩く様になったね」

「普通に一日一万歩は歩いてるわね」

「こうして学園の中を歩いたりして」

「そうになったね」

「そうだね、本当によく歩く様になったよ」

先生自身もこう言います。

「日本に来てからね」

「そうよね」

「お陰でかなり健康になったよ」

「毎日歩いて」

「そうしてって」

「健康にいいものをよく食べる様になって」

そしてということです。

「歩く様にもなってね」

「もう健康そのもの」

「そうだったね」

「じゃあこのままね」

「ずっと歩いていくわね」

「毎日ね。そして歩きながらね」

そうしつづというのです。

「学園の中の動物園や植物園にね」

「博物館や図書館も行って」

「美術館や鉄道図書館にもそうして」

「それで学問もしていくね」

「そうするのよね」

「そうしていつているよ」

「実際にというのです。」

「毎日ね」

「歩いて身体にいいものを食べて学問もする」

「毎日充実してるわね」

「それじゃあ健康になるのも当然ね」

「先生の場合は」

「そうだね、そしてお風呂にも入って」

「そうもしてというのです。」

「毎日服は洗濯して歯も磨いて」

「余計にだよね」

「健康になってるね」

「そうなってるわね」

「そうしているよ、そしてね」

「それでというのです。」

「余計に健康だよ」

「清潔にもしてるとね」

「確かに余計にいいわね」

「身体も奇麗にすると」

「それじゃあね」

「うん、そしてね」

「それでというのです。」

「尚更健康だよ、しかし歯磨きはね」

こちらはといいますと。

「日本にもおかしいことを言う人がいたからね」

「あれだよね、歯磨き粉を使わないで磨こうっていう人」

「時間をかけて磨けばいいとかね」

「あの買ってはいけないの雑誌で言ってたのよね」

「そうだったね」

「あの雑誌は本当に非科学的で」

そうした主張が多くてというのです。

「そしてね」

「それでだよね」

「もう文明事態に否定的で」

「鵜呑みにしたらいけない」

「そうよね」

「うん、あの雑誌の主張はどれも鵜呑みにしたらね」

それこそというのです。

「とんでもないことになるよ」

「というかしっかりと歯を磨かないと」

「歯磨き粉も使ってね」

「お口の中も結構汚くなるから」

「しっかり磨かないとね」

「そうしないとね」

それこそというのです。

第九幕その二

「身体にもよくないよ、だからあの雑誌は批判もよく受けているよ」
「当然だね」

「何か読んだら危ない雑誌ね」

「おかしな人が愛読する様な」

「そんな雑誌だね」

「僕がよく言っているおかしな料理漫画の原作者も連載していたし」
「そうしたことあってというのです。」

「本当にね」

「この雑誌こそ読んではいけない」

「そうだね」

「そうした雑誌なのね」

「うん、何でも鵜呑みにしたら危険だけれど」

「それでもというのです。」

「こうした雑誌は特にだよ」

「何でそんな雑誌があるのかな」

「世の中訳がわからないこともあるね」

「変な雑誌もあるね」

「本当にね」

「僕も思うよ」

「先生はどうかという口調で言いました、そして。
学園の中を歩いていてでした、また言いました。」

「そういえば牛女さんは運動は」

「ンまにかね」

「あまりしていないね」

「そんな感じがするわね」

「どうも」

「戦争中はずっと有力者のお家の中に匿われていてね」

「そうしてというのです。」

「ずっとお部屋の中から出なかったみたいだし」

「それじゃあね」

「やっぱり運動してないね」

「そうだよね」

「あの人は」

「今もね、いや今思い出したけれど」

「こどもも言った先生でした。」

「あの人が暴れ回るとかいうお話があったよ」

「そうだったんだ」

「あの人にそんなお話があるんだ」

「物凄く穏やかで上品な人だけれど」

「そんなお話もあるんだ」

「うん、大きなトラックに襲い掛かって体当たりするとかね」

「そうしたというのです。」

「そうしたう話もあるんだ」

「そうだったの」

「何か凄いお話だね」

「トラックに襲い掛かるとか」

「物凄いいね」

「そんなお話があってね」

「それでというのです。」

「今は運動はしてるかな」

「そうなんだ」

「じゃあ運動の分は健康なんだ」

「そうなのね」

「そうじゃないかな」

こうしたお話をしていると、です。

先生はお散歩から研究室に帰ってそうしてから今度は論文を書いていると動物の皆はティータイムの用意をしつつ先生に言いました。

「いや、健康の為には色々しないとね」

「清潔にしてね」

「運動もしてね」

「そして身体にいいものも食べることね」

「そうだよ、そしてね」

それにとです、先生は言いました。

「睡眠もね」

「そうそう、よく寝ることもね」

「そのことも大事だね」

「僕達もよく寝ているし」

「そのことも大事だね」

「今は睡眠についての論文を書いているけれど」

それでもというのです。

「本当に生きものはよく寝た方が健康でよく動けるよ」

「そしてよく休める」

「そうよね」

「よく寝たらよく動けて」

「そしてよく学ぶことも出来るね」

「その方が長生きも出来るしね」

よく寝た方がというのです。

第九幕その三

「睡眠も大事だよ」

「寝不足だとね」

ジップも言います。

「それだけで大変だよ」

「僕達もそうだし」

トートーもです。

「よく寝てこそ充分なことが出来るからね」

「若しも」

ここで言ったのはガブガブでした。

「寝不足だとあらゆることに支障が出るよ」

「僕達は特にそうだね」

ホワイティが言いました。

「人間以上に寝ないとね」

「実際に私達よく寝てるわよ」

ポリネシアは言いました。

「毎日ね」

「毎日ぐっすりと寝て」

「それで快適に暮らしているわね」

チープサイドの家族もです。

「睡眠不足って感じることはね」

「ないね」

「僕食べることも好きだけれど寝ることも好きだよ」

ガブガブはそうでした。

「本当にね」

「睡眠は本当に大事で」

ダブダブにとってもです。

「徹夜は出来る限りしないことね」

「先生もどんな時でも絶対に寝る様にしてるね」

「そうしてるね」

オシツオサレツは先生に言いました。

「丸一日寝ないってことはしないで」

「毎日絶対に寝ているね」

「だからいいんだね」

最後にチーチーが言いました。

「先生は健康なんだね」

「そうだよ、僕は毎日よく寝る様にしているよ」

実際にと言うのです。

「本当にね」

「そうだよね」

「睡眠にも気をつけてるね」

「そうだよね」

「こちらも毎日ね」

「毎日よく寝て」

そしてということです。

「学問にも励んでいるよ」

「よい学問には健康であれ」

「そして睡眠は健康の秘訣の一つ」

「それでだね」

「よく寝ることも忘れていないのね」

「そうだよ、ただ僕はお昼寝はね」

これはといいますと。

「来日してからはしていないね」

「そうそう、毎日学問をして」

「そうしてね」

「それでよね」

「お昼寝はしないね」

「それはしなくて」

そしてということです。

「そのうえでね」

「夜にしっかりと寝てるね」

「お昼は頑張って」

「そうしてね」

「うん、イタリアやスペインだとシエスタがあって」

そうしてということです。

「お昼は寝ているけれどね」

「そうそう、皆ね」

「南欧では皆シエスタするね」

「そうして楽しんでるわね」

「そうしてるね」

「あれもいいけれどどうも来日してから」

先生の場合はです」

「お昼は寝ないね」

「ティータイムもあるしね」

「先生は三時のそれは欠かせないから」

「それでよね」

「それを楽しまないといけないから」

「だからね」

このこともあってということです。

第九幕その四

「僕はお昼寝をしないね」

「そうだよね」

「それでお昼は学問に励んで」

「そうしてね」

「夜は寝てるわね」

「遅くても十二時には寝て」

「そうしてというのです。」

「それからね」

「ぐっすりだね」

「先生毎日よく寝てるよ」

「それでその分健康で」

「しっかりやってるわね」

「だからね」

「それでというのです。」

「いつも快適だよ」

「そうだね」

「じゃあ今日もだね」

「夜はしっかり寝るね」

「そうするね」

「そうするよ」

こう言っただけで、先生は論文を書いてです。

和風のティーセット、お抹茶と和菓子のお菓子とお饅頭と羊羹そしてお団子を食べました。その綺麗なそれこそ宝石みたいな和菓子も楽しんで。

お抹茶も飲みます、すると先生はこんなことを言いました。

「お抹茶は飲むと目が覚めるね」

「コーヒーみたいだね」

「一気に目が覚めるね」

「そうなるわね」

「これがいいね、気が抜けていたり眠い時も」

そうした時もということです。

「お抹茶をのむとね」

「目が覚めてね」

「あらためて頑張れるわね」

「そうよね」

「これがいいね、だから飲み終わったら」

そして食べ終わったらということです。

「またね」

「頑張るね」

「論文書いていくわね」

「そうするわね」

「そうするよ、目が覚めて」

そしてということです。

「また頑張れるからね」

「和菓子も楽しんでるし」

「そのこともあって」

「それでよね」

「また頑張れるわね」

「うん、お茶は元々目覚ましの為でもあったしね」

その為に飲まれていたということです。

「お寺の修行の時に」

「先生前に言ってたね」
「そこからお寺に定着して」
「そうして日本全体に広まったのよね」
「茶道もあって」
「そうだよ、千利休さんも元は商人だったけれど」
「それでもというのです。」
「出家してね」
「お坊さんになってたね」
「出家したから」
「だからお茶とも縁が深かったのね」
「そうなんだ、そして千利休さんの存在もあって」
「そうしてというのです。」
「お茶は大いに普及して」
「日本全体で飲まれる様になった」
「そして今に至る」
「そうよね」
「そうなんだ、そのお茶を飲んで」
「そしてというのです。」
「また論文を書いて」
「お家に帰ってもね」
「また論文書くね」
「そうするのね」
「晩ご飯を食べてお風呂にも入るけれど」
「それでもというのです。」

第九幕その五

「お酒を飲むまではね」

「論文書くよね」

「いつも通り」

「そうするのね」

「絶対にね」

こう言うのでした、そしてです。

先生は実際にティータイムの後はすぐに論文に戻って調べて書いてです、お家に帰ってからもしました。

翌日も研究室で書いていますと。

お部屋にお客さんが来ました、見れば河童でした。河童さんは先生に研究室に入れてもらいますと明るく言ってきました。

「僕はこの学園に住んでいます」

「この学園は妖怪も沢山いるからだね」

「はい、それです」

「河童君もいるんだね」

「はい、そして」

そうしてというのです。

「今日は牛女さんのことでお話したいことがありましてお邪魔しました」

「というと」

「あの人噂がありますね」

「トラックに襲い掛かったとかいう」

「ですが」

この噂話というのはです。

「そうしたお話はないです」

「あくまで噂だね」

「はい、物凄く穏やかな人ですから
それでというのです。」

「そうしたことはです」

「されないね」

「間違っても」

「それこそというのです。」

「いません」

「うん、僕もね」

「このことはですね」

「わかっていたよ」

「左様ですね」

「というか噂はではね」

「先生は河童にお話しました。」

「色々言われるよ、君達もそうだね」

「僕達もですか」

「河童は尻子玉を抜くというね」

「あのお話ですね」

「そんなことはしないね」

「というか尻子玉ってないですから」

「河童は先生にこう返しました。」

「実は」

「そうだよね」

「はい、人間の身体には」

「ないならね」

「ないものは誰も取れないですから」

それでということです。

「ですから」

「そうだね、というか大型のトラックに襲い掛かって吹き飛ばすとか」

「無茶苦茶ですよね」

「牛女さんの体格ではね」

それこそということです。

「無理だよ」

「もうその時点で、ですか」

「ないお話であの人の性格を見ても」

「やっぱりですね」

「ないよ、そうした噂話はね」

「根拠がなくて」

「鵜呑みにしたらいけないよ」

そうだというのです。

「本当にね」

「やっぱり先生はそうしたことはわかりですね」

「これでも学者だし」

先生は河童に答えました。

「医師が噂を信じたり鵜呑みにしたり偏見があるとね」

「よくないですか」

「絶対にね」

それこそということです。

「医師はそうしたものには特に気をつけないと」

「患者さんを診察してもですか」

「よくないから」

だからだということです。

「本当にね」

「気をつけておられるんですね」
「そうだよ」

実際にというのはです。

第九幕その六

「僕はね」

「それは何よりです。ですから」

「ですから？」

「僕達ともお付き合い出来るんですね」

「ああ、妖怪だからとか」

「それで偏見はないんですね」

「ないつもりだよ」

先生は河童に答えました。

「そちらもね」

「やっぱりそうですか」

「うん、妖怪も人間も心があるね」

「だからですか」

「動物もね。その心を大事にしないと」

それこそということです。

「駄目だよ」

「その考えがです」

河童は先生のお話を受けて笑顔で言いました。

「素晴らしいです」

「そう言ってくれるんだね」

「はい」

先生に実際にと答えました。

「実際にそう思いましたから」

「そうなんだね」

「そうです、それで牛女さんのことですが」

「何かな」

「お礼を言われています」

先生にというのはです。

「そのことをお話に来ました」

「歯のことでかな」

「そうです、治してくれて有り難うと」

「まだ一回あるけれど」

「それでもとのことだ」

河童は先生にさらにお話しました。

「お礼を言われていたので」

「それでなんだ」

「僕はそのことをお伝えに来ました」

「牛女さんから言われてかな」

「牛女さんは今ちょっと広島に行ってます」

「妖怪さん達のお付き合いかな」

「僕達も色々あります」

妖怪もということです。

「それで、です」

「広島の方にだね」

「呉に行かれています」

「呉っていうと」

その街の名前を聞いて先生はすぐに言いました。

「自衛隊の基地があるね」

「海上自衛隊ですね」

「大きな港に教育隊に」

「かなり大きいですね」

「そうだったね」

「海軍の頃からでして」

河童は先生に明るくお話しました。

「あそこ広島市は妖怪が多いんですよ」

「そうなんだね」

「それで呉の方にです」

「今はお付き合いでだね」

「行かれていまして」

それでというのです。

「僕が伝言を頼まりました」

「お礼を伝えるに」

「それと次の治療の日までには帰って来るので」

「そのこともなんだ」

「お伝えに来ました」

「そういうことだね」

「そうです、あと僕の場合は」

河童は先生に笑ってこうもお話しました。

「虫歯はないですね」

「君達は歯だからね」

「歯がないですから」

「そうだね」

「歯がある仲間もいますけれど」

そうした河童もということです。

第九幕その七

「僕の場合はです」

「歯がないからだね」

「磨く必要はないです、ただお口の中は」

「奇麗にしているね」

「いつも丁寧に洗っています」

「そうしているというのです。」

「専用のブラシを使って」

「歯磨き粉もだね」

「そうしています、さもないとよくないですから」

「お口の中は歯がなくてもいつも奇麗にしないとね」

「駄目ですからね」

「だからだね」

「僕も毎日お口の中を洗っています」

「こう先生にお話します。」

「そうしています」

「それはいいことだね」

「はい、ただ」

「ただ？」

「前から西瓜が好きなんです」

「この甘いお野菜がというのです。」

「それでなんです」

「何かあるのかな」

「はい、西瓜も食べ過ぎると歯によくないって」

「言う人がいるんだね」

「友達のキジムナー君達に言われました」

「そうだったんだ」

「甘いですからやっぱり」

先生に言うのでした。

「歯によくないですね。僕は歯がなくても」

「糖分は確かに問題だけれど」

それでもとです、先生は河童に答えました。

「西瓜は殆ど水分で実は糖分もあまり多くないからね」

「そんなにはですか」

「スポーツドリンクみたいなものだから」

それでというのです。

「特にね」

「気にしないでいいですか」

「そうなんだ」

「そういえば西瓜は胡瓜の仲間ですね」

「匂いでわかるね」

「はい、だから僕も好きなんです」

河童と言えば胡瓜です、兎に角胡瓜が大好きなのが河童という妖怪です。それなら胡瓜の中まである西瓜もなのです。

「西瓜が」

「そうだね、胡瓜も水分が多いね」

「固いですが」

「それでね、西瓜はもっとでね」

「スポーツドリンクみたいなものですね」

「だからね」

それ故にというのです。

「別にね」

「気をつける程じゃないですか」

「果物よりずっと糖分は少ないよ」

「実はお野菜ですし」

「そのこともあってね」

「そうですか」

「うん、ただ西瓜はいいね」

先生はその西瓜のお話もしました。

「本当に」

「そうですよね」

「あの優しい甘さと水気がね」

「最高ですよね」

「僕も大好きだよ」

先生もです。

「お野菜や果物は好きなものが多いけれど」

「西瓜はですね」

「大好きでね」

それでということです。

「よく食べるよ」

「そうなんですね」

「夏は特にね」

「夏の西瓜は最高ですね」

「本当にね、ただね」

「ただ？」

「いや、最近黄色い西瓜は食べていないなってね」

先生は気付いた様に言いました。

第九幕その八

「今思ったんだ」

「クリーム西瓜ですか」

「あちらはね」

「あの西瓜も美味しいですね」

「そうだね、じゃあ今日はね」

思い立ったらという感じで言う先生でした。

「その黄色い西瓜をね」

「召し上がられますか」

「夜にね、そうするよ」

こう河童に言うのでした、そしてです。

河童が帰ってからまた論文を書いて家に帰る時にトミーに連絡をしてその黄色い西瓜を買ってお家に帰りました。それから晩ご飯の後で。

皆で黄色い西瓜を食べました、お家に來ていた王子はその黄色い西瓜を見て明るい笑顔で言いました。

「この黄色い西瓜もね」

「いいよね」

「赤い西瓜もいいけれど」

こう先生に言うのでした。

「黄色い西瓜もね」

「独特の味があってね」

「僕は好きだよ」

「僕もだよ。じゃあ皆で食べようね」

「そういえば先生」

チーチーが先生に言ってきました。

「商店街の八百屋さんにメロンもあったね」

「あのメロンも美味しそうだったね」

老馬も言います。

「それかなり」

「大きくてよく熟れた感じで」

ジップも言います。

「美味しそうだったね」

「今回は西瓜を買ったけれど」

ホワイティもその西瓜を見えています。

「メロンもいいね」

「値段も変わらないし」

西瓜と、とです。ガブガブは言いました。

「今度はそれでね」

「西瓜もいいけれどね」

「メロンもいいね」

オシツオサレツも二つの頭で言います。

「どちらもね」

「そうだよね」

「何か昔はメロンが高かったそうだね」

「日本ではね」

チープサイドの家族はかつてのメロンのお値段のお話をしました。

「もう驚く位にね」

「そうだったみたいだね」

「それで滅多に買えなくて」

ダブダブも言います。

「皆食べられなかったそうね」

「バナナもそうだったらいいね」

トートーはこの果物のお話をしました。

「昔の日本では」

「とにかくメロンは高いもので」

最後にポリネシアが言いました。

「そうそう食べられなかったのね」

「そうだよ、昔は冷凍技術も発達していなかったし夕張メロンとかもなく」

先生は皆に答えました。

「日本ではメロンは凄く高かったんだよ」

「そうだよね」

「もう驚く位高くて」

「皆もそうそう長けられない」

「そうだったのよね」

「今じゃ西瓜と変わらない値段だけれど」

先生は西瓜を食べながらお話します。

「昔はね」

「全然違って」

「驚く位高くて」

「皆食べられなかった」

「そうよね」

「そうだよ、けれどね」

それがということです。

「冷凍技術、保存技術も発達して」

「日本でも作られる様になって」

「それでだね」

「うんと安くなって」

「それで皆食べられるんだね」

「そうなんだ、あとバナナも」

お話に出たこちらの果物もということです。

第九幕その九

「今ではね」

「安いよね」

「メロンよりもずっとね」

「そうなってるね」

「昔は高かったっていうのに」

「それがね」

「そうだよ、技術が進歩すると」

冷凍技術に保存技術そして農業のそれものです。

「皆色々なものが食べられるんだ」

「そうよね」

「旬のもの以外も食べられる様になってるし」

「今じゃ冬に西瓜食べられるし」

「夏に蜜柑だってあるし」

「確かに旬のものが一番美味しいけれど」

それでもというのです。

「旬の時以外にも食べられることはいいことだね」

「本当にそうよね」

「西瓜も夏以外にも食べられるし」

「そう思うとね」

「本当に技術が発達していいね」

「ハウス栽培もね」

これもというのです。

「素晴らしい技術だよ」

「そうよね」

「ハウス栽培で色々なお野菜が作れてね」

「何時でも食べられるから」

「いいわよね」

「うん、こうした農業技術をどんどん発展させて」

「そうしてというのです。」

「皆何時でも美味しいものを食べられる」

「そうになっていくべきだね」

「農業についても」

「それがいいことね」

「僕はハウス栽培は素晴らしいものだと思うよ」

「そう考えているというのです。」

「本当にね」

「色々なものが何時でも食べられる」

「そうなるからね」

「本当にいいね」

「その土地やお水、季節で栄養は変わるけれど」

「お野菜の中のそれはです。」

「それでも食べられることはいいことだよ」

「そうだね」

「そういえばあの料理漫画ハウス栽培も批判してたね」

「作られたお野菜の栄養が凄く低いって」

「数字に出てるって」

「だからそれぞれの土の質やお水、季節があるから」

「だからというのです。」

「一概に言えないよ」

「極端に低い場合を一般にしたら駄目ね」

「そうしたら」

「そう思うと本当にあの漫画は危険だね」

「読んで鵜呑みにしたら」

「日本には色々な漫画があるけれど」

それでもというのです。

「あの漫画は特に有害だよ」

「牛乳もそうだし他にも色々あるよね」

「もう問題だらけの漫画で」

「読んだら危ない」

「登場人物の真似をしても」

「そうだよ、あの漫画は反面教師にしないと」

鵜呑みにしないで、です。

「よくないよ」

「いや、凄い漫画だね」

王子はスプーンで黄色い水位化を食べながら言いました。

「僕も知ってる漫画だけれどね」

「王子もそう思うね」

「先生が言う意味で凄いつてね」

「そうだよね」

「少なくとも先生には合わないよ」

その漫画はです。

第九幕その十

「理知的で冷静で科学的に考える先生にはね」

「科学を出しても非科学的だしね」

「出て来る人が皆先生と真逆ですよね」

トミーも言ってきました、勿論トミーも黄色い西瓜を食べています。

「本当に」

「トミーはそのことが気になるんだ」

「はい、もうすぐに怒って騒ぐ」

「確かにそんな登場人物ばかりだよ」

「無教養で野蛮で」

登場人物全員がです。

「主人公側も相手側も」

「ゲストキャラもね」

「本当に皆そうですから」

「皆僕と真逆だっていうんだね」

「先生お店の料理で化学調味料使って暴れます?」

お店の中で、です。

「絶対にしないですよね」

「それはおかしいからね」

「おかしい行いですね」

「うん」

そう言うしかないということです。

「本当にね」

「化学調味料は法律に触れてないですね」

「だからお店でも使ってるよ」

「そうですよね」

「それにね」

先生はさらに言います。

「幾ら口に合わなくてもね」

「お店の人や他のお客さんの迷惑ですし」

「そんなこと誰がしても許されないよ」

「絶対に」

「そう、絶対にね」

まさにということです。

「許されないよ」

「そうですよね」

「けれどその許されないことがね」

「普通に行われている漫画ですから」

「鵜呑みにしては駄目だよ」

「その全部を」

「全部どうかって思いながら読まない」と

それこそということです。

「あの漫画は駄目だよ」

「物凄い漫画ですね」

「ああした新聞記者は絶対に暴れる様子を動画でインターネットで拡散しないと」

「よくないですね」

「日本のマスコミは自分達の悪事は隠蔽するからね」

先生はこのことも指摘しました。

「だからね」

「若し現場を見たらですね」

「すぐに動画に撮ってね」

スマートフォンでそうしてというのです。

「そしてね」

「世に知らしめて」

「新聞社全体の責任もね」

その記者が所属しているなら新聞社にも責任があるからです。

「追及しないとね」

「駄目ですね」

「うん、しかもあの漫画の記者みたいな記者がね」

「現実にありますね」

「それが日本だから」

現実にいるからというのです。

「ああしたことはどんどんしないとね」

「駄目ですね」

「しかもそれで主人公だから」

「余計に駄目ですね」

「何でも原作者の人もあらしいよ」

「お店のお料理が口に合わないと、ですか」

「暴れるらしいから」

そうするからというのです。

第九幕その十一

「創作者の中にあるものが作品にも登場人物にも出るけれど」

「あの作品もですね」

「そうだよ、酷い人の作品はね」

「酷い作品になりますね」

「そうなるから」

「だからだということです。」

「気をつけないとね」

「そういうことですね」

「作品は鏡でもあるからね」

「先生はこうも言いました。」

「創作者の中にあるものが出るんだ」

「書いたり描いたりする中で」

「そうだよ、ダヴィンチやミケランジェロの絵もね」

「ルネサンス期の有名な人達のお話もしました。」

「それぞれのの中にあるものがね」

「出ているんですね」

「そうだよ、小説や漫画もそうでね」

「あの漫画も然りですね」

「原作者の中にあるものがね」

「出て、ですね」

「ああなっているんだよ」

「こうトミーにお話しました。」

「本当にね」

「そういうことですね」

「今あの漫画はネットで批判され続けているけれど」
「当然のことですね」
「そうだよ、歪んだ海図は捨てられるし」
「そうなってというのです。」
「おかしい漫画もね」
「批判されますね」
「信じられなくなってね」
「そうしてというのです。」
「徹底的に検証されて批判されるよ」
「何でも書いたらいいんじゃないね」
「おかしかったら批判される」
「そして創る人も出る」
「それが作品なのね」
「うん、例えばガリバー旅行記も」
「先生は動物の皆にこの作品のお話をしました。」
「ジョナサンⅡスウィストの考えが出ているよ」
「巨人の国に行ったり小人の国に行ったり」
「馬の国に行ったりね」
「天空の城にも行くわね」
「当時のイギリスを風刺したりもしてるし」
「そうしたこと入っているというのです。」
「スウィストの考えも入っているんだ」
「成程ね」
「そうしたことも読んでいくのね」
「先生は文学も学んでるけれど」
「文学にも出てるのね」
「そうだよ」

「そういえばね」

王子は麦茶を飲んで西瓜を食べている先生に言いました。

「不思議の国のアリスそれに鏡の国のアリスだけねど」

「ルイスⅡキャロルだね」

「あの作品もだね」

「うん、ルイスⅡキャロルの考えが出てね」

そうしてというのです。

「ああした作品になっているよ」

「風刺と言葉遊びに」

王子は言いました。

「あと少女趣味？」

「そのことだね」

「あれは作者さんの趣味だね」

「実はルイスⅡキャロルはね」

先生は王子に少し苦笑いでお話しました。

「そちらの趣味があったんだ」

「実際にそうだったんだ」

「それもかなりね」

「やっぱりそうだね」

「生涯独身だったのは」

そのこともお話するのです。

第九幕その十二

「どうもね」

「その趣味がなんだ」

「影響しているかもね」

「実際にそうなんだ」

「うん、本当にそうしたお話もあるし」

ルイスⅡキャロルという人にはということです。

「小さい女の子が好きな」

「実際になんだ」

「あってね」

「じゃあ今だと」

「警戒されていたと思うよ」

先生は王子にお話しました。

「あの人はね」

「そこまでなんだ」

「今だとね」

「そうなんだね」

「理知的な紳士だったけれど」

それでもということです。

「今だとね」

「幼女趣味が過ぎて」

「そう、本当にね」

「警戒されていたんだ」

「警察のご厄介になることも」

「えっ、警察って」

王子はそのお話に驚いて言いました。

「そこまでの人だったんだ」

「うん、これがね」

「そんな人だったんだ」

「今だとね、当時は問題にならなかったけれど」

「今だとだね」

「今はそういうことが厳しいから」

そうなっているからだということです。

「問題になるよ」

「偉大な作家さんも逮捕されるかも知れないんだ」

「今もね、というかね」

「というか？」

「ルイスⅡキャロルは本来は理系の学者さんだからね」

「小説家は本業じゃなかったんだね」

「そうだよ、そのことも覚えておいてね」

こう王子にお話しました。

「色々調べると面白いから」

「あの人のことも」

「作家さんそれぞれの生い立ちを調べても」

そうすると、ということです。

「本当にね」

「面白いんだね」

「そう、だからね」

「じゃあ日本の作家さんもかな」

「そうだよ、森鷗外もそうだし」

「他の人達もだね」

「それをするのも学問だから」

それでということです。

「僕もそうしていくよ」

「これからだね」

「文学を学ぶ時はね」

先生は笑顔でお話しました、そうしてこの日の残りも楽しい時間を過ごしました。

第十幕その一

第十幕 牛女さんの訪問

この日は休日で先生はお家で論文の為の読書に励んでいました、その先生に動物の皆が言いました。

「今日は何の本読んでるのかな」

「前は医学書だったけれど」

「今度は何？」

「何の本を読んでいるの？」

「日本の脚気の歴史の本だよ」

こちらだということです。

「今よんでいるのはね」

「脚気なんだ」

「脚気の本読んでるんだ」

「そういえば先生脚気の論文書いてるね」

「そうだったね」

「そう、それでね」

今はということです。

「脚気の本を読んでいるんだ」

「その歴史をだね」

「日本人が随分苦しんだっていう」

「その歴史の本を読んでいるんだ」

「うん、読めば読む程ね」

先生は皆にお話しました。

「日本で脚気は深刻な病気だったんだ」

「沢山の人がなってしまうていた」

「そうした病気だったんだよね」

「もう国全体でどうしようかとなっていた」

「深刻な問題だったのよね」

「日本は疫病は少ないけれど」

「それでもということです。」

「脚気がね」

「ペストとかなかったけれどね、日本って」

「天然痘はあったけれど」

「それでもね」

「脚気があったね」

「脚気に結核、梅毒がね」

「この三つの病気がということです。」

「江戸時代から明治にかけて日本の国民病だったんだ」

「癌みたいなの？」

「今で言う」と

「そうした病気だったんだ」

「そうだったのね」

「癌もあったけれど」

「先生は皆に難しいお顔でお話しました。」

「この三つの病気の方がね」

「深刻だったのね」

「沢山の人がなってしまうていた」

「そうした病気だったの」

「結核や梅毒と同じ位問題だったんだ」

「結核や梅毒はペニシリンが出来て」

「そしてということです。」

「克服されたけれどね」

「第二次世界大戦が終わって」

「それからだね」

「結核や梅毒は克服されて」

「命を落とす人もいなくなったのね」

「それまではどちらも深刻で」

「それでというのです。」

「結核で命を落とした作家さんも多いよ」

「宮沢賢治さんもそうだったね」

「あの人も結核で」

「あと織田作之助さんもだったね」

「梶井基次郎さんも」

「あとそれが死因ではないけれど」

「それでもというのです。」

「太宰治さんや芥川龍之介さんもね」

「結核だったんだ」

「その人達も」

「そうだったのね」

「夏目漱石さんもだったしね」

「この人もというのです。」

「あと森鷗外さんもね」

「その脚気でやらかした人もなんだ」

「結核だったんだ」

「この人も」

「それで亡くなっているよ」

「森鷗外さん也是如此です。」

「本当に結核が問題だったんだ」

「欧州でもそうだったけれど」

「日本でもなんだ」

「結核は深刻だったんだ」

「沢山の人が命を落とした」

「それで肺をある程度潰して
そうしてというのです。」

第十幕その二

「助かった人もいるよ」

「ペニシリンがなくて」

「そうしたんだ」

「そんなお話もあるんだ」

「うん、結核は今もあるけれど」

「それでもというのです。」

「日本ではずっと深刻だったんだ」

「脚気もそうで」

「梅毒もで」

「日本の三つの国民病だったんだ」

「明治の頃はね、幕末までは天然痘もあったよ」

「この病気もというのです。」

「それで四つだったよ」

「さっき天然痘のお話も出たけれど」

「天然痘はもうないけれど」

「あの病気も怖かったのよね」

「命を落とす位に」

「助かっても顔があばただらけになるしね」

「このこともあるというのです。」

「それで差別された人もいるし。さっき夏目漱石さんの名前出したけれど」

「あの人天然痘にもなってたんだ」

「そうだったのね」

「結核だけじゃなくて」

「天然痘にもなんだ」

「なっちゃってしまっていてね」

それでというのです。

「お顔にあばたがあったんだ」

「あれっ、写真見たらないよ」

ここでもう言ったのはトートーでした。

「あの人の写真には」

「そうそう、お札にもなってたけれど」

ダブダブも言います。

「あばたないよね」

「天然痘のそれがね」

ポリネシアも言いました。

「ないわ」

「どの写真でもね」

ホワイティはこれまで見た夏目漱石さんのお顔写真のそれを思い出します、するとどの写真でもでした。

「あばたないよ」

「絵でもないし」

ジップも言います。

「漱石さんの絵もあるけれどね」

「如何にも落ち着いた紳士だね」

「そうよね」

チープサイドの家族も言います。

「お写真の漱石さんは」

「結構顔立ち整ってる？」

「芥川さんや太宰さんみたいな美形じゃないけれど」

ガブガブはこの人達を思い出しました。

「悪い顔立ちじゃないね」

「そうそう、教養も感じさせる」

チーチーも言います。

「そんなお顔立ちだよ」

「それでどの写真にもあばたないよ」

老馬も指摘します。

「夏目漱石さんは」

「結核はわかったけれど」

「あばたはないから」

オシツオサレツは二つの頭を傾げさせています。

「どの写真にも」

「あったとはね」

「それはどの写真も修正してもらっていたからだよ」

先生は皆にこうお話しました。

「だからなんだ」

「ああ、あばたはないんだ」

「写真修正してもらってたから」

「それでなの」

「今もする人いるけれど」

「漱石さんもなんだ」

「漱石さんはあばたのことをかなり気にしていたから」

それです。

「どの写真もなんだ」

「修正してもらっていたんだ」

「成程ね」

「だから写真の漱石さんにはあばたがないんだ」

「そういうことだったの」

「うん、あの人は他にも糖尿病や胃潰瘍もあったからこちらの病気もというのです。」

第十幕その三

「大変だったんだ、鬱になった時もあるし」

「うわ、病氣と縁がある人だったんだ」

「色々なっている人だったの」

「実は」

「大変だったのね」

「そうだよ、死因は胃潰瘍だったけれど」

「それでもというのです。」

「兎に角ね」

「病氣に苦しんだ人だったんだね」

「結核に天然痘に」

「そして糖尿病に胃潰瘍に鬱」

「病氣のオンパレードだね」

「被害妄想もあったしね」

「こちらもというのです。」

「かなり大変だったよ」

「ううん、不健康というか」

「病氣の塊？」

「沢山の名作を残したけれど」

「ご自身は病氣に苦しんだ人なんだ」

「そうした人だったんだ」

「こう皆にお話しました。」

「夏目漱石さんはね」

「そうしたお話を聞くと健康第一だね」

「何と言っても」

「そこまで病気に苦しんでいたら」

「沢山の名作を残していても」

「自分自身が大変だよ」

「うん、どの病気にも気をつけてね」

先生はお医者さんとして言いました。

「日々を過ごしていかないとね」

「そうそう」

「先生もそうしてるしね」

「それじゃあね」

「僕達も」

「是非ね、そういえば」

ここで先生はこうも言いました。

「先日文学部の教授さんで痛風になった人がいたよ」

「痛風？」

「あの足の親指の付け根が痛くなるっていう」

「あの病気になったんだ」

「それは大変ね」

「どうもビールが大好きで」

それでというのです。

「つついね」

「飲み過ぎてなんだ」

「痛風になったの」

「そうだったのね」

「それで苦しんでいるそうだよ」

痛風になってというのです。

「足が痛いし風が少し吹いてもね」

「痛いっていうね」

「痛風になったら」
「身体を触られても痛い」
「泣きそうになる位に」
「僕はなっただことがないけれど」
「それでもということです。」
「診察を受けたこともあるしね」
「だからだね」
「先生も痛風のこと知ってるね」
「お医者さんとして」
「うん、あの病気もなると大変だから」
「それでということです。」
「注意しないとね」
「駄目だよね」
「痛い思いをしたくなかったらね」
「最初から気をつける」
「そうしないと駄目だね」
「そうだよ、ビールの飲み過ぎに気をつけて」
「そしてということです。」
「コレステロールにもね」
「気をつけないとね」
「美味しいものを食べても」
「それでもね」
「そうだよ、そうした意味でもね」
「痛風のことを考えてもということです。」

第十幕その四

「お魚を食べるといいよ」

「そうよね」

「お魚はコレステロールを減らしてくれるし」

「悪玉の方を」

「だからいいのね」

「そうなんだ、僕も日本に来て」

「そうしてというのです、先生ご自身も。」

「お魚をよく食べる様になってね」

「コレステロール減ったね」

「そうなったね」

「先生にしても」

「そうよね」

「そうだよ、ただ僕もビールが好きだから」

「それでというのです。」

「注意しないとね」

「そうだよね」

「確かに先生ビールも好きだし」

「飲む時も多いから」

「先生も注意しないとね」

「痛風はドイツでは国民病だけれど」

「この国ではそうなっているというのです。」

「ビールにソーセージ、ベーコンにジャガイモにバターそれにケー

キだから」

「確かケーキの生クリームもよくないね」

「そうよね」

「ドイツ料理は兎に角痛風によくなくて
なる人が多いのよね」

「特にビールだね」

「これがよくないということです。」

「やっぱりね」

「そうだよね」

「ビールがよくないよね、痛風には」

「何といっても」

「歴史的に痛風の人が多い理由も」

「その訳もというのです。」

「ビールを好きな人が多いからだよ」

「何と言ってもビールなんだ」

「痛風によくないんだね」

「ビールは」

「そうだよ、最近はプリン体がないビールもあるから
だからだということです。」

「危ない人はこうしたビールを飲んだりして」

「注意することだね」

「本当に」

「さもないと痛風になるから」

「痛い思いをするから」

「まずはならないことだよ」

「このことが第一だということです。」

「どんな病気もそうだけれどね」

「痛風も然り」

「まずはならないこと」

「病気はそうなのね」

「脚気もそうでね」

そしてということです。

「虫歯もだよ」

「もうとにかくだね」

「病気はならない」

「それが第一ね」

「うん、健康が何よりも大事だよ」

これが先生の結論でした。

「本当にね」

「そうよね」

「先生はそこは気をつけているし」

「それじゃあね」

「これからもよね」

「健康に気をつける」

「そうしていいこうね」

「そうするよ」

こう言うのでした、家のチャイムが鳴りました。皆その音を聞いてすぐに言いました。

「宅配の人？」

「いや、別に何も注文していないよ」

「そうよね」

「それじゃあお客さん？」

「王子かな」

「サラさんはまだ来るの先だしね」

「誰かな」

皆首を傾げさせて言います、そしてです。

第十幕その五

玄関に行くのでした、そこには。

牛女さんがお付きの人達と一緒にいました、そうして先生に言ってきました。

「今広島から戻ってきました」

「そうでしたか」

「お土産を持ってきました」

先生に礼儀正しくお話します。

「そうしてきました」

「お土産といえますと」

「先生、中に入ってもらいましょう」

これまでお庭のお掃除をされていて今玄関に来たトミーが言ってきました。

「そうしてもらいましょう」

「今はだね」

「はい」

こう先生に答えました。

「そうしてもらいましょう」

「それじゃあね」

「では」

「上がったも宜しいのですか」

牛女さんは先生達のお話を聞いて言いました。

「そうしても」

「どうぞ」

先生は笑顔で応えました。

「そうして下さい」

「そうですか、では」

「お茶とお菓子を出しますので」

その両方をとというのはです。

「どうぞ」

「お菓子まで、ですか」

「はい、お客さんですから」

「申し訳ないですね」

「いえ、遠慮なく」

笑顔で言う先生でした。

「一緒におられる方も」

「私達もですか」

「あがっていいのですか」

「そうなのですか」

「はい、どうぞ」

こう言ってでした、先生は牛女さん達にお家の中に入ってもらいました。そしてお茶とお菓子を出しましたが。

牛女さんは奇麗に包装された大きな箱を出して先生に申し訳なさそうに言いました。

「実はお土産は紅葉饅頭でして」

「広島名物の」

「はい」

そちらだということです。

「そうなのですか」

「ではお菓子を出したのは」

「何といますか」

「ああ、それものです」

「いいですか」

「そうかと」

先生は牛女さんに笑顔で言いました。

「お菓子は幾らあってもいいものですね」

「そうですね、私も甘いものが好きですし」

「僕もです、ですから」

それでということです。

「いいかと」

「そうですか」

「はい、お菓子は羊羹ですが」

「羊羹もいいですね」

牛女さんはその羊羹を見て笑顔で言いました。

「こちらも」

「それでは」

「はい、紅葉饅頭は受け取って頂けますか」

「喜んで」

これが先生のお返事でした。

「むしろ謙遜を感じますが」

「受け取って頂けないと」

「そうですね、では」

「はい、では」

笑顔でやり取りをしてでした。

先生は紅葉饅頭を受け取ってそうしてでした、それから世間話になりましたがここで牛女さんは言いました。

第十幕その六

「虫歯の方も」

「あと一回です」

「それで、ですね」

「完治します」

「そうですか。それは何よりです」

「はい、あと牛女さんの歯は虫歯になりましたが、それでもというのです。」

「本来かなり丈夫ですから」

「だからですか」

「毎日歯を磨かれますと」

「そうすればというのです。」

「大丈夫です」

「そうですか」

「ライムジュースの様なものをいつも口にしなければ、歯に悪いものをです。」

「特にです」

「問題はないですか」

「はい」

「そうだということです。」

「そのことはご安心下さい」

「それでは完治すればですね」

「もう普通に過ごされていますと」

「安心していいですね」

「そうです、ただライムジュースが随分お気に召されたのですね」

「実は」

そうだったとです、牛女さんは先生に答えました。

「本当に」

「前にもお話されましたが」

「そうです、あの味が病みつきになって」

「いつもですか」

「お水みたいに飲んでいました」

「そうでしたか」

「何しろ私は牛なので」

だからだということです。

「同じ体格でも人より飲む量が凄くて」

「ああ、そうだよね」

「牛さんってお水かなり飲むよね」

「草もかなり食べるね」

「子牛の時からね」

動物の皆も言います。

「だったらね」

「牛女さんもだね」

「かなり食べてね」

「それで飲むね」

「それがいけなかったのですね」

牛女さんはしみじみとして述べました。

「そうなのですね」

「そうですね、ですが」

「これからは気をつけるとですね」

「いいです」

先生はまたにこりとしてお話しました。

「これからは」

「わかりました」

「はい、あとです」

「あとといえますと」

「紅葉饅頭ですが」

先生は牛女さんにお土産のお話を笑顔でしました。

「実は大好きでした」

「そうなんですか」

「僕は甘いもの全般が好きで」

それでというのだ。

「紅葉饅頭もです」

「お好きですか」

「カスタードやチョコのものも」

そういった紅葉饅頭もということです。

「好きです」

「それは何よりです、実はこれはという種類は全部です」

「お土産の中にあるんですね」

「はい」

「それは素晴らしい、それでは」

「これからですね」

「楽しませてもらいます」

是非にと言うのでした。

「後で」

「そうされて下さい」

「是非共、ただ」

「ただといえますと」

「いえ、紅葉饅頭は広島 of 厳島が一番有名ですね」

「元々あちらから出たそうだし」
牛女さんも答えます。

第十幕その七

「その様ですね」

「厳島の大社もまた素晴らしいですね」

「そうですね、海の中にあってです」

「潮の満ち引きによって出て来ますね」

「あれがですか」

「とても神秘的でかつ奇麗なので」

「それでというのです。」

「この世のものとは思えません」

「それだけ素晴らしいですか」

「はい、まさに神の世界ですね」

先生は牛女さんに目を輝かせてお話しました。

「歴史にも出て来ますし」

「平家の守り神でした」

「あの源平の」

「そして毛利元就公もです」

戦国時代の有名な戦国大名の一人です。

「あの人も信仰していましたし」

「そうでしたね」

「清盛公は神戸にも関わりがありますし」

「福原に都を移しましたね」

「そうしたこともありましたし。何かと言われる人ですが」

「それでもというのです。」

「私は嫌いではないです」

「実は一族にも家臣にも優しい人でしたね」

「そうでしたし」

「僕もそう思います、むしろ頼朝さんよりもです」

「いい人でしたね」

「そうだったかと」

「こう言うのでした。」

「あの人は」

「そうでしたね」

「ただ毛利元就さんは」

「あの人は織田信長さんより凄かったんですよ」

牛女さんは苦い顔でお話しました。

「姫路城の姫様も言われてますが」

「あの方は信長さんとも会われていますか」

「そうした機会があったそうで」

「信長さんを直接ご存知なのですね」

「そうです、お話では信長さんは実は気配りも出来る優しいところのある人で」

「言われている姿と違ってというのです。」

「無闇な殺生もです」

「しない人でしたね」

「ですが姫様は元就さんとも会われたことがあったそうですが」

「あの人は、ですね」

「謀略ばかり使って」

「そうしてというのです。」

「悪の限りを尽くした」

「そうした人でしたね」

「あの時は色々悪い人がいましたが」

戦国時代はというのです。

「元就さんはその中でも」

「トップクラスの悪人でしたか」

「斉藤道三さんや松永久秀さんよりも」

戦国時代でも有名な悪人達です。

「極悪非道だったとか」

「そうでしたか」

「ですが悪いことをしていると自覚していたそうで」

「神仏への信仰は強かったのですね」

「そうです、あと信長さんも」

この人もというのです。

「実は信仰心がありました」

「無神論者ではなかったですね」

「あの人なりに神仏への信仰がありました」

「お寺を建てて人を吊ったり」

「安土城の天主閣は色々な神仏を集めていましたし」

「あのお城の石垣は墓石でしたね」

「霊力を使った結界にと考えていまして」

只の石と思わないで、です。

「実はです」

「あの日とも信仰心がありましたね」

「そうでした」

「そうでしたね、僕もそう思います」

織田信長さんについてです。

第十幕その八

「そうした人だと」

「そうですね」

「はい、ただ」

「ただといいますと」

「僕も一度です」

先生は牛女さんに目を輝かせてお話しました。

「広島に行きまして」

「厳島神社にですね」

「行きたいですね」

「それはいいことです、では江田島にも行かれて」

「海上自衛隊のこともですね」

「学ばれて下さい」

牛女さんは先生ににこりと笑ってお話しました。

「呉の方にもです」

「行ってですね」

「自衛隊をご覧になって下さい」

「そのことも学ぶべきですね」

「海軍の頃からの歴史がありますから」

「そうですね」

「是非です」

広島に行った時はということです。

「そうされて下さい」

「わかりました、では」

「その時が来ることを期待しています」

「その言葉心に刻んでおきます」

「ただ野球は」

牛女さんは今度は苦笑いで言いました。

「あちらは残念ですね」

「カープですね」

「やはり野球は阪神ですね」

「僕も野球は阪神です」

「私は戦争前からのファンですが」

「広島は、ですね」

「あのチームの地元なので」

カープのということです。

「ライバルですね」

「確かに。ですがよきライバルですね」

「そうですね、強敵ですが嫌いかと聞かれますと」

「嫌いではないですね」

「はい」

実際にということです。

「私も」

「左様ですね」

「いいチームなので」

ライバルでもです。

「いつも必死に練習をしていてファンの人達も全力で支えている」

「そうしたチームですね」

「あの素晴らしさはです」

「阪神としてもですね」

「手本にしたいです」

そこまでのチームだということです、広島東洋カープというチーム

は。

「野球、勝利に対するひたむきさは」

「そうですね、僕もそう思います」

先生は牛女さんに笑顔で応えました、そうしてです。

それから何かとお話をしてです、牛女さんが帰った後で皆と一緒に紅葉饅頭を食べました。その時にでした。

王子も来ていましたがその紅葉饅頭を食べて言いました。

「ううん、日本はどれだけ美味しいものが多いのか」

「そこまで思えるね」

「そうだよね」

先生にこう返しました。

「各地にこうしたお菓子があるんだから」

「そのことも素晴らしいね」

「全くだね」

「こうして各地に名物のお菓子があったら」

食いしん坊のガブガブが言います。

「食べ歩きにも困らないよ」

「駅に行けば駅弁があるし」

ジップはこちらのお話もしました。

「主な駅ごとだね」

「ラーメンもそうだね」

チーチーは紅葉饅頭を食べつつ言います。

「各地にあるね」

「それでお菓子もで」

ホワイティも言います。

「食べ歩きしても困らないね」

「実際先生食べ歩きも好きになってるし」

老馬は笑ってこのことをお話しました。

「日本に来てからね」

「もうその土地に行ったら絶対にそこの名物食べてるよね」

「そうそう、沖縄でも長野でも北海道でも」

オシツオサレツは二つの頭で言います。

第十幕その九

「琵琶湖でも和歌山でもね」

「松山でもだったし」

「とにかく美味しいものがあちこちにある国ね」
ダブダブも言いました。

「日本は」

「そうそう、それはお菓子もで」

ポリネシアはダブダブに続きました。

「各地にあるのよね」

「それを全部食べていくだけでも」

トートーはしみじみとした口調で言いました。

「大変なことだよ」

「どうしてここまで美味しいものが一杯あるのか」

「唸る位よ」

チープサイドの家族も言いました。

「日本地がどれだけ美味しいものを求めているか」

「そのことも思うね」

「うん、色々食べることも」

「このこともと言う先生でした。」

「食文化を学ぶことだけれど」

「学びきれないよね」

「ここまで多いと」

「ちょっとやそつとじゃね」

「そうよね」

「全くだよ、けれどじっくりと時間をかけて」

「そうしてというのです。」

「やっていくよ」

「そうだよね」

「日本の食文化を学ぶことも」

「そのこともね」

「やっていくわね」

「そうするよ、あと広島にはね」

牛女さんとお話したこともお話します。

「是非ね」

「行きたいよね」

「そうだよね」

「これから」

「機会があれば」

「そうしたいよ、広島城にも行って」

そうしてというのです。

「広島市を巡って呉にも行って」

「江田島にも行って」

「そして厳島にも」

「そうするのね」

「特に厳島に行きたいかな」

この場所にというのです。

「僕はね」

「厳島の大社だね」

「あの社に行きたいのね」

「是非共」

「そうしたいのね」

「今広島で一番行きたい場所だよ」

先生としてはそうだというのです。

「本当にね」

「潮の満ち引きで海から姿を現す社なんて」

「ちょっとやそっとじゃないよ」

「この世にそんなものがあるとか」

「確かに凄いわね」

「これだけ神秘的な場所はそうないと思うから」

それだけにというのです。

「行きたいね、あとあの社の神様も僕は大好きなんだ」

「厳島大明神よね」

「あの社の神様は」

「そうよね」

「平家の守り神だったこともあるけれど」

平家に信仰されていてです。

「平家をずっと庇っていたんだ」

「源氏と戦って負けていても」

「それでもだったの」

「あの社の神様は平家を庇っていたの」

「そうなんだ、他の神々が怒ってもね」

平家についてです。

「あの社の神様だけはね」

「平家を庇っていた」

「そうなのね」

「そうした神様なのね」

「自分を信仰してくれる人がどうなっても庇う様な」

そうしたというのです。

第十幕その十

「優しい神様でもあるんだ」

「ただ神秘的なだけじゃなくて」

「そうした神様でもあるのね」

「あちらの神様は」

「そうなのね」

「そう、だからね」

「それでということです。」

「僕はあの社が好きで」

「神様もなのね」

「先生は好きなのね」

「優しい神様だから」

「そうなんだ、だから一度ね」

「先生としてはです。」

「行きたいと思っているよ」

「そうなのね」

「それじゃあね」

「機会があればね」

「あちらにも行きましょう」

「是非ね」

「それと瀬戸内海は」

「トミーは広島の前はこの海のお話をしました。」

「神戸も面していますけれど」

「あの海はどうかしたのかな」

「魚介類は豊富ですが潮流は複雑でしたね」

「うん、季節によって変わってね」

先生も答えます。

「小島も多くてね」

「船の行き来が難しいですね」

「その船も多くて魚介類が豊富で漁業も盛んで」

それでというのです。

「網や養殖場も多くてね」

「行き来が難しいですね」

「迷路みたいなところで」

それでというのです。

「船での航海では凄く難しいんだ」

「じゃあ海上自衛隊も」

「帝国海軍の頃からいつもあの海を行き来しているから」

「航海技術が凄いですね」

「瀬戸内海は世界屈指の難所だよ」

航海にはというのです。

「本当にね」

「そうですね」

「そこをいつも行き来しているから」

「海上自衛隊の公開技術は凄いですね」

「そう、帝国海軍の頃からね」

「じゃあイギリス海軍よりも」

「そうした技術は上だろうね」

先生は実際にと答えました。

「冗談抜きにね、海上自衛隊は他にも横須賀や舞鶴や佐世保、大湊と大きな港を持っているけれどね」

「確か横須賀と舞鶴は」

「横須賀は江戸湾だからね」

「船が多いですね」

「世界屈指でね、舞鶴は波が荒らいし」

「難所が多いですね」

「その難所をいつも航海しているから」

それだけにというのです。

「海上自衛隊の航海技術は尋常なものじゃないよ」

「そうですか」

「というか日本の海はね」

ここはといいますと。

「難所が多いんだよ」

「瀬戸内海に江戸湾に日本海に」

「高知県の南もだしね」

「黒潮ですね」

「それもあるからね」

「あちらも難所ですね」

「あと佐世保も近くにね」

先生はこちらのお話もしました。

「潮流がややこしくて大湊から北海道に行くけれど」

「あちらの海もですか」

「波が高いから」

「航海が難しいですか」

「そして横須賀や呉は出入港自体が凄く難しいと評判だよ」

湊の時点でそうだというのです。

第十幕その十一

「出入港が船で一番難しいというけれど」

「もうそこですか」

「難しくてね」

「それでというのです。」

「やっぱりね」

「そこでも技術が磨かれますか」

「そうなんだ」

「そう考えると海上自衛隊も大変ですね」

「あちらの人達もね」

「周りの海は難所ばかりで」

「だから必然的に技術が凄くなるけれどね」

「それでもというのです。」

「実際かなり苦労しているよ」

「そうして技術を磨いていくんですね」

「そうなんだ、しかも訓練も多いから」

「それも昔からだよね」

「王子が言ってきました。」

「帝国海軍の時からね」

「うん、海上自衛隊もね」

「いつも訓練しているね」

「陸上自衛隊も航空自衛隊もね」

「訓練は怠っていないね」

「規律も厳しいし。ただね」

「ただ？」

「流石に戦前の軍隊よりは訓練も気率も緩やかだよ」
そうなっているということです。

「帝国陸海軍よりはね」

「あの厳しい軍隊だね」

「そう、あの軍隊に比べたら」

それこそということです。

「かなりね」

「緩やかなんだ」

「そうなっているよ」

「流石にあの軍隊とは違うね」

「ロイヤル・ネイビーも厳しかったけれど」

イギリス海軍もです。

「けれどね」

「日本軍よりはだね」

「とにかく激しい訓練をいつもして」

「規律もだね」

「物凄く厳しくてね」

「自衛隊以上にだね」

「自衛隊も確かに厳しいけれど」

それでもということです。

「桁が違っていたよ」

「そうだよね」

「武士道に基づいてね」

「厳しかったんだね」

「それでね」

そのうえでということです。

「日本軍は物凄く強かったんだ」

「規律できちんとしていてだね」

「訓練も物凄くてね」

「そうだったんだね」

「そして海上自衛隊も」

「海軍程じゃなくても」

「凄いよ、そしてその海上自衛隊もね」

是非にというのです。

「呉や江田島に行ったらね」

「見たいんだね」

「是非ね。僕は自衛隊は嫌いじゃないしね」

「むしろ学ぶべき対象であってね」

「いい組織だと思うし」

それです。

「一度ね」

「その目でだね」

「見たいよ」

「そういえば神戸は自衛隊はね」

「阪神基地隊があるけれど」

「震災の時は助けてもらったけれど」

阪神大震災の時です、ただこの時は当時の知事さんが自衛隊に好意的でないので要請が遅れたと言われています。

「それでもだね」

「呉みたいに密接な関係はないよ」

「そうだね」

「けれど軍隊も必要な組織で」

「学ぶこともだね」

「出来るんだよ」

こう王子にお話します。

「あの組織もね」

「そして自衛隊もだね」

「そうなんだよ、だからね」

「機会があればだね」

「あちらにも行きたいね」

笑顔で言う先生でした、そうしてです。

広島のことをさらにお話します、そうして今度行きたいとお話するのです。

第十一幕その一

第十一幕 完治して

牛女さんの歯の治療はいよいよあと一回になってその日が近付いていました、先生は途中で落ち着いていました。

その落ち着きを見てお静さんは大学の研究室にいる先生に言いました。

「もうすぐ最後の治療ね」

「うん、そうだね」

「その割に落ち着いているかしら」

「いや、お医者さんが治療や手術で我をなくしたりしたら」

「駄目だっていうのね」

「だからね」

「それでというのです。」

「僕はいつも平常心を保つ様にしているけれど」

「診察や治療の前にもなのね」

「手術の前にもね」

「そうなのね」

「そうした時こそね」

「まさにというのです。」

「もうね」

「落ち着くべきなのね」

「そう、紅茶を飲んで」

「大好きなそれをといるのです。」

「そうしてね」

「それでなのね」

「そう、落ち着いて」

「今回も治療するのね」

「逆に僕はいつも落ち着いていて」

「あっ、先生焦ることはね」

「お静さんもここで言いました。」

「絶対にないわね」

「それで急ぐ様にとね」

「言われるのね」

「そうなんだよね」

「そうね、先生はそうした人ね」

「だから大丈夫かって言われたこともあるよ」

「そうしたことがあったというのです。」

「大変な手術の前にもいつも通りだったから」

「確かに先生を知らない人だとね」

「緊張してなくてだね」

「そう思うこともあるわね」

「子供の頃からこうなんだ」

「先生はということです。」

「何が会っても焦らなくてもね」

「落ち着いているのね」

「こうしてね」

「成程ね、そういえば」

「ここでお静さんはこうも言いました。」

「もうあらかた治療を終えてるわね」

「一番大きなものはね」

「後は一回だけね」

「それはもう詰めだから」

それでということです。

「その詰めが大事だけれど」

「一番大きなものはなのね」

「終わっているよ」

「そうね、じゃあかえって私がね」

「焦っているっていうんだね」

「牛女さんともお付き合いがあって」

お静さんはご自身と牛女さんとの関係の子ともお話しました。

「もう何十年にもなるから」

「あの人が六甲に入ってからだね」

「終戦直後からのね」

「もう七十年以上だね」

「思えば長いわ」

「人間の一生位はあるからね」

「妖怪の一生は凄く長いけれど」

人間より遥かにです。

「やっぱり七十年以上となるとね」

「やっぱり長いね」

「ええ、それだけ仲良くしていて」

だからだということです。

「私も牛女さんの歯のことはね」

「気にしていたんだね」

「そうだったのよ、歯のことは大事でしょ」

「健康にとってね」

「だから虫歯になったって聞いて」

それということです。

「凄くね」

「気にしていたんだ」

「そう、私も歯のことは気にしているしお静さん也是如此。」

第十一幕その二

「歯がないと本当に大変だから」

「お静さんのは大丈夫かな」

「今のところはね」

「抜けたりしていないんだね」

「欠けたりもね」

「それは何よりだね」

「だから歯のことは気をつけているから」

それです。

「しっかり歯も磨いているから」

「大丈夫だね」

「今のところはね、ただね」

「これからだね」

「大事にし続けていかないとね」

「健康は一生のことだからね」

「気を付けていくわ、あの格好いい伊達政宗さんもね」

戦国大名のこの人もということです。

「最後は歯が殆どなかったっていうし」

「調べたらね」

先生も伊達政宗さんのことをお話します。

「犬歯以外はね」

「なくなっていたのね」

「そうみたいだよ」

「そうだったのよね」

「歯周病だね」

この病気でというのです。

「歯が抜けてね」

「そうになったのね」

「歯磨きは歯肉についても大事だから」

歯だけでなくです。

「そちらの為にもね」

「磨くことね」

「そう、しっかりと磨いてね」

「奇麗にしないといけないわね」

「虫歯に歯周病に」

「あと歯槽膿漏ね」

「そうした病気になる為にもね」

是非にというのです。

「磨いておくべきだよ」

「いつもね」

「男伊達という言葉が日本にあるけれど」

先生はこのお話もしました。

「これは格好いいという意味だけれど」

「服装とかを決めてね」

「まさに伊達政宗さんから出ているから」

「それだけあの人が恰好よかったのね」

「うん、けれどその人もね」

「歯のことは苦しんだのね」

「歯に何かあると」

そうなる、というのです。

「顔の相にも影響が出るから」

「ダンディな政宗さんには嫌だったでしょうね」

「お年寄りになっていたとしてもね」

「そうよね」

「何しろ歯の殆どがなくなっていたから」

それだけにです。

「余計に辛かっただろうね、しかもあの人は食べものにも凝っていたから」

「自分で料理もしてたのよね」

「ずんだ餅も作ったしね」

このお菓子もということです。

「ほやについてもお話してるしね」

「あの東北の海の幸ね」

「ほやお汁まで食べろって家臣の人達に言ってるんだ」

「そうなのね」

「それで凍り豆腐も作ったらしいけれど」

「こっちじゃ高野豆腐っていうわね」

「あちらの逸話もあるし」

それでということです。

「お料理にも造詣が深かったんだ」

「そんな人が歯がないと」

「辛かっただろうね」

「噛めなくて」

「そうだっただろうね」

「歯周病とは大変ね」

「それにならない為にもね」

是非にということです。

第十一幕その三

「歯磨きはね」

「大事ね」

「そうだよ、お静さんも歯を大事にしているのなら」

「歯磨きもよね」

「やっていってね」

「わかったわ」

先生に笑顔で答えます、そうしてでした。

先生はお静さんが帰ってから今度は論文を書きはじめました、そして三時にティータイムを楽しんでいますと。

動物の皆が先生と一緒に飲みつつ言いました。

「伊達政宗さんもだったんだ」

「歯が抜けていたんだ」

「歯周病になって」

「そうになっていたのね」

「だからね」

それでということです。

「苦しんでいたと思うよ」

「歯のことでは」

「そうだったのね」

「歯がないと噛めないしね」

「当時入れ歯があったとは思えないし」

「それじゃあね」

「うん、今は入れ歯があるけれど」

それでもということです。

「当時はなかったしね」

「やっぱりなかったのね」

「入れ歯が出来るのはずっと後ね」

「そうなのね」

「歯が抜けたらそのままだったよ」

「そうだったというのです。」

「だからルイ十四世もね」

「歯を全部抜かれて」

「ずっと噛めなくなっていた」

「そうだったわね」

「抜けたら終わりだったよ、入れ歯やさし歯もね」

「そうしたものもというのです。」

「かなりの技術なんだよ」

「確かにそうだね」

「それがあったら抜けてもまた噛めるし」

「それでも大きいね」

「入れ歯やさし歯があったら」

「そうなんだ、ただね」

「こうも言った先生でした。」

「やっぱり歯はそのままの方がね」

「いいよね」

「元の歯の方が」

「最初からある方がいい」

「そういうことだね」

「うん、だからまずは歯磨きが大事だよ」

「何といてもというのです。」

「最初からね」

「やっぱり結論はそうだね」

「最初から虫歯にならない」

「歯周病にも歯槽膿漏にもならない」

「そういうことね」

「そうだよ、本当にね」

「だからよね」

ダブダブがティーセットを食べつつ言います、今日は上段にクリームを挟んだビスケット中段にフルーツサンド下段にバウンドケーキという組み合わせです。そして紅茶はオーソドックスにミルクティーです。

「先生は歯磨きを奨励してるのね」

「歯がなくてもお口の中は綺麗に」

ホワイティも言います。

「そう言ってるね」

「お口の中が清潔だとそれだけで健康に影響が出る」

ポリネシアは言いました。

「そうよね」

「だから歯磨き粉を使った方がよくて」

ガブガブも先生のお話を思い出しています。

「何時も清潔であるべきだね」

「歯磨き粉を使って歯磨きしたら健康になったとかね」

トートーはこのお話を出しました。

「先生お話しているしね」

「ちゃんと磨くこと」

今度はジップが言いました。

第十一幕その四

「それこそが大事だね」

「病気は最初からならない」

「そうね」

チープサイドの家族もお話します。

「それが一番で」

「健康管理からだね」

「流石先生だね」

「そうしたことからお話するからね」

オシツオサレツは二つの頭で言いました。

「病気になって患者さんが来て儲かるとか考えないから」

「両親的だよ」

「世の中そんな医者さんもいるみたいだし」

老馬はどうかというお顔で言いました。

「皆病気になって自分の病院に来てくれとかね」

「確かに患者さんが来ないと病院も成り立たないけれど」

チーチーはこの現実から言いました。

「人の病気を願うのはやっぱりよくないよ」

「そう、人の身体のことだね」

先生も言います。

「まず健康であることを願わないとね」

「駄目だよね」

「それが人として正しいね」

「あるべき姿ね」

「本当に」

「そう思うよ、そもそも人は氣をつけていても
それでもというのです。

「どうしても病氣になるしね」

「そうだよね」

「生きているとね」

「絶対に病氣になるよね」

「どんな生きものも」

「うん、人は絶対に老いてね」

そしてというのです。

「衰えていくしね」

「そうだよね」

「どんな生きものもね」

「不老不死なんてなくて」

「歳を取ってね」

「弱っていくわね」

「それと共に病氣にもなるし」

先生はさらにお話しました。

「その時の体調で病氣にもなるし」

「健康な人が風邪ひくしね」

「そんなことだってあるし」

「そう考えるとね」

「普通に病氣になるね」

「そうよね」

「だから人の病氣を願わなくても」

それでもというのです。

「普通にね」

「誰でも病氣になって」

「それで病院に来るから」

「人の病気を願わなくていいね」

「そうよね」

「何故医学があってお医者さんがいるのか」

「そもそもというのです。」

「この世に絶対に必要だからだね」

「そうだよね」

「だからあるし」

「先生だってお医者さんだし」

「お医者さんがいない社会は考えられないね」

「だから病院もあるしね」

「こちらの施設もです。」

「それで人に病気になってもっと患者さんが来いとかね」

「そう思うことはだね」

「よくないね」

「人として」

「そうしたことは」

「そうだよ、そもそも医術は仁術ともいうし」

「この言葉もあるということです。」

「だからね」

「余計によね」

「そうしたことを願うべきじゃないわね」

「お医者さんならね」

「尚更ね」

「そう思うよ」

「先生はバウンドケーキを食べつつ言いました。」

第十一幕その五

「僕はね」

「先生の病院はお客さん来なかったけれどね」
「イギリスのあの病院は」

「それでもだね」

「そう思うのね」

「人として」

「うん」

実際にというのはです。

「それでもね」

「そうだよね」

「それでもそんなことを思わないのが先生ね」

「そうした風に考えるのが」

「本当にね」

「僕は誰の不幸も願わないよ」

動物の皆は先生に言いました。

「決してよね」

「そこも先生のいいところだよ」

「人の不幸を願わないことも」

「そうしたことをしないことも」

「それは間違っているからね」

先生のお考えではです。

「だからだよ」

「そうだよね」

「本当に人の不幸を願うとかね」

「絶対によくないよ」

「というか人を呪わば穴二つ」

「そうも言うしね」

「そう、人の不幸を願うと」

それこそということです。

「そうした人にこそね」

「不幸が起こるね」

「人の不幸を願えば」

「そうすれば自分にね」

「かえって不幸が訪れるよ」

「そうなるよ」

先生は言いました、そしてです。

どうかというお顔になってこうも言いました。

「淀殿走ってるね」

「ああ、大坂の陣のね」

「豊臣秀頼さんのお母さんね」

「そうだったね」

「あの人は徳川家康さんが憎くてね」

それでということです。

「丑の刻参りをしていたそうだよ」

「ああ、あの日本の呪いね」

「呪いの藁人形を使う」

「真夜中にやるっていう」

「あれをしていたの」

「そうみただよ、あれは呪いをかけている姿を見られると自分に呪いがかかるっていうし」

それということです。

「実際淀殿の方がね」

「滅んだね、大坂の陣で」

「そうだったね」

「大坂城の中で自害して」

「それで炎の中に消えたね」

「このお話を見ても思うよ」

本当にということです。

「人を呪えばね」

「まさに穴二つ」

「むしろ自分の方が呪われる」

「そして崇られる」

「そうなるね」

「だから人の不幸を願うと」

そうすればということです。

「かえってね」

「自分が不幸になる」

「まさにね」

「そうなるから」

「よくないね」

「そうだね」

「そんなことをしたらいけないよ」

心から言う先生でした、そしてです。

そうしたお話しながらまた論文を書きました、そのうえで牛女さんの最後の治療の日になりましたが。

治療は無事に終わって先生は牛女さんに言いました。

「これで、です」

「全てです」

「終わりました」
にこりとしての言葉でした。

第十一幕その六

「完治しました」

「それは何よりです」

「では今後は」

「二度とですね」

「虫歯にならない様にしてくれたら」

「歯をしっかりと磨いてそうして」

「歯に悪いものを食べ過ぎないことです」

「このことも大事だということです。」

「ライムジュース等を」

「私はそれで虫歯になりましたし」

「そうです、そうしてくださいと」

「それでということです。」

「もうこれからはです」

「虫歯にならないで済みますね」

「そうなりますので」

「これからですね」

「気をつけて下さいね」

「わかりました、ではお礼ですが」

「牛女さんはにこりと笑ってです。」

「手をぼん、と叩きました。するとお供の人達がです。」

「あるものを出してきました、それは何かといいいますと。」

「これはまた」

「完治させてくれたお礼です」

「牛女さんは笑顔で言いました。」

「お受け取り下さい」

「そうですか」

「齒を治して頂いたので」

「前もこれ以上はと」

「いえ、これは報酬ではなくです」

「違うのですか」

「お礼です」

そちらだということです。

「ですから」

「だからですか」

「お受け取り下さい」

「報酬ではなくお礼ですか」

「そうです、受け取って下さい」

是非にというのです。

「そうされて下さい」

「若し受け取って下さらないと」

従者の人も言ってきます。

「私達も困りますので」

「ですからどうかお受け取り下さい」

「そうして下さい」

「どうかです」

「お受け取り下さい」

「わかりました、しかしまさかです」

先生は従者の人達が差し出したそれを見ながら言いました、それは箱の中にあります。

小判が何段ももなかみたいに重ねられてその束が十はあります、先生はその小判達を見て言うのでした。

「小判を頂けるとは」

「思いませんでした」

「はい」

牛女さんに答えました。

「そうでした」

「そうですか、ですが私達妖怪はです」

「今も小判を使われていますか」

「鑄造して」

そのうえでというのです。

「実は日本政府に内密に認められていますし」

「だからですか」

「はい、お礼としてです」

「受け取っていいのですね」

「そうして下さい」

「そこまで言われるなら」

先生も頷いてでした。

そうしてその小判が入った箱を受け取りました、そうしてです。

今度は牛女さんにお呼ばれして六甲のお屋敷で宴を開いてもらいました、動物の皆にトミーそして王子も一緒ですが。

山海の珍味がある卓上を見て王子は唸りました。

「凄いね、兵庫県の幸が全部ね」

「あるね」

「そうだよね」

「流石に牛肉はないけれど」

牛女さんのお屋敷だけにです、先生は王子に応えました。

「それでもね」

「その他のものがね」

「全部あるね」

「そうだね、鰐も蛸もあればね」

「猪も山芋もあって」

「本当に凄いよ」

「まさに山海の珍味がね」

兵庫県のそれがということです。

第十一幕その七

「揃っているよ」

「そうだね、じゃあね」

「今からね」

「こちらもだね」

「いただこう」

「それじゃあね」

こうお話してでした。

皆で食べます、そして牛女さんも言いました。

「遠慮せず召し上がって下さい」

「だから僕達を招いてくれたんだね」

「はい、そして」

牛女さんは笑顔でさらに言いました。

「お酒もです」

「そちらもですね」

「飲まれて下さい、灘のお酒です」

「何といいますか」

トミーは明石で獲れた鯛のお刺身を見ながら言いました、その他にも鮎の塩焼きもあります。どちらも物凄く美味しそうです。

「本当に山海の珍味が揃っていて」

「それで、ですね」

「凄いですね、鯛に鮎が一緒にあるなんて」

「こんなことはね」

先生も言います。

「海と川がどっちもある」

「そうした地域ならではのですね」

「そうだね、海草があって」

そちらのお料理もあります。

「そして茸もある」

「まさに山海の珍味がですね」

「揃っているよ、特にね」

先生は笑顔でさらにお話しました。

「天然の椎茸とこのわたしはね」

「このわたしは海鼠の内臓ですね」

「どっちもあるのはね」

「凄いことですね」

「天然の椎茸なんて滅多にないからね」

だからだということです。

「これを食べられるなんて凄いことだよ」

「それにこのわたしとなると」

「余計にね、では食べようね」

「それでは」

「それでなのですが」

牛女さんも言ってきました、見れば牛女さんは和風サラダやキャベツの酢漬けといったものをご自身の前に置いています。

「これからですか」

「何かあればですか」

「診察をお願いします」

こう先生にお願いするのです。

「宜しくお願いします」

「僕でよければ」

「はい、ただ」

「ただといいますと」

「私だけでなく」

牛女さんに限らずというのはです。

「神戸の妖怪に何かあれば」

「その時にですね」

「宜しいでしょうか」

「はい」

先生は牛女さんににこりと笑って答えました。

「それでは」

「その様をお願いします」

「僕は困っていればです」

「人も生きものも妖怪もですね」

「関係ないですから」

だからだということです。

「差別しません」

「だからですね」

「診させて頂いて」

そうしてということです。

「治療も手術もです」

「お薬もですね」

「その様にさせて頂きます、ただ」

「ただといいますと」

「いえ、実は日本に車で妖怪の身体のこととは詳しくなかったです」

先生は鰐のあらいを食べつつお話しました。

第十一幕その八

「そうでした」

「そうだったのですか」

「ですが日本の漫画家さんが出している妖怪の図鑑の様な本を読みました」

「あっ、妖怪博士さんですね」

牛女さんは漫画家さんと聞いてすぐにわかりました。

「あの方ですね」

「妖怪博士さんですか」

「ずっと妖怪の漫画を描いておられ」

「物凄く妖怪に詳しい方でしたね」

「それでお亡くなりになって」

そしてということです。

「今は妖怪になられて」

「妖怪博士にですか」

「そう呼ばれています、お姿はそのままです」

「そうなのですね」

「あまりにも妖怪がお好きで」

それでということです。

「人間としての一生を終えますと」

「妖怪になられましたか」

「そうなられました」

「今はですか」

「私達の素晴らしいお友達です」

「それは何よりですね」

「他にお化け先生もおられます」

牛女さんは海草とレタス、和風ドレッシングで味付けされたそれを食べながらそのうえでお話しました。

「その方も」

「その方も元は人間ですか」

「はい、明治から昭和にかけて活躍された文豪さんで」

「妖怪でそうした方ですと」

先生は微笑んで言いました。

「泉鏡花さんですか」

「わかりですか」

「はい、あの人もそうでしたね」

先生は牛女さんに笑顔で応えました。

「妖怪が好きでしたね」

「そして多くの作品を残されましたね」

「だからですね」

「人としての一生を終えられて」

そしてということです。

「今はです」

「妖怪としてですか」

「いつも執筆しておられます」

「多作な方でしたし」

「そうして楽しんでおられます、湯豆腐もお好きですし」

「生ものは今もですか」

「非常に清潔な方です」

妖怪になってもということです。

「左様です」

「そうなのですね」

「はい、それで妖怪博士ですね」

「本を読みまして」

そうしてというのです。

「僕も今ではです」

「妖怪の身体のことをご存知ですか」

「そうなっています」

「では診察もですね」

「出来ます、妖怪さんごとに」

「それは何よりですね」

「まさかそんな本がこの世にあるとは」

先生は豆腐料理を食べつつ言いました、こちらも素晴らしい美味しさです。

「思いませんでした」

「そうでしたか」

「はい、凄い本ですね」

「そして凄い漫画家さんですね」

「そう思います、ただ妖怪の漫画を描かれるだけでなく」

「妖怪に実に親しんでおられて」

「その生態のことまで、ですね」

そうしたことまでというのです。

「調べておられたんですね」

「そうでした」

「本当の意味での妖怪に親しんでおられた」

「そうした方です」

「だから今は妖怪になられていますか」

「妖怪になられて凄くです」

牛女さんは笑顔でお話しました。

第十一幕その九

「喜んでおられます」

「そうでしょね」

「はい、妖怪になれてよかったと」

「それは何よりですね」

「そして朝は寢床で」

「夜は墓場で、ですね」

「そうされています」

そうした生活を過ごしているということです。

「幸せに」

「では博士にお伝えしてくれますか」

「何とでしょうか」

「僕は博士の本に心から感謝していると」

「私達の診察が出来てですね」

「そして日本ひいては世界の妖怪のことを広く知れたので」

このこともあってというのです。

「それで、です」

「そうですか、では」

「お伝え願えるでしょうか」

「喜んで」

牛女さんはここでもにこりと笑って答えました。

「そうさせて頂きます」

「それでは願います」

「わかりました、ただです」

「ただといいますと」

「先生は日本語がご堪能ですね」

牛女さんは山菜の天麩羅を食べている先生に言いました、見れば天麩羅は山菜の他には海老や鱈、烏賊もあります。

「お話も」

「はい、実は語学はかなり得意で」

「動物の言葉も理解出来てですね」

「人の言語もです」

こちらもということです。

「この通りです」

「日本語もですね」

「読み書きが出来て」

そうしてということです。

「喋ることが出来ます、特にです」

「特にといいますと」

「最近日本にいますので」

だからだということです。

「頭の中で考える言葉もです」

「日本語ですか」

「そうです」

まさにということです。

「そうなっています」

「そうですか」

「はい、そうして」

それでもということです。

「考えています」

「そうですか」

「はい、ですから」

それでということです。

「かなり日本語に馴染んでいます」

「そこまで、ですか」

「最近」

今度は蛸の酢のものを食べつつ牛女さんに言いました。

「そうなっています」

「そうですか」

「僕も最近」

トミーは山芋のを切って梅であえたものを食べつつ言いました。

「頭の中で考える言葉は日本語です」

「僕もだよ」

王子は猪の味噌煮込みを食べつつ言いました。

「そうだよ」

「そうだったね」

「母国の言葉と英語を使っていたけれど」

頭の中の思考に使う言葉はです。

「今じゃね」

「日本語だね」

「そうなっているよ」

「そうしたらだよね」

「何か日本人の考えもわかってきたかな」

「そうだよね」

「言葉って不思議だよね」

老馬が言ってきました。

「同じことを考えてもそれに使う言語で出す結論が違ったりするんだよね」

「同じ人がそうしてもね」

「そうなるんだよね」
オシツオサレツも言います。

第十一幕その十

「そうなるからね」

「不思議だよね」

「先生もなのかな」

「先生色々な言語知ってて読み書きもお話も出来るし
チープサイドの家族の言います。」

「それだとね」

「先生もなのかな」

「じゃあ先生実際にそうしてみる？」

トートーは先生に言いました。

「同じことをそれぞれの言語で考えてみる？」

「これって凄い実験かも知れないね」

チーチーはトートーの言葉に頷きました。

「若しかして」

「そうね、じゃあね」

ポリネシアも言います。

「それでやってみる？」

「そうね、考えることはね」

ダブダブが言うことはといいますと。

「日笠さんのことね」

「日笠さんが先生のことをどう思っているか」

ジップは先生に言いました。

「それでどうかな」

「じゃあ先生早速考えてみて」

ガブガブも先生に言います。

「色々な言語でね」

「面白いね、英語に日本語に中国語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、アラビア語、タイ語、ベトナム語、トルコ語と色々な言語でね」

王子も楽しそうに言います、海鼠を食べつつ。

「やってみて」

「どうして日笠さんかわからないけれど」

先生は皆の言葉にきょとんとして言いました。

「それじゃあやってみるね」

「絶対に何かの言語で真実がわかりますよ」

トミーも言います、お酒を飲みながら。

「きっと」

「そうかな、じゃあね」

「やってみてください」

「それじゃあね」

こうしてでした。

先生は実際に色々な言語で日笠さんが先生についてどう思っているのか考えてみました、そうして皆に言いました。

「うん、僕をお友達と認めてくれているね」

「えっ、全部の言語で考えてそれ？」

王子は思わず動きが止まりました。

「その答え？」

「そうだよ」

「そうなるんだ」

「そうだったけれど」

「本当に全部の言語でなんだね」

先生にさらに尋ねました、

「そうなんだね」

「そうだけれど」

「あの、先生は」

牛女さんも言ってきました。

「まさかと思いますが」

「これがね」

「実は、なんですよ」

王子とトミーが牛女さんにお話します。

「恋愛経験は全くで」

「これまでね」

「それでご自身ではです」

「全くもてないって思ってるんだ」

「やっぱりそうですか」

牛女さんは二人の言葉に頷きました。

「先生は」

「僕はもてないですよ」

先生も言います。

「本当に」

「そう思われますか」

「生まれてから運動神経は全くなくて」

そしてということです。

「女性にもです」

「縁がないのですか」

「全く、ですがお友達は沢山いてくれるので」

「その人もですか」

「はい、日笠さんもです」

この人もということです。

第十一幕その十一

「お友達です」

「そうですか」

「はい、ですから」

それでというのです。

「僕は一生独身かと」

「それでもいいのですか」

「大勢のお友達がいてくれるので」

「寂しくないですか」

「僕は家事も出来ませんが」

それでもというのです。

「動物の皆がいてくれるので」

「そうですか、ですが」

「それでもですか」

「一度です」

牛女さんはお酒を飲んでお話している先生に言いました。

「ご自身が女性にもてるとです」

「僕がですか」

「思われては」

こう言うのでした。

「いいかと」

「僕が女性にですか」

「その様に」

「いえ、この外見で運動神経も全くないですから」

「もてないですか」

「お洒落も無縁ですし」

いつものスーツ姿で言います、折り目正しい恰好ですがお洒落とは確かに違います。

「それにです」

「それにですか」

「社交的でもないですからだからだということです。」

「女性とはです」

「そうですか、ですが」

牛女さんは先生に言いました。

「人は心ですね」

「はい、そうです」

「外見ではないですね」

「まさにそうです」

「ではです」

それならということです。

「先生もです」

「女性にもてると」

「そうです」

まさにということです。

「私はそう思います」

「いえ、本当に僕はです」

「もてないですか」

「僕に最も縁がないものですよ」

「恋愛は」

「そして恋人は」

そうした人ということです。

「ですから残念ですが」

「独身のままですか」

「一生。それにです」

「それにとは」

「僕は沢山のお友達がいて学問を好きなだけ出来ていますし健康で美味しいものもいつも口にしています」

だからだということです。

第十一幕その十二

「充分過ぎる程幸せです」

「それで、ですか」

「これ以上の幸せは」

「あれっ、先生幸せには限りがないと」

「そうですがもう満足していますので」

「もう恋愛については」

「縁がなくても」

「それでもというのです。」

「いいのです」

「思われていますか」

「はい」

「実際にというのです。」

「満足していますので」

「いいですか」

「それでどの言語で考えても」

「日笠さんのことをです。」

「あの人は僕をお友達とってくれています」

「わかりました」

「牛女さんは先生に謹んで答えました。」

「どの言語でも有り得ないと思って考えますと結論は同じですね」

「そうなのですか」

「そのことがわかりました」

「こう先生に言うのでした。」

「この度は」

「そうですか」

「ただ。先生はもっと幸せを求められても」

「いいですか」

「本当に幸せは際限はないですから」

だからだということです。

「それで、です」

「僕もですか」

「恋愛を求められては」

「もてない僕がですか」

「いえ、そこをです」

「そうですね、まあ妹にお話してみます」

先生はそれならと言います、ですが。

ご自身に恋愛について何か縁があるとは全く思わないのでした、牛女さんも先生のそんなところには呆れてしまいました。ですが宴は続き皆兵庫県の山海の珍味を楽しんでお酒も飲んでそうしてでした。

すっかり満足したところで牛女さんは皆にお話しました。

「では少し落ち着いたらお風呂はどうでしょうか」

「お風呂ですか」

「はい、そちらに入られて」

そうしてということです。

「すっきりされますか」

「そうして宜しいですか」

「はい、どうぞ」

「それでは」

「お風呂を楽しまれて」

そうしてということです。

「お泊りになって下さい」

「泊まるのは流石に」

「ではお風呂を」

「はい、楽しませて頂きます」

先生も他の皆も牛女さんのお誘いに頷いてでした、そのうえで。

檜のお風呂も楽しみました、そうしてからお家に帰って休みました。

第十二幕その一

第十二幕 牛女さんのプレゼ

ント

牛女さんの治療と宴それにお風呂を楽しんで、でした。先生も他の皆もお家に帰って休みました。そして翌朝。

先生は朝ご飯を食べながら言いました。

「物凄いいもてなしを受けたね」

「本当にね」

「兵庫県の山海の珍味を食べてね」

「最高のお酒も飲んで」

「檜のお風呂にも入って」

「最高だったよ」

「そうだったね、牛女さんの歯も完治したし」

このこともあってということです。

「本当によかったよ」

「全くだね」

「しかも僕達今すっきりしているし」

「昨日お酒をかなり飲んだのに」

「それでもね」

「お酒を飲んでもね」

それでもというのです。

「少し時間をおいてお風呂に入ったからね」

「すっきりしたね」

「お酒が抜けて」

「そうよね」

「そしてお家に帰って経口補給水を飲んだね」

このこともお話するのです。

「そうだったね」

「それもよかったんだよね」

「あのお水は身体が疲れている時にいいっていうけれど」

「お酒を飲んだ時もだね」

「いいのね」

「そう、それも飲んだからね」

このこともあってというのです。

「僕達は今身体がすっきりしているんだ」

「二日酔いじゃなくて」

「普通ならあれだけ飲んだら今頃二日酔いだけれど」

「それがないのね」

「後でお風呂に入ってそのお水も飲んだから」

「そうだよ、それでね」

だからだということです。

「すっきりしているんだ、じゃあこのままね」

「すっきりしたままね」

「学校に行って」

「今日も学問ね」

「そちらに励むのね」

「是非ね、それとね」

先生は朝ご飯のお味噌汁を口にしつつ言います、お豆腐とお葱のお味噌汁がこれまた実に美味しいです。おかずはめぎしに納豆、海苔にお漬けものです。

「またサラが来るね」

「はい、来週に」

トミーが答えました。

「来日されます」

「そうだね」

「ご主人と一緒に」

「いつも通りだね」

「サラさんも楽しみにされています」

「お仕事で来てもだね」

「日本はとても素敵だと言われて」

それでというのです。

「いつもです」

「楽しみにしているんだね」

「そうです」

「それは何よりだね」

「日本の食べ物」

「そちらもだね」

「今度は河豚を食べたいと言われています」

そうだというのです。

「ですから大阪に行かれるとのこと」

「大阪は河豚も有名だしね」

「そうですよね」

「いいと思うよ、有名なお店も多いし」

先生はトミーに笑顔でお話しました。

「僕もお店を紹介するよ」

「それはいいことですね」

「うん、それじゃあね」

「そうしたお店も紹介しますね」

「河豚も是非食べないとね」

「日本に来たら」

「何度か来ているし」

それならということです。

第十二幕その二

「尚更だよ」

「そうですね、では」

「サラにいいお店を紹介しよう」

「それがいいですね」

トミーはご飯に納豆をかけながら先生のお話に笑顔で頷きました、
そうして朝ご飯を食べてからです。

皆歯を磨いてそうしてから登校しました、先生はこの日はまず講
義を行ってそれから研究室に戻ってです。

それから今度は論文を書きましたが動物の皆はその先生に言いま
した。

「牛女さんも言ってたけれど」

「先生恋愛に無縁とかね」

「自分で思い込んでるよ」

「その思い込みは捨てないと」

「そうした方がいいわよ」

「いや、だからいつも言ってるけれど」

先生は皆に穏やかな口調で答えました。

「本当にだよ」

「恋愛には無縁だね」

「先生は」

「運動神経と恋愛については」

「全く関係がないっていうのね」

「そうだよ。だからね」

自分ではそうだと思っているからだということです。

「本当にだよ」

「恋愛には縁がなくて」

「結婚ともそう」

「そう言うのね」

「先生は」

「結局あらゆる言語で考えたよ」

日笠さんが自分をどう思っているかです。

「けれどね」

「お友達なのね」

「日笠さんは」

「そうなんだね」

「うん、人間の主な言語をあらかじめ使ったけれど」

その思考にです。

「全部結論は同じだったしね、君達それぞれの言語でもお風呂場で考えたけれど」

「答えは同じだったんだ」

「日笠さんはお友達」

「結論はそれだけだったの」

「そうだったよ」

実際にということです。

「本当にね、もうこうなったらね」

「結論は全部同じだったから」

「考えるまでもない」

「そうだっていうの」

「本当に同じ人が同じことを考えても」

それでもというのです。

「結論が違っていたりするけれど」

「この件についてはなの」

「先生は結論が同じだったから」

「それでなの」

「もう考えないの」

「うん、少なくとも当分の間はね」

暫くはということです。

「そうするよ」

「やれやれだね」

「本当にね」

オシツオサレツもこう言うばかりでした。

「先入観や偏見のない先生でも」

「自分自身のこのことについては違うから」

「完全に偏見のない人はいないっていうけれど」

ダブダブも言いました。

「先生もそうね」

「何で自分自身のそのことにはそうなのかな」

ホワイティも首を傾げさせて言いました。

「本当に」

「このことだけはね」

ジップもやれやれとなっています。

「どうにもならないね」

「そりゃ自分がもてるとか勝手に思い込むよりはいいけれど」

「それでもよね」

チープサイドの家族も言いました。

第十二幕その三

「先生みたいにはじまる前からっていうのは」

「どうにもね」

「僕達もいつも言ってるけれど」

トートーの口調は困ったものになっています。

「先生最初からそうだって思ったら駄目よ」

「学問にはそれが一番駄目っていつも言ってるのに」
ポリネシアも言います。

「先生自身にそうってどうなのよ」

「それじゃあ駄目だから」

老馬も先生に言いました。

「確かに人種や民族や宗教への偏見よりずっとましでもね」

「やっぱり偏見はよくないよ」

チーチーも言います。

「先生にとっても」

「そう、それだけ損をするからね」

最後にガブガブが言いました。

「先入観や偏見に凝り固まっていると」

「しかし生まれてからずっと女性に縁がない僕がね」

プレゼントもラブレターも告白も一切ないからというのです。

「そんなね」

「だから先生の性格だとね」

「紳士で穏やかで公平でね」

「優しくて絶対に怒らない」

「そんな人だから」

「どうかな、僕は本当にね」

ご自身が思われるにはです。

「もてたことがないからね」

「そうした考えを捨ててね」

「それで周り見てみたら？」

「皆が言う通りにね」

「僕達が言う様に」

「そうしていいのかな、まあそうしようって思ったら」

その時はというのです。

「やってみるよ」

「それじゃあね」

「そういうことでね」

「そのそうしようっていう時が何時かだけれど」

「それでもね」

「その時が来ればね」

「そういうことでね」

先生は皆に応えてです、そうしてでした。

皆が煎れてくれた烏龍茶を飲みました、そうして飲みながら論文を書いてそのうえで、なのでした。

先生はその烏龍茶についてこうも言いました。

「ううん、このお茶もいいよね」

「烏龍茶もだよね」

「先生好きだね」

「だからこのお茶もだね」

「楽しんだのね」

「そうだよ、それとね」

さらに言う先生でした。

「お茶を飲むと気分転換になってね」

「しかも目が覚める」

「その効果もあるね」

「お茶は」

「だからいいのよね」

「ビタミンもあるしね」

栄養もあるからだということです。

「それでね」

「飲むのならよね」

「お茶がいいのね」

「そうね」

「それじゃあね」

「今もお茶を飲めてよかったよ、ただ」

こうも言った先生でした。

「僕は最近コーヒーも飲むしお水もね」

「嫌いじゃないよね」

「決して」

「そうよね」

「お水も」

「そうだよ、だからね」

それでということです。

第十二幕その四

「スーパーやコンビニであるね」

「色々なお水ね」

「あれを飲むのも好きね」

「そうだね」

「しかも色々あるからね」

「そちらも楽しめるよ」

こう言ってます、先生は烏龍茶をもう一杯のみました、それに対してこんなことも言いました。

「あとコンビニやスーパーに行くとお茶やお水だけじゃないね」

「他にもあるよね」

「ジュースもあるし」

「炭酸飲料もあるし」

「何かとあるね」

「だから何を飲むか悩む時もあるよ」

コンビニやスーパーに行ったその時にです。

「何を買って飲むかね」

「あるね、そうした時」

「時々でもね」

「飲みたいものが一杯あって」

「それでね」

「そうした時もあるから」

それでということです。

「困る時もあるね」

「確かに」

「本当にね」

「ジュースとか炭酸飲料もあって」

「何を飲むかね」

「迷う時があるね、けれど僕は悩んでも」

「それでもというのです。

「それは少しの間で」

「それでだね」

「結論はすぐに出て」

「飲みたいものを飲む」

「そうしてるね」

「僕は長く迷うことはないね」

「自分自身のこのことも言うのでした。

「どうも」

「そうよね」

「先生の場合は」

「学問でもね」

「迷ってもね」

「その時間は少しね」

「すぐに決めて動かないと危ない時も多かったからね」

「先生が来日するまでの数多くの冒険や旅行ではです。

「その中でね」

「備わってきたね」

「決断の速さも」

「迷わないことも」

「そうよね」

「そう、だからね」

「それでいうのです。

「今もね、そうした時もね」

「迷わないね」

「それで決める」

「そうしているね」

「うん、決めて」

そしてということです。

「飲みものなら買ってね」

「それで飲む」

「そうしているね」

「いつも」

「コンビニやスーパーでも」

「そうだよ」

こう言ってまた烏龍茶を飲みます、それからまた論文を書きました。そして今書いている論文を書いてからです。

今度は牛についての論文を書きますが書きはじめてから皆に言いました。

「いや、今度は牛の論文だけれど」

「どうしたの？」

「牛さんの論文を書いて」

「どうかしたの？」

「牛女さんのことを思い出したよ」

この人のことをというのです。

「そうだったよ」

「ああ、牛さんだから」

「それでだね」

「成程ね」

「それは当然のことだね」

「うん、それでね」
さらに言う先生でした。

第十二幕その五

「牛女さんはお顔を見るとやっぱり和牛だね」

「ホルスタインじゃないね」

「それはわかるよ」

「お顔の模様が違うから」

「それでね」

「よくわかったよ、それとね」

さらに言うのでした。

「やっぱりあの人は件と関係があるね」

「あの牛の身体で人の頭の」

「あの妖怪さんとだね」

「関係があるんだね」

「丁度逆だし」

「確かな証拠はないけれど」

それでもというのです。

「その逆だね」

「そうそう、件と牛女さんはね」

「見事な位ね」

「そうなってるね」

「そうなる」と

「関係があると思うのが当然だね」

「だから昔の日本の偉い人達も」

この人達もということです。

「牛女さんが予言をすると思ってね」

「それでよね」

「牛女さんを匿っていた」

「そうだったんだね」

「そうだと思うよ、けれど今のところ」

先生は考えるお顔で言いました。

「牛女さんは予言はしないね」

「というかあの人予言するの？」

「その件みたいに」

「それはどうなの？」

「するの？」

「それがわからないんだ」

どうにもというのです。

「僕にもね」

「そうなの」

「先生にもわからないの」

「そのことは」

「うん、件と関係があると思うけれど」

それでもというのです。

「確かな証拠もないしね」

「それでなのね」

「先生もどうとも言えない」

「牛女さんが予言をするかどうか」

「そのことは」

「件は生まれてすぐに予言をするんだ」

先生はこのこともお話しました。

「それで予言をしたら死ぬんだ」

「もう生まれてすぐに予言をして」

「それで死ぬの」

「そうなるの」

「牛女さんは生まれてすぐに予言をしなかったから匿われていたと思うし」

それでということです。

「今もしていないから」

「じゃあ予言はしないの」

「牛女さんの場合は」

「そうなんだ」

「そうかな、牛女さんは牛女さんという妖怪で
それでというのです。」

「件と関係があってもね」

「また違うんだね」

「予言はしないかも知れないんだ」

「件と違って」

「そうじゃないかな、あとね」

先生は皆にさらにお話しました。

「用件とかくだんの件とか言うね、日本では」

「うん、言うね」

「実際にね」

「結構使う言葉よね」

「そうよね」

「この『件』という文字は『くだん』とも読むんだ」
こうお話しました。

第十二幕その六

「そして人に牛と書くね」

「人偏でね」

「そう書くね」

「ってことはだね」

「件って漢字は『くだん』から来たんだ」

「そうだったの」

「そう、どうも件は実在していて」

「そしてということです。」

「それでね」

「漢字にもなっていた」

「そうだったんだ」

「実は」

「うん、第二次世界大戦の時も出て来て」

「そうしてということです。」

「戦争を予言したとも言われているしね」

「ううん、滅多に出なくて」

「知名度はそんなになって思っていたら」

「その実はだね」

「結構有名な妖怪だね」

「そうだよ、件という文字は『くだん』からなってね」

「先生は皆にお茶を飲みながらお話します。」

「使われているんだ」

「じゃあ予言の意味もあるんだね」

「件って言葉には」

「『くだん』が予言するから」

「そうなるんだ」

「そうも考えていいね、『くだん』は結構深い妖怪だね」
先生はしみじみとして言いました。

「生まれてすぐに死んでしまうことは可哀想だけれど」

「予言してすぐに死ぬことはね」

「確かに可哀想だよ」

「長生きしたいだろうに」

「それが出来ないことは」

「そうも思うよ」

「こう皆にお話しました。」

「僕はね」

「そうだね」

「そう思うと牛女さんは戦争前から生きていて」

「今も生きていられるからね」

「幸せだよ」

「そうだね」

「うん、僕もそう思うよ」

先生は皆にしみじみとした口調でお話しました、そうしてです。

論文を書いて講義をして学問に励みお食事とお酒、お風呂そして
皆と一緒に時間を楽しむ中で数日過ごす。

お昼休みに牛女さんがお供の人達を連れてやって来てでした。先生
生に対してこうしたことを言ってきました。

「今回は歯のことは別にです」

「来られたのですか」

「はい、お渡ししたいものがありました」

「こう先生に言いました。」

「まことに」

「といいますと」

「こちらです」

こう言ってでした、牛女さんが出したものは。

お守りでした、先生にそれを出して言うのでした。

「これを先生にと思いまして」

「お守りですか」

「はい、神社の」

「そうですね、日本の神社の」

「宜しければ持っていて下さい」

そのお守りを差し出して先生に言うのでした。

「どうか」

「はい、これは何のお守りでしょうか」

「縁結びのお守りです」

「縁結びのですか」

「はい」

そうだということです。

「それをです」

「持って来てくれたんですか」

「そうです、この前のお話で」

「ええと、僕は恋愛に無縁という」

「はい、そのお話を受けまして」

そうしてということです。

第十二幕その七

「先生に良縁がある様に」

「そう思われてですか」

「神社で宮司さんに特別に作ってもらって
そうしてというのです。」

「頂いてです」

「僕にですか」

「左様です」

「こう先生に言うのでした。」

「この度は」

「そうですか」

「はい、どうか先生にです」

是非にというのです。

「そう思いました」

「そうですか」

「お受け取り下さい」

「それでは」

「もう先生が気付かれなくても」

牛女さんのお言葉は真摯なものでした。

「良縁が舞い込んできて」

「そうしてですか」

「先生に生涯の伴侶が訪れる様に」

その為にというのです。

「そう思いました」

「有り難うございます」

「先生はもっと自信を持つべきだと思いますが」
それでもと言うのでした。

「もうです」

「それでもですか」

「それがどうしても出来ないなら」

「そうですか」

「はい、それでは」

「これからですね」

「先生に良縁が訪れる様に」

「このお守りの力で、ですね」

「先生は笑顔で応えました。」

「それでは」

「先生はキリスト教徒ですが」

「国教会です」

「ですが宜しいですね」

「信仰も日本人のものになりました」

「先生は牛女さんに笑顔で答えました。」

「今ではキリスト教徒ですが」

「神社やお寺にもですね」

「普通にお参りして手を合わせています」

「そしてお守りもですね」

「問題ないのです」

「その様にといいのです。」

「考えています」

「それでは」

「はい、有り難く受け取らせて頂きます」

「それでは、あとです」

牛女さんは先生ににこりとしてこうもお話しました。

「ライムジュースを飲む量はかなり減らしました」

「そうですか」

「それで今はお茶をよく飲んでいます」

「お茶をですか」

「お抹茶に麦茶、梅茶にほうじ茶とです」

「色々飲まれていますか」

「はい」

そうしているということです。

「今では」

「お砂糖は入れていないですね」

「日本の飲み方です」

「それはいいですね、お茶は美味しいですし」

「ビタミン補給にもなってですね」

「歯にも問題はないです」

お砂糖を入れないと、ということです。

「糖分も酸味もないので」

「左様ですね」

「どんどん飲まれて下さい」

そのお茶をというのです。

「そうされて下さい」

「それでは」

牛女さんは笑顔で頷きました、そしてです。

牛女さんは先生とこの場では紅茶を楽しく飲んで色々なお話を楽しみました、先生はミルクティーでしたが牛女さんはストレートティーでした。

それを飲んで、です。そのうえで。

第十二幕その八

牛女さんは先生にまたお会いしようと言っていて、お供の人達と共に研究室を後にしました。そしてです。

その後で、です。動物の皆は先生に言いました。

「お守りの力期待してるから」

「僕達としてはね」

「先生が気付かなくてもね」

「そのお守りがどうかしてくれる」

「そのことをね」

「心から願うよ」

こう先生に言うのでした。

「本当にね」

「先生は本当に気付かないから」

「だからね」

「もうだよ」

「そのお守りが先生に良縁をもたらしてくれる」

「僕達は心から願うよ」

「ううん、僕はね」

先生はその皆に困ったお顔で返しました。

「本当に恋愛そしてね」

「結婚とはだよ」

「縁がない」

「それこそ何があってもだね」

「先生が誰かと結婚するなんてね」

「絶対になんていうのね」

「若い時占い師の人に晩婚って言われたけれど」
それでもというのです。
「他のことも占ってもらってそうしたことは当たってるけれど」
「結婚はだね」
「それはなのね」
「ないっていうのね」
「そうなんだね」
「これだけはないから」
先生は笑って言いました。
「本当にね」
「そう言うけれどね」
「多分その占いはそのことも当たってるよ」
「先生は晩婚っていうのは」
「絶対に当たるよ」
「ううん、僕と結婚ね」
それはということです。
「やっぱりないよ」
「というか先生が全然気付かないから」
ホワイティが困ったお顔で言いました。
「牛女さんもお守りくれたんだよ」
「牛女さんも先生がいい人ってわかったから」
「今度はポリネシアが言いました。」
「縁結びのお守りをくれたんだよ」
「だから先生それ先入観だよ」
ガブガブは注意する様に言いました。
「本当にね」
「自分は何があってももてないとか」

ダブダブはガブガブに続きました。

「そう考えることはよくないわよ」

「だから要点は性格」

「それじゃない」

オシツオサレツも二つの頭で言います。

「幾らお顔がとくて華やかでもね」

「性格に問題があると駄目だし」

「性格って顔にも出るしね」

「そうそう、人相にね」

チープサイドの家族はそちらにお話しました。

「それで悪いお顔になるから」

「一緒だよ」

「先生凄く穏やかで優しいお顔してるよ」

老馬は先生の人相のお話をしました。

「そのお顔でわかる人はわかるよ」

「そのお顔ならね」

今度はトートーが言いました。

「全く問題ないよ」

「そもそも人を外見だけで判断する人は駄目だよ」

チーチーはきっぱりと言い切りました。

「そんな人は先生に声をかけなくていいから」

「そうそう、僕達も見てるから」

最後にジップが言いました。

「そうした人のこともね」

「じゃあ僕はいい人にもてるのかな」

先生は皆のお話を聞いて言いました。

第十二幕その九

「つまりは」

「その通りだよ」

「先生は素晴らしい人にもてるよ」

「先生の人間性をわかっている」

「そうした人にね」

「そうだといいいけれどね、しかし晩婚といっても
それでもというのです。

「何時かな」

「それはわからないけれど」

「それでもね」

「絶対に結婚出来るから」

「安心してね」

「そうだといいいけれどね、しかしね」

「さらに言う先生でした。

「僕は本当に色々なお友達がいてくれているね」

「牛女さんだってお友達になってくれたし」

「そうよね」

「先生みたいにお友達がいる人なんて」

「そうはいないわよ」

「実際にね」

「うん、だからね」

「それでというのです。

「僕は幸せ者だよ、心から信頼できるお友達に囲まれているから」

「僕は先生といつも一緒だよ」

「何があってもね」

「先生を裏切ったり見捨てたりしないから」

「安心してね」

「裏切るとか見捨てたりとか」

皆はこうも言いました。

「友達じゃないよ」

「特にその人が辛い時にそうするとか」

「そんなの最初から友達じゃないよ」

「ただその人を利用している」

「それだけの人だよ」

「そうだね、僕も思うよ」

その様にということです。

「自分が都合が悪くなったら人を見捨てるとか裏切るとかする人はね」

「そうだよね」

「そんな人信用出来ないよ」

「絶対に近寄っても駄目よ」

「若しそんな人が付き合っても」

「僕もそう思うよ、人を利用するだけの人で」

それでということです。

「若しね」

「そんな人が近付いてもね」

「信用したらいけないね」

「ましてお友達になるとか」

「論外だね」

「そうした人は犯罪を犯していなくても悪人だから」

自分の都合が悪くなると人を裏切ったり見捨てたりする様な人は

です。

「それも平気でする様な人はね」

「迷わずにね」

「普通の人は迷うよね」

「自分のことがどうしても気になって」

「それでね」

「自分もまきこまれると大変って思って」

「人は弱いものだからね」

先生はこうも言いました。

「迷ってどうしようかって思ってたね」

「そうだよね」

「やっぱり迷ってたね」

「それで仕方なくって場合もあるけれど」

「平気で即座にっていう人はね」

「こうした人は結局自分だけで」

そうした人です。

「普通に悪人だから」

「近寄ったらいけないね」

「何かあったらすぐに裏切って見捨てて」

「自分だけ安全な場所に逃げるから」

「お友達になったらいけないね」

「犯罪を犯していなくてもね」

それでもということです。

第十二幕その十

「そうした人は悪人だからね」

「そんな人たら僕達が近寄せないから」

「先生にね」

「先生は悪人には利用させないよ」

「絶対にね」

「皆はそうだね、僕をこれまで何があっても助けてくれたし」

「これまでの数多くの旅や冒険の中で、です。」

「だからね」

「先生もそうだしね」

「何があっても裏切らないから」

「僕達を裏切らないし」

「他の誰もね」

「そうしたことは何があってもよくないから」

人を自分の都合で裏切ったり見捨てたりすることはです。

「しないよ、例えばその人と一緒にいて自分が何か言われたり意地悪をされる」

「それでその人を裏切ったら」

「最初からお友達じゃないよ」

「本当にただ利用しているだけ」

「それだけね」

「こんな人には絶対になりたくないし」

先生としてはです。

「というかこんな人に本当のお友達は出来ないよ」

「類は友を呼ぶでね」

「いい人同士が集まってね」

「悪い人同士が集まるね」

「世の中っていいのは」

「そうだよ、花には蝶が寄るものだよ」

それが世の中だということです。

「そしてその逆もあるってことだよ」

「本当にいい人同士が集まって」

「悪い人同士が集まる」

「それが世の中よね」

「だからそうした人にはね」

「自分と同じ様な平気で人を裏切って見捨てる人が周りに集まるよ」
そうなるということです。

「そうでない人はそうした人に出会うことがあっても」

「全体的にいい人達に出会える」

「そしてそうした人達と一緒にになれる」

「そうなるね」

「じゃあ先生やっぱり」

何といってもとです、皆はあらためて言いました。

「いい人が来てくれて」

「そして結婚してね」

「いい家庭を築くよ」

「そうなるよ」

「周りにトミーも王子もいて」

「僕達もいたうえでね」

「そうなるかな、本当に」

先生だけはどう言います、本当に恋愛と結婚はご自身には無縁と
思っているからです。ですがそれでもでした。

皆はあくまで言います、そして。

サラもです、来日してきた時に先生のお家です。先生に言いました。

「兄さん、お話は今全部聞いたわ」

「牛女さんのことを信じてくれるね」

「私妖怪も要請も否定しないわ」

それはということです。

「絶対にね」

「それはいいことだね」

「ええ、けれどね」

「それでもなんだ」

「牛女さんがそう言うこともね」

お守りのことも言うのでした。

「当然よ」

「僕の結婚のことだね」

「そうよ、兄さんは絶対にね」

「結婚出来るかな」

「出来ない筈がないわ」

それこそということです。

「本当にね」

「そうかな」

「そうよ、だって紳士で人間性がよくて」

それにということです。

第十二幕その十一

「お仕事もあって教養豊かだから」

「この顔とスタイルでもかな」

「そんなので判断する人なんてね」

サラもこう言いました。

「碌な人じゃないから」

「サラもこう言うんだ」

「そうよ」

まさにといいます。

「そんな人は最初から無視していいから」

「じゃあ若し僕の内面を理解してくれる人がいてくれて」

「もういるし」

「もうなんだ」

「そう、だからね」

それということです。

「先生があくまで気付かないなら私その人を応援して」

「そうしてだね」

「兄さんと一緒になってもらうから」

「その人は誰かな」

「兄さんの知ってる人よ」

サラははっきりと告げました。

「その人はね」

「僕がなんだ」

「そう、だからね」

それということです。

「私はね」

「その人を応援するんだね」

「全力でね」

「そうなんだ」

「そう、兄さんがあくまで気付かないなら
それならというのです。」

「そうするわ、それとね」

「それと？」

「日本は妖怪も多いわね」

「そうだよね」

「もう何かとね」

「それこそ図鑑が出来る位だよ」

「妖精と一緒にね」

イギリスのということです。

「それは」

「そうだね」

「妖怪の国でもあるのね」

「そう言っているね」

先生も否定しませんでした。

「そしてその妖怪ともね」

「人は共存しているのね」

「そうなんだ」

「本当にイギリスと一緒にね」

「イギリスも人間と妖精と一緒にいるしね」

「だからね、ただね」

「ただ？」

「幽霊はね」

「こちらはといいますと。」

「日本のものは怖いわね」

「怨霊だね」

「そちらはね」

「実は日本の妖怪は怖いものが少なくてね」

「怨霊が怖いよね」

「そうなんだ」

先生はサラにお話しました。

「この国はね」

「そうよね、しかしね」

「今度は何かな」

「兄さんすっかり日本に馴染んでね」

サラは先生を見て微笑んで言いました。

「日本人より日本人らしくなってきたかもね」

「そうかな」

「もうずっと日本に住むのね」

「そのつもりだよ」

このことは実際にとです、先生はサラに答えました。

「もう殆ど決めたよ」

「それじゃあもう結婚する人は」

その相手の人はといいますと。

「あの人ね」

「あの人？誰かな」

「私はもうわかってるから」

サラは先生にやれやれというお顔で述べました。

「私も動くわ。それでね」

「そのうえでなんだ」

「兄さんに結婚してもらうから。そして兄さんとあの人なら」
笑顔で言いました。

「きっと幸せになれるわ」

「その人が誰か気になるけれど」

「兄さんがわからなくても」

それでもというのです。

「私はわかってるし他の皆もだか」

「それでなんだ」

「任せてね、それで決まった時に驚いてね」

「そうなるんだ」

「ええ、それが何時になるかわからないけれど」

それでもというのです。

「兄さんは絶対に幸せになるわよ」

「絶対なんだ」

「そうよ、安心してね」

「そうだといいいけれどね」

「ただ。私達は骨が折れるでしょうね」

サラはこのことは苦笑いで言いました。

「覚悟していくわ」

「迷惑かけるなら御免ね」

「謝ることはないわ、じゃあまた来日した時にね」

「その時にだね」

「その人と会うから」

「そうするんだ」

「ええ、是非ね」

笑顔で言ってそうしてでした。

サラはお茶を飲みました。そうしてこれからのことを考えますが

先生は全く気付かないでそうしてサラと皆に聞きますが皆はそのうち
ちにねと言うだけでした。

ドリトル先生と牛女 完

2020・9・11

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~25074

ドリトル先生と牛女

2020年11月17日 21時20分発行